

保護者と教員に対する意識調査

保護者(家庭)と教員(学校)の 共通理解に向けて

**もっと話し合いたいこと・学校と家庭の役割分担・子育ての
ストレス・学校の様子を知る・不満や共感を感じたときの行動・
学校教育についての考えなどの調査結果を読み解く**



**静岡県教職員組合立教育研究所
調査部**

保護者も 教員も もっと知りたい！話したい！



保護者

★ 先生と もっと話したいこと (%)



保護者は
学校での子どもの様子を
もっと知りたいんだな。



教 員

★ 保護者と もっと話したいこと (%)



先生は
話したいことが
いっぱいね！

2013.10 静教組立教育研究所調査部

『保護者と教員のコミュニケーション意識調査』

調査対象：保護者2,032人、教員1,421人

回収率：保護者90.3%、教員75.1%

もっと
家での様子を
知りたいのね。



★ 保護者が話し合いたいのは「子どもの学校での様子」

授業中、話を
しっかり聞いて
いるかしら？

友だち関係は
うまくいってる？

学校での
普段の様子を
知りたいわ！



保護者が先生ともっと話したいと考えているのは、「友だち関係のこと」「授業の仕方やすすみ方」「学校での子どもの悪いところ」などです。

参観会で子どもの様子を見ることができますが、保護者が知りたいのは、「普段の子どもの様子」です。学校での学習の様子や友だちとの関わりなど、もっと先生から聞きたいと思っています。

★ 教員が話し合いたいのは「家庭での様子」

教員が保護者ともっと話したいと考えているのは、「家での勉強のさせ方や宿題」「親子の関わり方」「しつけの仕方」などです。

子どもが生き生きと学び、力を伸ばすには、家庭との連携が欠かせません。学校での様子がいつもと違う時には、「家庭で何かあったのかな」ということも考えます。家庭での様子を保護者に聞いて、学校での適切な支援や指導に生かしたいと思っています。

いつもと様子が
違うな。家で何か
あったのかな？

保護者は
学校での様子を
知っているかな？

家庭での様子を
聞いてみたほうが
いいかな。



★ 保護者と教員 話したいことにはズレがある！？

★ もっと話し合いたい！でも時間がとれない…

保護者が話し合いたいのは「学校での様子」。教員が話し合いたいのは「家庭での様子」。互いに見えない部分を知りたいと考えています。また、教員は保護者と同様に高い割合で「友だち関係のこと」「学校での子どもの悪いところ」「授業中の子どもの様子」など、学校での様子についてももっと話し合いたいと思っています。コミュニケーション活性化のポイントは「子どもの学校での表れ」になりそうです。

「先生は忙しそうだから…」「わざわざ伝えるまでもないかな…」と互いに遠慮していませんか？保護者と教員のよりよいコミュニケーションは、子どもにとってもプラスになります。

学校でのがんばり
ももっと伝えてい
こう！



家で気になること
も先生に相談して
みよう！

⇒ 調査結果の詳しい考察は p.4～9 へ！

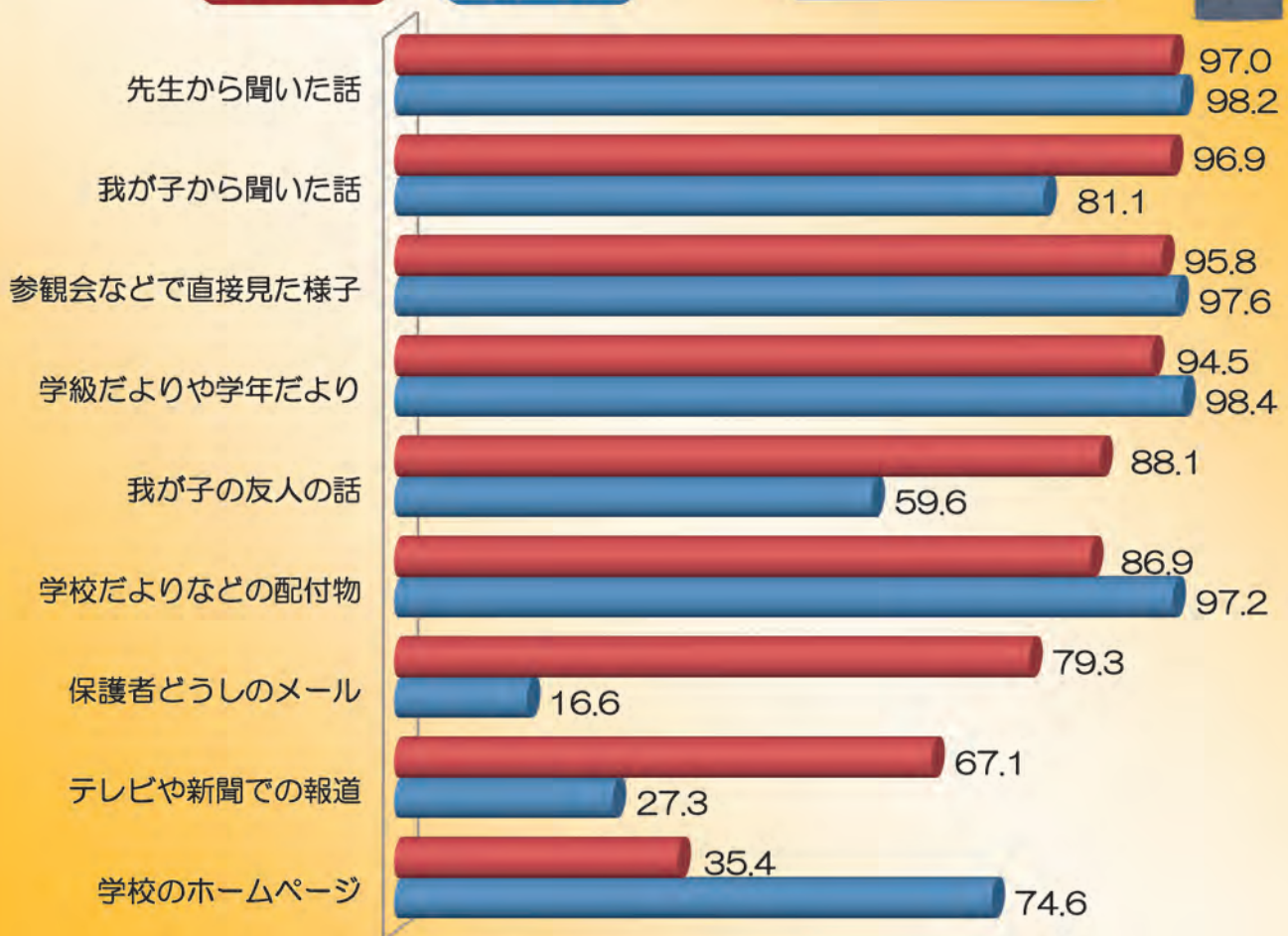
知りたい！知らせたい！ 学校の様子



★ 学校の様子を知るうえで 参考にすること・重視してほしいこと (%)



保護者は、自分で見たり
聞いたりしたことを参考
にしているのね。



☆ 保護者は「参考にする」「どちらかといえば参考にする」、
教員は「重視してほしい」「どちらかといえば重視してほしい」と答えた人の合計を
割合で示しました。

2013.10 静教組立教育研究所調査部

『保護者と教員のコミュニケーション意識調査』

調査対象：保護者2,032人、教員1,421人

回収率：保護者90.3%、教員75.1%

メールやホームページ
について、先生の期待
と保護者が実際参考に
するかには、意識の差
があるな。



★ 保護者と教員の思いが一致！発信者の思いが伝わる情報を大切に



私たち教員から
直接聞いた話や
学級だより・学年だ
よりを参考にしてい
てくれるのね。

学校の様子を知るうえで教員が重視してほしいと思
っている「**学級だよりや学年だより**」「**先生から聞
いた話**」「**参観会などで直接見た様子**」を保護者も
参考にしています。

教員が「伝えたい」と思って発信していることを保
護者も「知りたい」という思いで受け取っています。
発信者の思いが伝わる情報が大切にされています。

★ 「我が子から聞いた話」も参考にしています

保護者は「**我が子から聞いた話**」を参考にする人
が多いです。やはりタイムリーで身近な情報と言えま
す。

教員も、保護者に対して「我が子から聞いた話」を
重視してほしいと思っていますが、保護者ほどその割
合は高くありません。友だちとのもめごとがあったと
きなど、我が子の話だけで判断しないでほしいといっ
た思いがあるのではないのでしょうか。

こちらから聞かなくても
子どもの方から学校での
ことを話しますよ。

授業の様子や
友だち関係など
学校での様子が
わかって安心
しますね。



★ あまり参考にされていない「ホームページ」

★ 「保護者どうしのメール」を参考にするのはなぜ？

「学校のホームページ」については、教員が重視し
てほしいと思うほどには保護者は参考にしていないよ
うです。保護者が求める情報を発信できるか、ひと工
夫が必要かもしれません。

「保護者どうしのメール」について保護者が参考に
する割合が高いのは、子どもの持ち物や参観会の時間
など、ちょっとしたことの確認に使われることが多い
からです。教員は、内容が見えないことへの不安や正
確な情報に基づかないのではないかという疑問をもっ
ているかもしれませんが、それほど気にする必要はな
さそうです。

ホームページで
何を発信したら
いいのか工夫が
必要ね。



保護者どうしの
メールは、行事の
時間や持ち物な
ど、ちょっとした
ことを確認するの
に便利なんだよな。

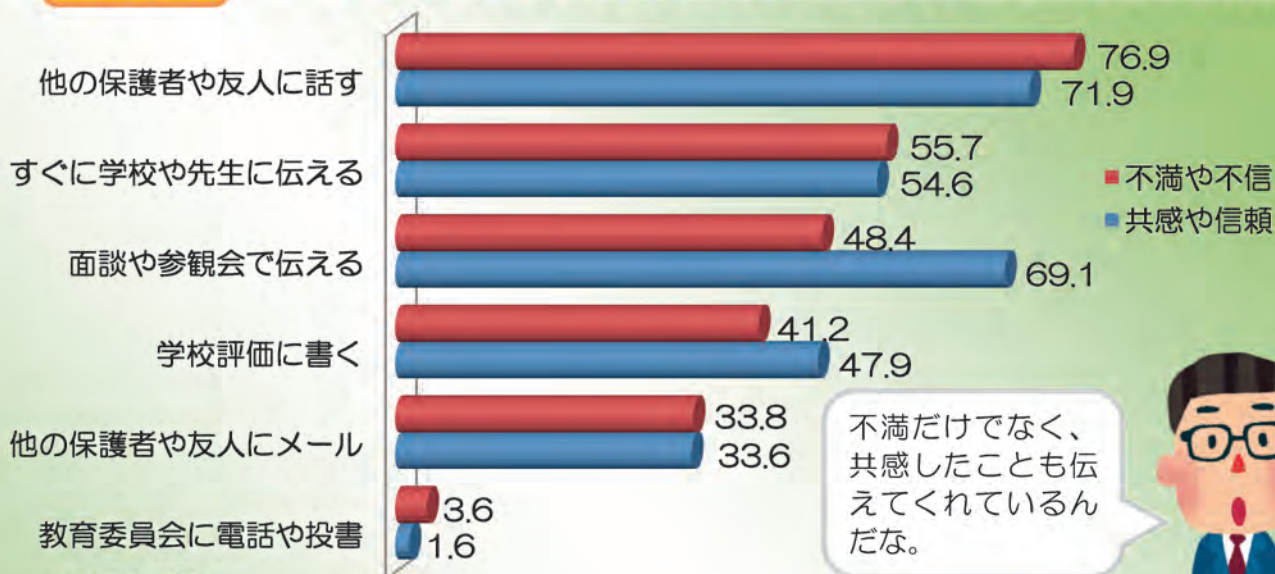


どうしていますか？ 不満や共感を感じたとき



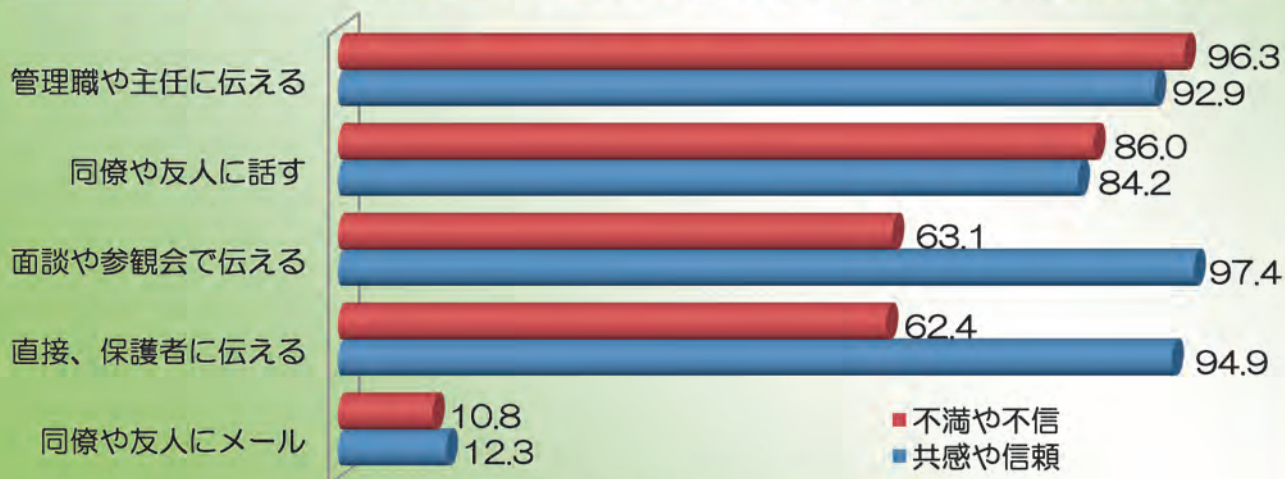
保護者

★ 学校や教員に不満や共感を感じたときの行動 (%)



教員

★ 保護者に不満や共感を感じたときの行動 (%)



☆ 「不満や不信」「共感や信頼」を感じたことのある人で、「たびたびしたことがある」「たまにしたことがある」と答えた人の合計を割合で示しました。

2013.10 静教組立教育研究所調査部

『保護者と教員のコミュニケーション意識調査』

調査対象：保護者2,032人、教員1,421人

回収率：保護者90.3%、教員75.1%

不満も共感も先生たちの中で共有することが多いのね。



★ 保護者は「共感や信頼」も同じように伝えている

運動会での演技
とても
よかったわ！



早速、
本読みカードに
書かなくちゃ！

今度の参観会で
先生にも
直接伝えよう。

保護者は「不満や不信」を感じたときの方が学校や教員に伝えようとするのではないかと予想していましたが、保護者は、「共感や信頼」も同じように伝えています。

むしろ「共感や信頼」を感じたときの方が、面談や参観会のときに直接教員に伝えたり、学校評価に書いたりしていることがわかります。

★ 誰かと共有するのは教員も保護者も同じ

教員は、「不満や不信」「共感や信頼」を感じたときに、職員室で管理職や主任、同僚にすぐに話せるため、職員同士で情報を共有することが多いことがわかります。

保護者は、他の保護者や友人に話して共有していることがわかります。「すぐに学校や先生に伝える」保護者も約55%います。教員が同僚や友人にメールをする割合が10%ほどなのに対し、保護者が他の保護者や友人にメールをする割合が34%であるのは、すぐに話して共有する相手がいないという状況の違いからくるのではないかと考えられます。

『不満や不信』
『共感や信頼』を
誰かと共有した
いのは、保護者も
同じだよな。



★ 受け取って共有したい「共感や信頼」のメッセージ

保護者は、「共感や信頼」を感じたときにも、学校や教員に伝えたり、学校評価に書いたりしているということがわかりますが、教員からは、「保護者からの共感や信頼のメッセージを受け取ったという印象は薄い」という声がありました。「共感や信頼」は、「よかった」というような包括的な表現で伝えられることが多いことに対し、「不満や不信」は具体的に指摘されることが多く、何らかの手だてが求められるため、必要以上に強く受けとめてしまっているのかもしれません。

保護者と教員が「共感や信頼」を共有したり、互いに元気が出る学校評価になるよう工夫したりすることで、保護者と教員のよりよいコミュニケーションにつながり、信頼関係が深まるのではないのでしょうか。

保護者からの「共感や
信頼」のメッセージを
しっかり受けとる
ようにしなくては。



学校評価って、
よくなったことを
書くようにしたら
いいんじゃないかしら。

⇒ 調査結果の詳しい考察は p.26～30 に掲載しました。



学校教育について どのように考えますか？

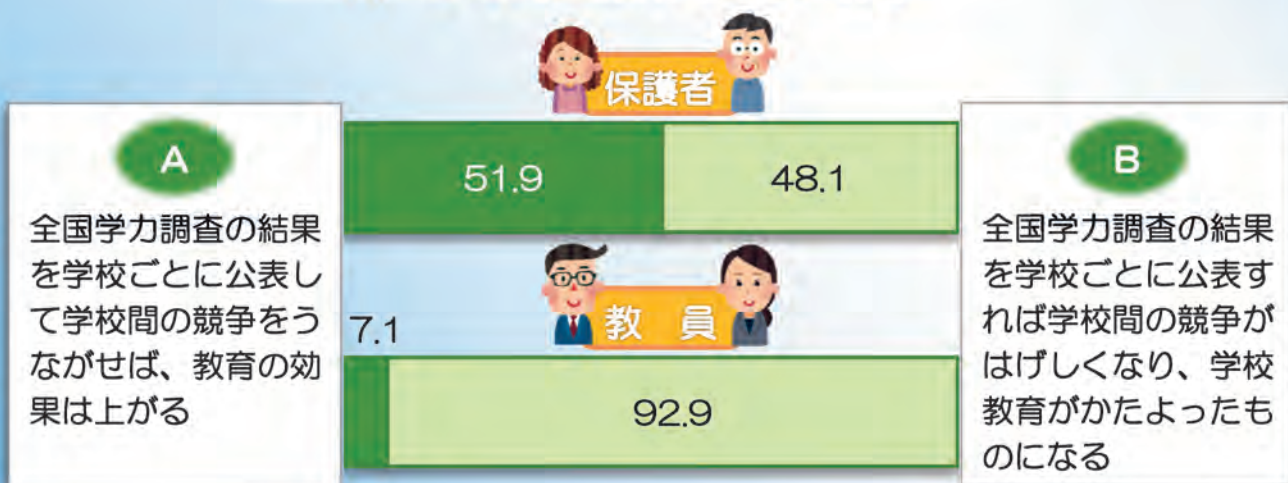


★ 学校が力を入れること（％）



大多数の保護者と教員が「苦手な子どもに力をつける」を選んでいきます。まず、子どもたち全体の向上にとりくみ、そのうえで「得意な子どもの力を伸ばす」ことが期待されていると考えられます。

★ 学力調査結果の公表（％）



調査の時期は「静岡県の学力」がメディアで大きく取り上げられた時期でしたが、保護者の「結果公表の効果への期待」と「弊害を危惧する声」が半々だったことは、保護者が「子どもの学力」や「学校教育のあり方」に対して冷静に受け止めていると判断できます。



★ 学校への保護者のかかわり (%)

A

学校からよりよい教育サービスを受けるため、学校に問題があれば指摘し改善を求めたい

26.4

73.6



B

学校に問題があれば、指摘するだけでなく、学校(先生)や他の保護者・地域と協力して問題解決にとりくみたい

A

よりよい教育サービスを求める保護者の要求や問題の指摘には、学校として応える義務がある

11.0

89.0



B

保護者には、学校の問題を指摘したり、教育サービスを求めたりするだけでなく、学校や他の保護者と協力して問題の解決にとりくむことを望みたい

学校の問題改善に保護者が協力・参加することに対して、保護者も教員も積極的な考えをもっていることがわかります。保護者の参加意識が高いことを心強く感じます。学校が保護者と連携を図りながら改善をするためには、保護者と教員(学校)のコミュニケーションを深めることが求められます。

また、学校の現状を考えると、保護者の協力・参加希望と学校のニーズをコーディネートする人や組織が必要です。



☆ 「Aに近い」「どちらかといえばA」の合計をA、「Bに近い」「どちらかといえばB」の合計をBとしました。無回答・不明を除いて全体に対する割合で示しました。

2013.10 静教組立教育研究所調査部

『保護者と教員のコミュニケーション意識調査』

調査対象：保護者2,032人、教員1,421人

回収率：保護者90.3%、教員75.1%

⇒ 調査結果の詳しい考察はp.34～41に掲載しました。

目次

調査を振り返って	共同研究者 静岡大学教授 荻野 達史	1
はじめに		3
I もっと話し合いたい「子どものこと」		4
1 保護者・教員ともに、「もっと話し合いたい」と考えている「学校での子どもの様子」		
2 保護者・教員で回答が分かれた「子どもの指導に関すること」		
3 先生に相談しにくい？「家庭のこと」		
II 重なっている学校と家庭の役割分担		10
1 保護者が「おもに学校で」と考える傾向が強い「基本的な生活習慣」「公共のマナー」		
2 教員も「おもに学校で」と考えている、「防災や安全」「喫煙や薬物」「進学や進路」に関すること		
3 保護者・教員ともに「自分たちが関わる」という回答が多かった、「人との接し方や友だち付き合いの仕方」		
4 家庭で引き受けにくい「飼育や栽培などの自然体験」		
III 子育てのストレス：家庭のしつけや教育が子どもの将来に大きく影響する		16
1 家庭教育は、子どもの将来に影響する		
2 「子育てに自信がある」と答えた保護者のプロフィール		
3 子育ての疲れや負担感		
4 子どもへの投資：できるだけよい条件を保障してやりたい		
IV 学校の様子を知るうえで参考にすること、重視してほしいこと		20
1 保護者・教員ともに、「参考にすること」「重視してほしい」と考えるのは、発信者の顔が見える情報		
2 「我が子の話」から想像する学校生活の様子や先生のこと		
3 教員の不安：情報が正確に伝わっていないのではないか		
4 「学校のホームページ」：情報への距離が遠いと「参考にしない」？		
V 「不満や不信」「共感や信頼」を感じたときの行動		26
1 似ている「不満や不信」「共感や信頼」を感じたときの行動		
2 「不満や不信」「共感や信頼」を直接相手に伝える：「直接相手に話す」「面談や懇談会で伝える」		
3 「不満や不信」を感じたときの行動：「友人や同僚に話す」「メールする」		
4 保護者からの「共感や信頼」のメッセージを受け取る		
VI 学校教育で大切にしたいこと		31
VII 公教育として考えること		34
1 どの子にも同じような教育を		
2 学校が力を入れるべきこと：「学力の育成」より「人格形成」を		
3 全国学力・学習状況調査結果の公表は慎重に		
4 保護者の学校へのかかわり：「改善を求める」より「改善に参加を」		
まとめにかえて		42
資料（調査用紙：保護者・教員 単純集計結果：保護者・教員）		44

調査を振り返って

共同研究者 静岡大学 荻野達史



私が教育研究所調査部の共同研究者として企画から調査票作成、分析の全過程に関わるようになったのは、この調査研究の前に行った「教職員ストレス要因調査」からでした。学校での現場経験の豊富な先生方と調査テーマを決め、質問・回答選択肢に頭を悩ませ、さらに調査結果の数値を先生方の経験と視点からも読み解いていく作業は、私のような一社会学研究者にとっては極めて刺激的な過程であり、貴重な勉強の機会となっています。

そして、この度の「保護者・家庭と教員・学校のコミュニケーション：共通理解に向けての意識調査」については、ただ結果に見られる保護者／教員の回答傾向のズレや一致にだけ目を向けるべきものではなく、調査研究の全過程を今一度振り返っておくことが意味深いことであるように感じています。なぜなら、この調査研究は、地域に根ざした職業団体ないしはそれを母体とする研究所が行うものとしては、格好のモデルケースを提供しているように考えるからです。

所報の冒頭部「はじめに」にありますように、この調査の企画は、前回の教職員ストレス調査の結果やそれを読み解いていく作業のなかで用意されました。総体的にみれば同僚関係には恵まれている静岡の教職員ではありましたが、保護者との関係には相当に緊張のあることも窺われました。また、調査部会合での分析過程で、所員の方々が相互に、教員としての体験を語り、日常的に行ってきた配慮を具体的に聞くにつれ、保護者と教員とのコミュニケーションについて検討する必要性は、調査部のなかで相当に共有されていたように思います。こうして現場にとって重要なテーマを展開・深化させられたことは、一見当たり前のように思われますが、実際にはなかなか難しく貴重なことであったと思います。

次に、調査票のサブタイトル「共通理解に向けての意識調査」ということが、決して“調査の通りをよくするレトリック”ではなかった、ということを強調したいと思います。しばしばマス・メディアでは保護者－教員の関係があたかも敵対的であるかのようなイメージを構築しがちです。それに対して、冷静に相互の意識のズレや一致がどのような点で生じているのか、実際のコミュニケーションを図る回路や方法に問題はないのか、また教員の側から見ればともすると見えにくい保護者のストレスにも思いをめぐらせる必要があるのではないか、そうした問いを調査部では一つ一つ検討することにしました。それはひとえに、保護者－教員の信頼関係を築くための理解と方途を真摯に考えた結果でした。

人と人がコミュニケーションをとる際、相手の言っていることを信じるのか、信じないのか、あるいは相手のいうことに多少腑に落ちないことがあっても、ひとまず相手の立場も含めた理解を試みるか、そうはしないのか。こうしたことは、ただその場で言われた言葉によって決まるのではなく、それ以前からある「関係性」に大きく依存します。信頼関係のベースがないところで、新たに生じた問題に相互が向き合うということでは、よい方向でコトを進めるのはきわめて困難です。相互の意識のズレも、まずはそれとしてきちんと認識できるようにすることを含め、この調査は基

礎的な信頼を育てるための一助となることを願い企画・実施されたものです。

この思いは、調査票配布・回収後にも貫かれました。まず、集計結果（数値）をより適切に読み解くために、もともと教員である所員ばかりでなく、保護者の方を2名、検討の会合にお招きし、様々な語っていただきました。このバランス化は解釈を慎重なものにしたと思われます。たとえば、Ⅰ「話し合いたいこと」では、項目によっては保護者／教員でかなりの差が開きましたが、これも1クラスをもつ教員の感覚と自分の子どもについて考える親御さんの感覚との相違である可能性が高いこと。あるいは、後述の座談会でも確認されましたが、メールの使用について、実際には多くの親御さんの利用法は持ち物や集合時間の問い合わせであるといったことも、留意すべき情報として共有されました。また、Ⅶ「公教育として考えること」の設問の一つに「経済的に不利な家庭の子ども」に学校はより手厚く接するべきか否かという質問がありましたが、保護者と教員ではその配慮の内容についてイメージするものが異なることも気付くことになりました。こうした慎重な解釈は所報の本文に多く反映されています。

また、この量的な調査結果をもって、親御さんを集めたグループ・インタビューを実施したことも、相互理解を深める試みの一部でした。「ちょっと一息：ほごしゃのほんね」として挿入されている座談会でのくだけた語りは、静教組のネットワークがなければ、なかなかアクセスできない貴重な調査データです。そして調査票による調査結果により深い理解と対策へのアイデアをもたらすものでもあります。たとえば、そもそも話す時間をどう確保するのか、話しやすさや学級だよりの魅力を醸し出すための工夫とは、どのような出来事が小さな不満や不信を生むのか、そして相互に肯定的な情報を送れるようにする仕掛けとは。そうした様々なことを考えさせてくれます。

以上、共同研究者としてこの調査の全過程に携わった者として振り返ってみますと、集計された数値ばかりではなく、企画から分析までの流れや目的に即して実行された諸々の事柄にも多く注目すべき点があることを、ここで押さえておきたいと思いました。そのため、この調査結果をもとに研究所創立40周年シンポジウム「保護者と教員の信頼関係を深めるために」が企画され、パネリストはじめ多くの参加者から貴重な発言が生み出されたことは、関係した一研究者として非常に喜ばしい出来事でした。

集計結果については、既に本文で十分に検討されていますので、私の解説は屋上屋を架すだけのことになると思います。ただ敢えて確認しておくとしたら、上記のように慎重に数値を解釈すれば、保護者／教員の間で、その意見分布としては、それほど意識の齟齬、学校教育に求めるものや果たされるべきものと考えていることにはさほどの相違は無いこと（たとえばⅥ「学校教育で大切にしたいこと」の部分に顕著）。ただし、お互いの不安・疑問、あるいは肯定的な思いを伝える時間や回路、方法については一定の工夫や継続的な議論が必要なこと（たとえばⅣ「学校の様子を知る上で参考にすること、重視してほしいこと」あるいは座談会のコラムに顕著）。この二点を確認しておきたいと思います。

最後に。調査部の一員と考えればいささか自画自賛めいた文章となりました。しかし、この調査研究が実り多いものとなったのは、ひとえに回答にご協力いただいた保護者・教員の皆様、組合支部長など要職にありながらその業務の合間を縫って議論を繰り返した調査部メンバーと事務局長、そして自ら統計ソフトを操り膨大な資料を作成し丁寧な検討を行った細川研究所長によるものです。貴重な経験をいただきましたことに、この場を借りて感謝の意を表したいと思います。

はじめに

調査の実施まで

- ・2011～2012年度において静教組立教育研究所「調査部」では、「教職員のストレス要因調査」を行い、教職員のストレスの発生要因とその緩和について明らかにしました。しかし、ストレスの要因の一つである「保護者との人間関係」については十分な分析ができず、「保護者との人間関係」についてもう少し踏み込んだ調査を実施するという課題が残りました。
- ・教員と保護者との人間関係は、良好な関係が保たれていますが、時にはうまくいかないこともあります。その原因として、教員と保護者それぞれが抱える「ストレス」や「疲れ」が考えられます。そこで、
 - *教職員が「保護者との人間関係にストレスを感じている」ということは、保護者にとっても「教員や学校との関係に（何らかの）ストレスを感じている」のではないか
 - *保護者も、子育てや家庭教育に疲れを感じ、失敗できないというストレスを感じているのではないか
 - *双方のストレスについて考え、コミュニケーションの課題を明らかにすれば、ストレスの緩和や原因排除の手がかりを見つめることができるのではないかと考えました。

調査の目的

- ・教員と保護者のコミュニケーションの内容やその手段、学校教育への期待や考え方などについてお互いの共通点と相違点を明らかにしその結果を共有します。共通点をさらに広げ信頼関係を深める一方、違いの見られたことについては、その背景を考えることを通して、お互いの立場や考え方の違いを認め合い信頼関係につなげます。
- ・教員（学校）と保護者はそれぞれ様々な方法によって情報の発信をしています。たとえば、教員（学校）は「学級だより」や「(学校の) ホームページ」などで情報を発信していますが、保護者にそれが十分に伝わらないこともあるかもしれません。実態を明らかにすることによって、「読んでください」と呼びかけたり、読みやすいような工夫をしたり、発信の方法を変えたりするなどの対応ができると考えます。
- ・調査結果を懇談会や保護者面談などの話題にすることで、お互いの立場やそれぞれの事情について理解し合い、相互の信頼がより深まることが期待されます。

調査の設計と実施

<調査の設計>

- ・教員と保護者に対し、同じ時期にできるだけ同じ内容の質問をすることにより、共通点や相違点を把握することを考えました。
- ・前回実施した『教職員のストレス要因に関する調査』（所報No.148）を先行研究として調査内容を検討しました。

<調査の対象と調査時期>

- ・2013年10月に、組合員名簿から無作為に抽出した教員1421人と、調査部員が所属する地区の学校から調査対象校を選び、対象学年の学級の保護者全員2032人について質問紙法により調査を実施しました。回収率（回収数）は、教員75.1%（1067）、保護者90.3%（1835）でした。

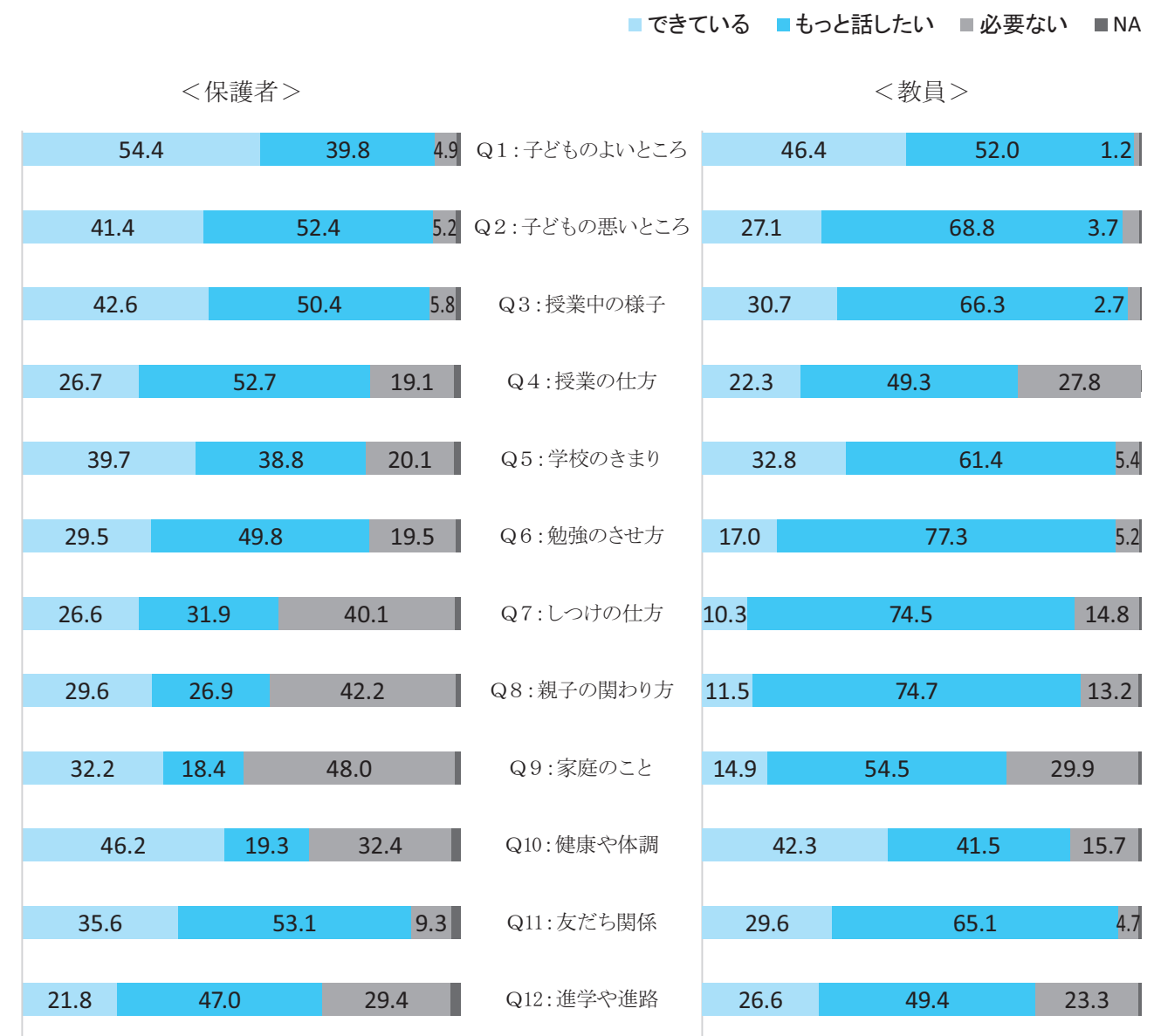
<聞き取り調査>

- ・質問紙法による調査ではすくい取ることが難しい保護者の気持ちや考えを把握するために県内数カ所で保護者の方に集まっていただき（1ヶ所につき5～8人）、ふだん感じている「先生とのコミュニケーション」について自由に話してもらいました。記述にあたっては、できるだけそのときの話の様子や雰囲気がわかるように努めました。

先生・保護者と話し合いたいことについてお聞きます。次のことについてどのように思っていますか。あてはまる番号を○で囲んでください（以下：話し合いたいこと）

I もっと話し合いたい「子どものこと」

図1：先生⇄保護者と話し合いたいこと



※NA（ノー・アンサー）は無回答や指定外の回答を示す。具体的な数値は巻末の「単純集計結果」を参照してください。

調査結果の解釈：3つのパターンに分けて

図1は、保護者と教員の「話し合いたいこと」についての調査結果を示したものです。保護者も教員も「しつけの仕方」「親子の関わり方」「家庭のこと」を除くと「話し合う必要を感じない」という回答の割合に大きな差がありません。これは、「保護者と教員が話し合うことが必要だ」という基本的な合意ができていることを示しています。

調査結果を概観すると「もっと話し合いたい」を選択した教員の割合が保護者に比べ高くなっています。これは保護者と教員の立場の違いが関係していると考えられます。教員は、クラスの中に一人でも保護者と話し合う必要のある子どもがいると「もっと話し合いたい」を選択します。保護者は、自分の子どもについ

て「話し合う」ことを必要がなければ、「もっと話し合いたい」を選ばないでしょう。教員は「(クラスの)子どもたち」を視野に入れ、保護者は「(自分の)子ども」を視野に入れています。このような視点や視野の違いが回答傾向に反映していると考えられます。保護者と教員の立場の違いに留意しながら調査結果を読み解く必要があると考えます。

回答の選択肢は「話し合いができて」「もっと話し合いたい」「話し合う必要を感じない」の3つを設けました。「話し合う必要を感じない」の回答に注目しがちですが、話し合いが「できて」から「(これ以上)話し合う必要を感じない」と答えた人もいますと考えます。ここでは、「もっと話し合いたい」の回答に注目し、調査結果を

- 1 保護者・教員ともに高いもの
- 2 保護者と教員に差が見られるもの
- 3 保護者・教員ともに低いもの

の3つに分け、それぞれの回答結果を見ていくこととします。

1 保護者・教員ともに、「もっと話し合いたい」と考えている「学校での子ども様子」

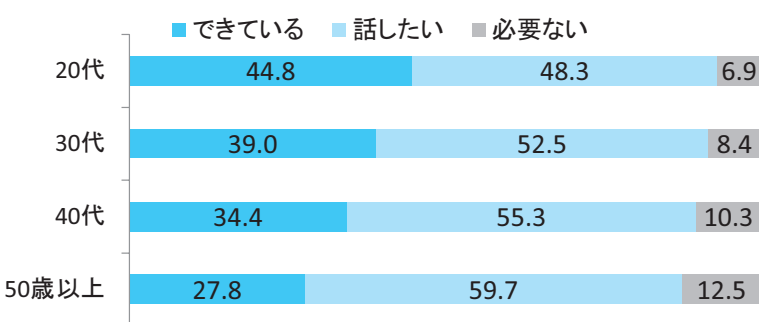
学校での子どもの様子について知りたい

保護者・教員とも「話し合いたい」を選択した割合が高かったものとして、「学校での子どもの悪いところ」、「授業中の子どもの様子」、「家での勉強のさせ方や宿題」、「友だち関係のこと」があげられます。いずれも学校での子どもの様子についてのことです。

保護者は、話し合いたいというより、学校での子どもの様子を(先生から)聞きたいと考えているのかもしれません。

また、図2に見られるように、回答者の年齢が高くなると「話し合いたい」を選択

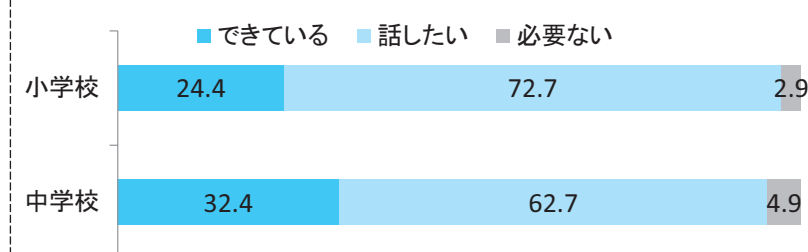
図2：話し合いたいこと「友だち関係」×年齢（保護者）



する割合が高くなっています。年齢が高くなり、子育ての経験を重ねることによって、子どもの様子について(教員と)話しをする気持ちのゆとりが生まれたり、教員と話すことへの抵抗が取り除かれたりすることが考えられます。保護者の年齢が高くなるにしたがって「話し合いたい」を選択する割合が増える傾向は、「友だち関係のこと」だけでなく「教員と話し合いたいこと」についての回答全体に見られました。

一方、教員については、質問項目により校種との相関が見られました。小学校では「授業中の様子」、中

図3：話し合いたいこと「子どもの悪いところ」×校種（教員）



学校では「子どもの悪いところ」について、「できて」が多く、その分「話し合いたい」が少なくなっています(図3)。

年齢が低い子どもについては、「よいところを保護者と共有しながら子どもを伸ばしたい」という考えがうかがえます。一方、中学校で「子どもの悪いところ」

について「話し合いができて」という回答が増えるのは、多様化し深刻さを増した子どもたちの抱える問題を保護者に伝え、協力しながら対応を進めようとしているからだと考えます。

2 保護者・教員で回答が分かれた「子どもの指導に関すること」

「授業の仕方やすすめ方」、「進学や進路のこと」、「しつけの仕方」、「親子の関わり方」などについては、保護者と教員の回答傾向に違いが見られました。

保護者の「話し合いたい」という回答が高かった「授業の仕方やすすめ方」「進学や進路のこと」

「授業の仕方やすすめ方」や「進学や進路のこと」については、保護者の「話し合いたい」を選んだ割合が高いのに対し、教員が選んだ割合はそれほど高くありません（図4）。

保護者が「話し合いたい」「様子を知りたい」と思っていることは「1」で触れたように、学校での子どもの様子です。多忙化がすすむなかで、保護者の「もっと話し合いたい」という声に教員がどのように応えるか、難しい課題です。

「進学や進路」については、インターネットで進学先の学校の様子を調べることができますが、学校の「レベル」や受験の難易度などの具体的なデータについての情報は学校が多くもっています。学年が進むにしたがい保護者の「話し合いたい」の割合が高くなっています（図5）。保護者は進路についての相談と併せ進学先の学校についての情報を得たいと考えていることが推測されます。

図4：話し合いたいこと「授業の仕方」（保護者・教員）

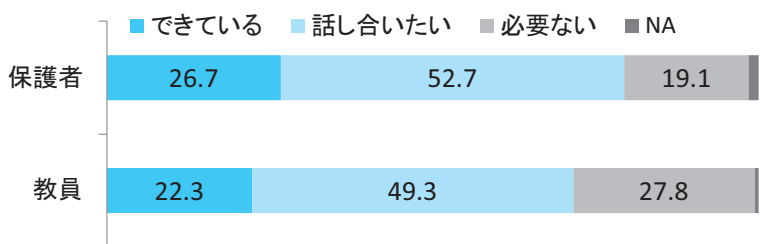
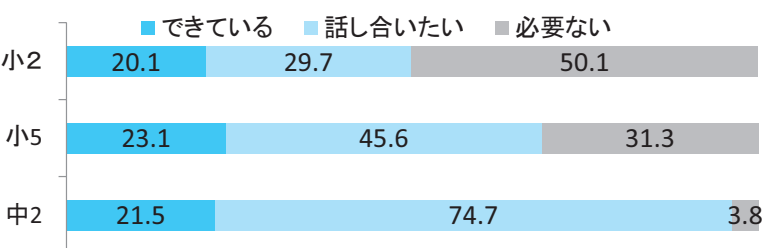


図5：話し合いたいこと「進学・進路」×回答学年（保護者）



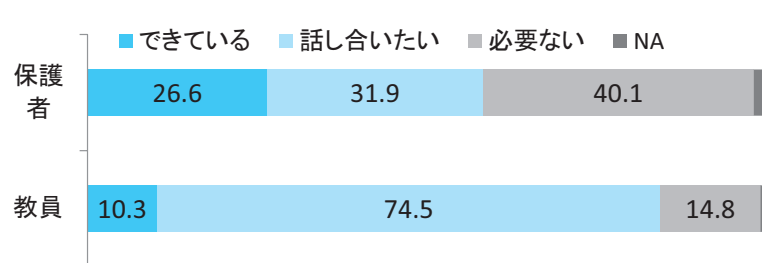
保護者に比べ、教員の「話し合いたい」という回答が高かった「しつけの仕方」「親子の関わり方」「健康や体調のこと」

保護者に比べ、教員が「話し合いたい」として選んだ割合の高かったものに「しつけの仕方」「親子の関わり方」「健康や体調のこと」があります。

図6に見られるように、「しつけの仕方」について、保護者は「先生（学校）に相談することではない」と考えています。学校と家庭の役割について聞いた「基本的な生活習慣に関すること」（次項Ⅱ参照）について「おもに家庭が関わる」と答えた保護者が89.7%いたこともそれを裏付けています。

教員が「しつけの仕方」について「話し合いたい」と考える理由はどこにあるのでしょうか。教室での集団生活の約束が守られなかったり、問題行動を起こしたりする子どもが少なからずいます。学びの基本的な場である学級づくりをすすめる上で、子どもたちが「基本的な生活習慣（しつけ）」を身に付けていることは基礎的な要件になります。教員が「しつけの仕方」について保護者と話し合いたいと考える理由はこのあたりにあると考えます。

図6：話し合いたいこと「しつけ」（保護者・教員）





ちょっと一息：ほごしゃのほんね ～その1～

＊質問紙による調査に加え“保護者への聞き取り調査”を県内数力所で行いました。普段感じている学校や教員とのコミュニケーションについて「ほんねのおしゃべり」をしていただきました。

担任の先生と話しをする時間って、1年間でどのくらい

「先生と話す機会は、家庭訪問と夏休み前の面談のときくらいかな。話す時間ってないよね」
「面談のときだって忙しそうだし。参観会の後の懇談会も話したくても個人的な話しはしにくいし」
「年間で、30分はないかな。15分くらいかな…」
「そう、15分くらいだね。だから問題がなければ、そのまま、話しをしないで終わってしまう」

もっと時間がとれるならば…、先生と話したいこと

「子どものことについて話したい。学校で子どもがどんなかってことを聞きたい」
「そう。子どもが学校でどんな風に過ごしているかってこと」
「自分たちが見ていないところでの子どもの様子だね」
「それが聞きたい」
「授業中の態度も気になる。ちゃんと先生の言うことを聞いているか」
「態度のことが聞きたいって、ある。質問したりしてるかって」
「私も、授業態度。ちゃんと聞けてるかなってこと」
「それから、先生が『やんなさい』って言ったときに、すぐに行動に移せているか。うちの子の場合、それが心配なんだよね」
「どうやって過ごしているんだろうってこと。授業態度もそうだけど友だちとのことも聞きたい」
「そう、友だち関係は知りたい」
「友だちとの関係のことは知りたい。うまくやってるか…」
「勉強のことは、まあ持っているもんだからしょうがないところもあるけれど、友だちとうまくやってるか、集団生活の中でちゃんとできているかということは気になる」
「うん。それはある。だんだん難しくなってるって言ってるから」
「うちの子好き嫌いが多いので、給食が食べられているかどうか。でも、先生が何も言っていないから大丈夫なのかなって思ってる。わざわざ電話して聞くことでもないか…と思って、（先生と）話したこないけど」
「聞きたいこと、本当は全部だね」（笑）

『特に言うことないんです』って言われると…

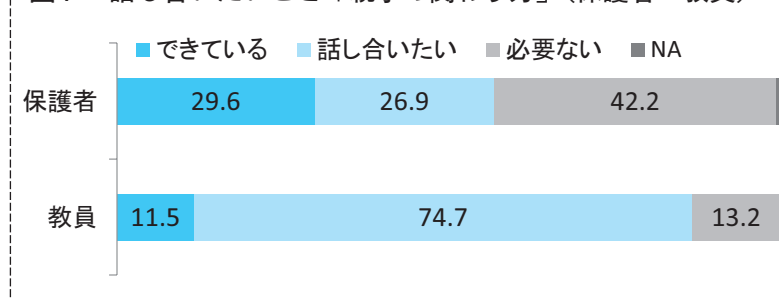
「家庭訪問のとき、先生から『特に言うことないんです』って言われちゃった。先生の方から言うことないって…、どういうことかなって。こっちから聞くこともないのかなって思っちゃって。うちの子目立たないからかな」
「先生の『特に言うことない』って言ってるの、悪い意味じゃないと思うんだよね。困ったことはないってことじゃないの」
「そうかも」
「どんなことでもいいから、給食の食べ方が遅いとか、些細なことでも教室のことを話してくれると『うちではこうです…』と話が長く思うんだけど」
「話のとっかかりの言葉としては、『特に言うことはありません』っていうのは、ちょっとね」

家庭内の問題について：保護者と教員の視点の違い

図7は、「親子の関わり方」について保護者と教員の回答傾向を比較したものです。「しつけの仕方」以上に両者の回答傾向に大きな開きがあります。保護者は、親子関係のような家庭内の問題は家庭で解決すべきだと考えているのでしょうか。家庭内の問題への「介入」を歓迎しないことも考えられます。

教員が「親子の関わり方」について「話し合いたい」と考えるのは、いたずらに家庭内の問題に介入しようということはありません。多くの教員が、親子関係などの家庭内の問題が子どもに影響を与え、落ち着いた学校生活を送ることが難しくしている事例を経験しています。

図7：話し合いたいこと「親子の関わり方」（保護者・教員）



また、教員はクラスの中に一人でも問題を抱えた子どもがいれば、「話し合いたい」と答えますが、保護者の場合は自分の子どもが該当しなければ「話し合いたい」と考えないでしょう。このような子どもに対する視点の違いも回答傾向に影響していると考えられます。

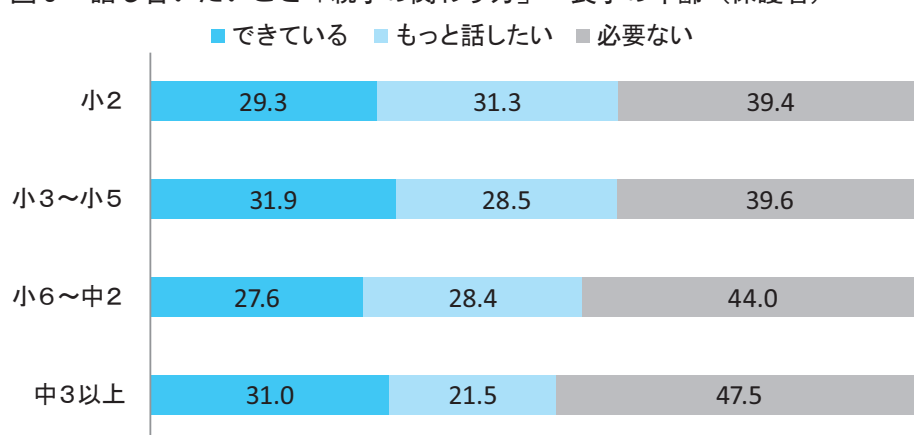
「健康や体調」についても保護者と教員

とでは回答傾向に大きな差が認められました。「親子の関わり方」と同じように、保護者と教員との子どもに対する視点の差によるものだと考えます。

長子の年齢、子育ての自信による回答傾向の違い（保護者）

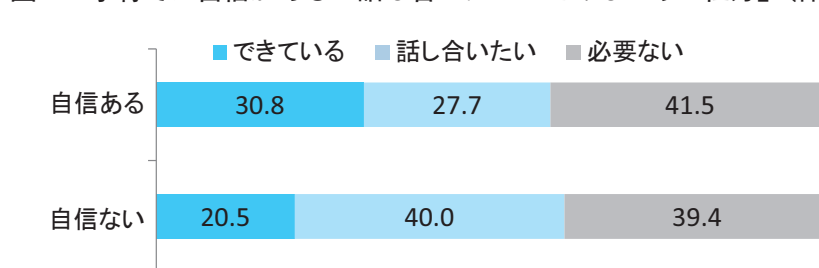
保護者の回答傾向を見ると、「親子の関わり」や「しつけの仕方」は、長子の年齢が高くなるにしたがって「話し合いたい」を選んだ割合が減り、「必要ない」の割合が高くなっています（図8）。保護者としての経験の蓄積や自信が、「話し合う必要を感じない」という判断につながっていると考えられます。また、子どもの年齢が高くなり、「話す時間が減っている」「話しても聞かない」「子どもに任せている」なども、理由として考えられます。

図8：話し合いたいこと「親子の関わり方」×長子の年齢（保護者）



「子育てに対する自信」と「しつけについて話し合いたい」とのクロス集計結果（図9）を見ると、子育てに「自信がない」と答えた人ほど「しつけの仕方」について「話し合いたい」を選んだ割合が高くなっています。

図9：子育てに自信がある×話し合いたいこと「しつけの仕方」（保護者）



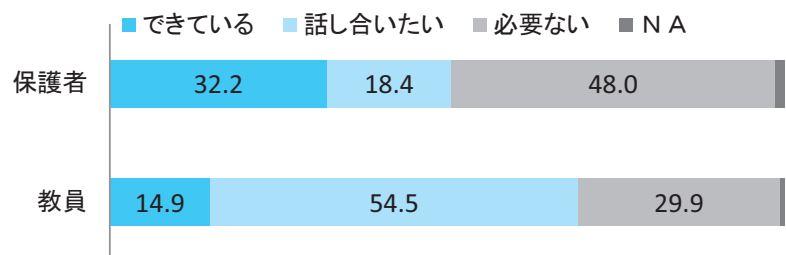
3 先生に相談しにくい？「家庭のこと」

保護者が「話し合いたい」を選んだ割合が20%以下だったものとして「健康や体調のこと」や「家庭のこと」（図10）があります。「健康や体調のこと」については子どもに対する視点の違いと考えましたが、「家庭のこと」については、子どもに対する視点の違いというより、家庭のことに介入してほしくない、家庭のことは先生に相談しにくいといった気持ちがあるためだと考えます。

教員が「家庭のこと」について「話し合いたい」を選んだ割合は50%を超えています。他の項目に比べ「話

し合いたい」を選んだ割合は低くなっています。教員にとっても「家庭のこと」や「健康や体調」など家庭内の問題やプライベートなど家庭の問題については踏み込みにくいということがあるのだと思います。それでも50%を超える教員が「家庭のことについて話し合いたい」と回答しているのは、子どもの表れにはしばしば家庭の状態が反映することがあることを経験的に知っているからだだと思います。最適な支援をするために、「家庭のこと」について話し合いたい（問題の原因を知りたい）と考えているからです。

図10：話し合いたいこと「家庭のこと」（保護者・教員）



ちょっと一息：ほごしゃのほんね ～その2～

話しやすい先生、話しにくい先生

「話しやすい先生って、余裕がある先生かな」

「いらいらしてる感じがなくて、自分のことも話してくれると、こっちも話しやすいなって思う」

「娘がいるとか、自分の家のことや、自分の子育てのことなんか話してくれたりすると、親しみのようなものを感じる。こっちのことも話しやすくなる」

「自分のことなんか話してくれると、親しみていうのか、話しやすさを感じるよね」

「そう、そう、わかる。余裕がある先生って話しやすい」

「基本的には自分と年齢が近いと話しやすいことはあるけれど、年齢だけじゃない」

「若い先生の場合、いろいろ言うのも悪いかなって思うこともあるよね」

「一生懸命やっているって思うと、言うの止めちゃうこともある」

「それはある。一生懸命やっているってことが分かっているから…」

担任の先生が話しやすい先生ではなかったら…どうする

「わたしは、担任に言いにくかったりすると、前の担任の先生だとか、気やすく話せる先生に『こんなことがあったんですが、ちょっと見てもらえませんか』などと頼んじゃうこともある」

「わたしも、ちょっと話しにくい先生だと、ほかの先生から『こんなことがあって、こういうふうに言われたんですけど、本当のところどうなのでしょう』と聞いたりする。そのとき『じゃ、ちょっと気をつけて見てみますよ』と言ってもらえると、すごく安心する」

「聞いてもらうことで安心するよね。誰かに話して自分を安心させたいってこともあるから」

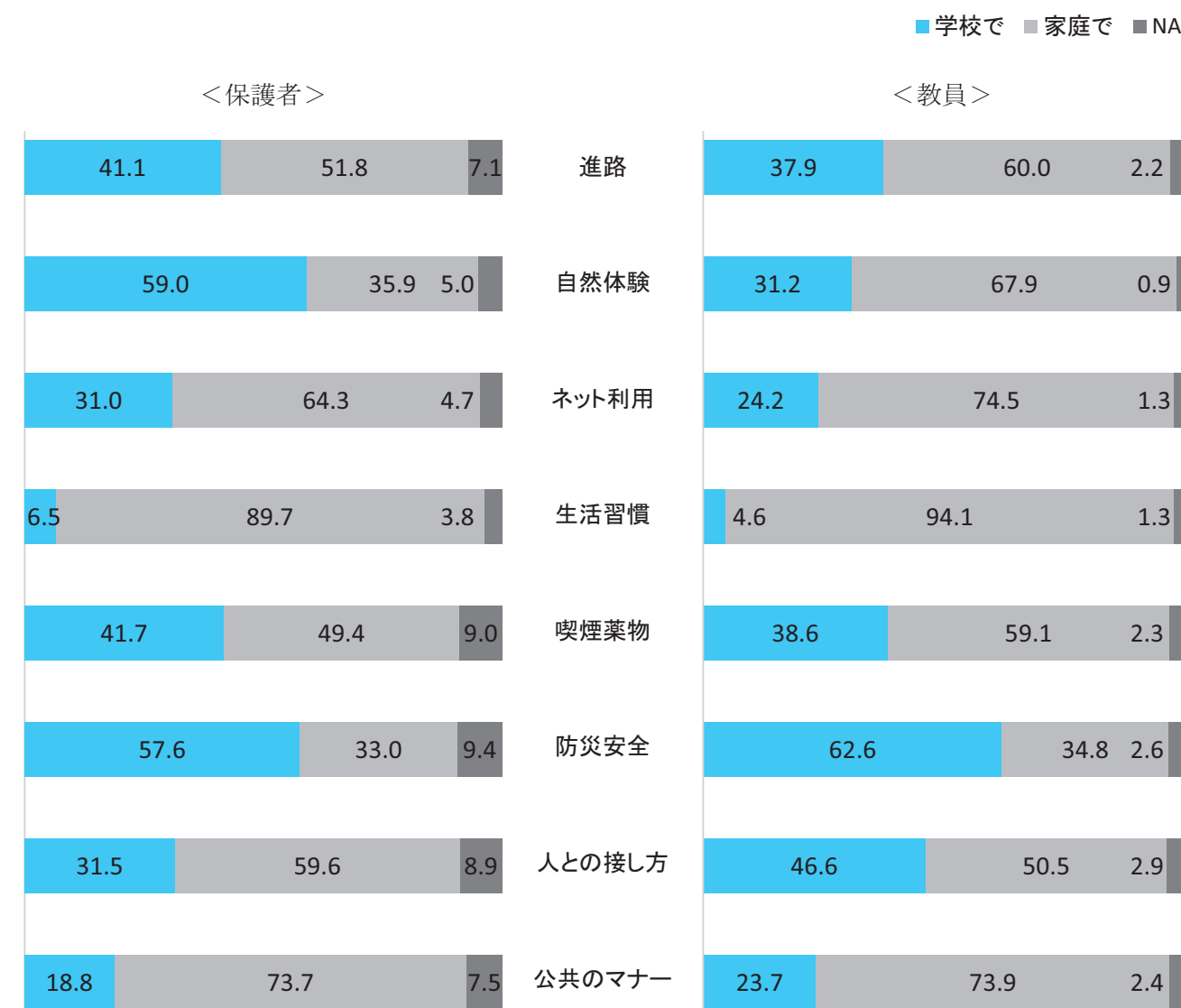
「学校の中の全部の先生が話しやすい先生じゃなくてもいいんだよ。誰か一人でもいいから、話しやすい先生がいるとすごく安心できる」

「それは言える。担任の先生が話しやすい先生だったら、やった！ラッキーって思っちゃう」

学校と家庭の役割はどうあったらいいと思いますか。あてはまる番号を○で囲んでください
(1：おもに学校が関わる、2：おもに家庭が関わる)

Ⅱ 重なっている学校と家庭の役割分担

図 11：学校と家庭の役割分担について（保護者・教員）



かつては「勉強は学校で、しつけや社会生活のことは家庭で」といったことが言われていました。今回の調査結果からは、かつてのような役割分担は形を変え、保護者の回答にも教員の回答にも役割分担に重なりが見られました（図 11）。明確に役割を分けることができないという意識は、質問に対する NA の割合が高かったことにも現れています。

NA として処理した回答の中には、回答がなかったものの他に「1：おもに学校で」「2：おもに家庭で」の間に○を付けたり、両方に○を付けたりといった、指定外の回答も含まれています。調査用紙の欄外に「学校と家庭両方で対応すべきだと思います」と付記されたものもいくつかありました。一方、教員の 11.0%、保護者の 6.6%が、8つの質問項目全部について「2：おもに家庭で」を選んでいました。

調査結果を「保護者が自分の責任と考える傾向にあるもの」「教員が自分の責任と考える傾向にあるもの」

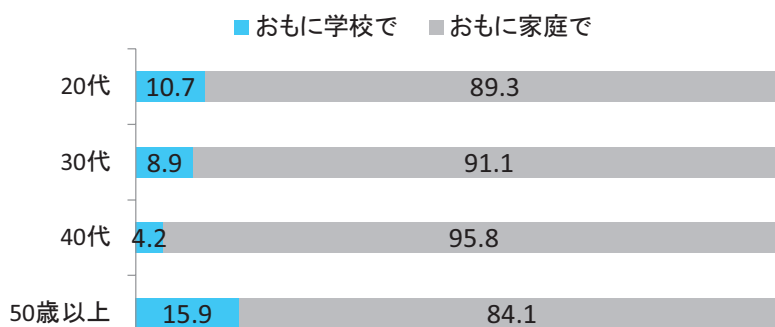
「両者が自分の責任と考える傾向にあるもの」「両者が相手に委ねる傾向が強いもの」の4つのパターンに分けて考えます。

1 保護者が「おもに家庭で」と考える傾向が強い「基本的な生活習慣」「公共のマナー」

基本的な生活習慣や公共のマナーは家庭で

「基本的な生活習慣に関すること」については、保護者も教員もほとんどが「おもに家庭が関わる」と答えています。回答者の属性（年齢やPTA役員の経験など）との関連については、PTA役員経験が「ある」と答えた人は経験のない人に比べ、5ポイントほど「おもに家庭が関わる」の答が多くなっています。また、図12に示したように、保護者の年代別の回答傾向を年代別に見ると、50代の保護者の「おもに学校が関わる」を選んだ割合が他の年代と比べ、5～10ポイントほど高くなっています。

図12：基本的な生活習慣×年齢（保護者）



50代の保護者が「おもに学校で」を選んだ割合が他の年代に比べ高いという回答傾向は、「公共のマナー」や「インターネットやメールの利用の仕方」についても見られます。

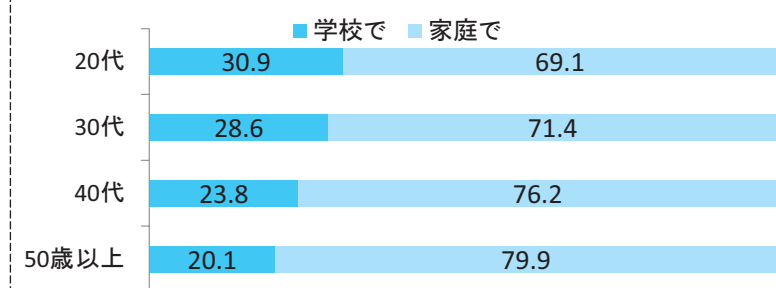
「公共のマナー」については「基本的な生活習慣」と比べ、「おもに家庭で」を選んだ割合が保護者で16ポイント、教員で20ポイント低くなっていますが、それでも「おもに家庭で」を選んだ割合は70%を超えています。

保護者に比べ教員の「おもに家庭で」を選んだ割合が低くなった理由としては、子どもたちにとって公共のマナーが必要とされるもっとも身近な場として学校（教室）があることが考えられます。また、子どもの数が減り地域で子どもたちが集団で行動する機会が減ったことや、3世代家族が減り日常的に年長者とふれ合う機会が少なくなっていることも理由として考えられます。

年代による回答傾向の差

年齢が若い教員に「おもに学校で」と答える傾向が見られます。図13は「公共のマナー」についての年代別の回答割合を示したものです。20代・30代の教員が「学校でも引き受けることが必要になってきた」と考える時代効果なのか、若い世代教員も40代・50代になると「それは家庭で」と考えるようになる世代効果なのか今回の調査結果からでは判断しかねます。

図13：公共のマナー×年齢（教員）



グラフには示してありませんが「公共のマナー」に限らず、20代・30代の教員に「おもに学校で」という回答が多く見られます。基本的な生活習慣にかかわることは保護者に任せておけばいいということではありません。教員と保護者が協力することはもちろん必要ですが、多忙化が深刻化している学校の現状を考えると、20代・30代の教員が「おもに学校で」と考えている傾向は、より多忙化に拍車をかけるという問題をはらんでいます。調査結果を追いながら、「子どもにとって必要なこと」と「役割分担」について考えたいと思います。

年代別の回答割合を示したものです。20代・30代の教員が「学校でも引き受けることが必要になってきた」と考える時代効果なのか、若い世代教員も40代・50代になると「それは家庭で」と考えるようになる世代効果なのか今回の調査結果からでは判断しかねます。

グラフには示してありませんが「公共のマナー」に限らず、20代・30代の教員に「おもに学校で」という回答が多く見られます。基本的な生活習慣にかかわることは保護者に任せておけばいいということではありません。教員と保護者が協力することはもちろん必要ですが、多忙化が深刻化している学校の現状を考えると、20代・30代の教員が「おもに学校で」と考えている傾向は、より多忙化に拍車をかけるという問題をはらんでいます。調査結果を追いながら、「子どもにとって必要なこと」と「役割分担」について考えたいと思います。

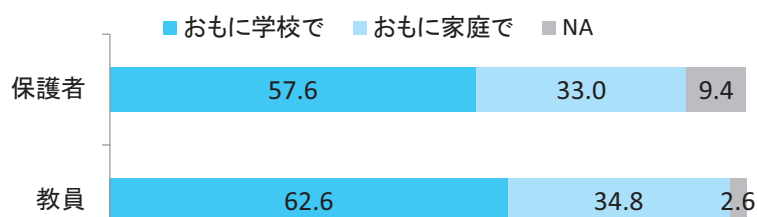
2 教員も「おもに学校で」と考えている、「防災や安全」「喫煙や薬物」「進学や進路」に関すること

8 ページ図 11 からわかるように、調査項目の多くについて役割分担は「おもに家庭で」と答えていますが、そのなかで、相対的に「おもに学校で」という回答の多かった「防災・交通安全・不審者への対応など安全に関すること」、「防災・交通安全・不審者への対応など安全に関すること」、「喫煙・飲酒・性・薬物等に関すること」、「進学や就職など将来の進路」の調査結果について考えます。

学校の役割が期待されている「防災や安全に関すること」

「防災や安全に関すること」について、保護者の 57.6%、教員の 62.6%が「おもに学校で」と回答しています。8 項目の調査のなかで、教員が「おもに学校で」と答えた割合が最も高かったのが「防災や安全に関すること」であり、唯一「おもに家庭で」と答えた割合を上回っています（図 14）。

図14：防災や安全に関すること（保護者・教員）



3.11 東日本大震災以降、防災に対する教

員の意識は大きく変わりました。阪神淡路大震災は子どもたちが登校する前の出来事でしたが、東日本大震災は多くの子どもたちが学校にいる時刻に災害が発生し、多くの子どもが犠牲になりました。また、学校が災害時の緊急避難場所に指定されていた地域もあり、学校施設の安全や避難誘導のあり方が問われました。

巨大地震や津波の発生確率が高いと言われている静岡県では、多くの教員が「防災対策や避難訓練などの防災安全対策に力を注がなくてはならない」という意識を持っています。それが 62.6%という数字に表れています。

現実的には、子どもが学校で過ごす時間は 1 日のうちおよそ 1/3 です。あとの 2/3 は地域や家庭などで過ごしています。学校での安全対策と同時に、家庭や地域での安全対策が求められます。保護者の 9.4%、教員の 2.6%に NA（「両方で」を含む）があったことは「保護者と学校が協力して対策をする」ことの必要性を示していると解釈できます。

学校の役割が期待されている、「喫煙・薬物」や「進学・進路」に関すること

図15：喫煙や薬物に関すること（保護者・教員）

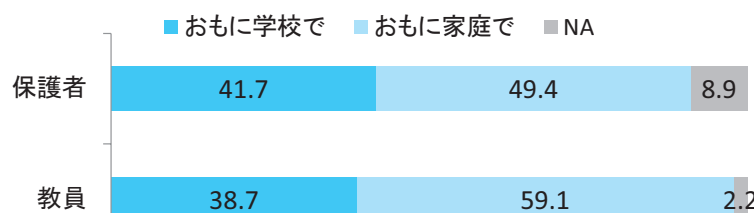


図 15 は、「喫煙や薬物に関すること」についての回答結果です。保護者の半数は「おもに家庭で」と答えていますが、学校での指導を求める回答も多く見られました。教員の回答傾向も保護者の傾向とよく似ています。

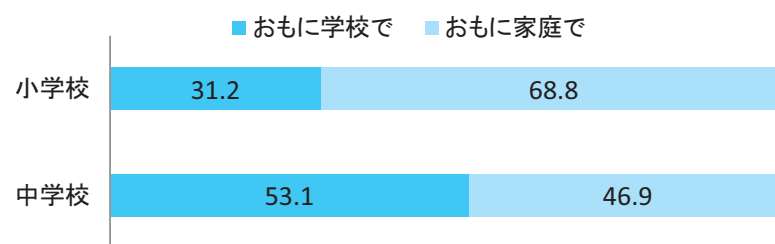
「喫煙や薬物に関すること」の指導は、学校で行われる禁煙教育や薬学講座などの

ほか組織だって行われるものはほとんどありません。各家庭の禁煙環境が大きな役割を果たしますが、喫煙や薬物の健康に与える影響や恐怖しさを示すデータや写真、指導のマニュアルなどが各家庭に十分に整っているとは言えません。生徒指導や保健教育の一環として学校で行っている禁煙教育や薬学講座などが重視されているのだと思います。

進学や就職など将来の進路」については、保護者の 41.7%、教員の 38.7%が「おもに学校で」と答えるなど保護者と教員の回答傾向がよく似ています。教員の校種別の回答傾向を見ると、中学校の教員が「おもに学校で」と答えた割合は 53.1%と小学校の教員に比べ 20 ポイント以上高くなっています（図 16）。キャリア教育が実施されていますが、今回の調査結果からは、中学卒業後の進路（具体的には高校進学）という

当面する課題が強く意識されていたと思われます。保護者の回答傾向からは回答者の性別や年齢、就労時間などとの間に目立った関係はありません。

図16：進学や進路×校種（教員）



学校と家庭・地域が情報の共有を図る、個別の情報を保護者と教員が共有する

東日本大震災のとき、生徒全員が無事避難した釜石東中学校の先生から話を聞く機会がありました。釜石東中学校の先生が「子どもたちと一緒に第1次避難場所から第2次避難場所に移動しながら、今日学校に登校していなかった生徒、早退して今ここにいない生徒は避難しているだろうか。そのことが心配だった」と話していたことが強く心に残っています。一人一人の子どもの住んでいる場所やその日の行動を把握していたからこそできる心配だったと思います。

インターネットなどで進学や就職などの情報、防災や安全に関する情報は入手することも可能です。しかし、そこに関わる一人一人の子どもについての情報を保護者と教員が共有できているかということが大事だと思います。

3 保護者・教員ともに「自分たちが関わる」という回答が多かった、「人との接し方や友だち付き合いの仕方」

「人との接し方や友だち付き合いの仕方」については、保護者は「おもに家庭で」と答えた人の割合が高く、教員は「おもに学校で」と答えた人が多く見られました。かつては、子どもたちは地域で学年を超えた仲間と遊んだり、地域の行事に参加するなかで家族以外の大人たちともふれ合ったりして、人との接し方を自然に身に付けていったと思います。子どもの数が減り家族構成も小さくなりました。学校でもソーシャルスキルトレーニングなどの方法を使って人と接するスキルを高めることも行われています。また、学級の人間関係づくりにも教員がかかわって人間関係の適正化を図ることも求められています。

図17：友だちなどとの接し方×回答学年（保護者）

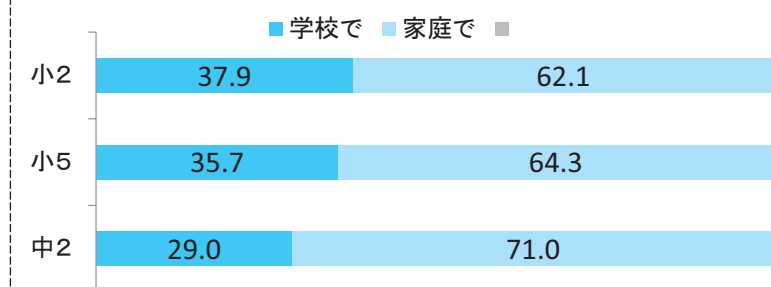


図17は「友だちなどとの接し方」と「回答学年」のクロス集計結果です。回答学年が高くなるにしたがって「おもに学校で」を選んだ割合が減り、「おもに家庭で」を選んだ割合が増えています。

小学校では、人の話をよく聞く、人に親切にする、人に嫌なことをしない、挨拶をしっかりとするなど、集団への適応や友だちどうしのトラブルに先生が関わることを期待

されていることがうかがえます。中学生になり思春期を迎えると人と接する場面が、親しい友だちなど個人的な深い関係に移ったり、思春期特有の苛立ちを家族にぶついたりすることもあります。我が子の抱えている問題に対して保護者の関わりが多くなることが、図17のような表れになっていると考えます。

「友だちとの接し方」についての調査結果からは、保護者と教員がそれぞれの立場から学級や家族間の人間関係づくりに関わろうとしていること、どちらかが担うといった役割の分担ではなく子どもの発達段階に応じてそれぞれの立場からの働きかけが行われていることが分かります。

4 家庭で引き受けにくい「飼育や栽培などの自然体験」

保護者の多くが「自然体験」は「おもに学校で」と答えている

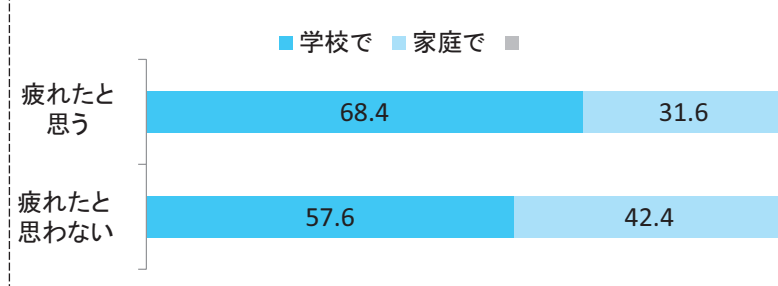
図 11 では、「自然体験」については、59.0%の保護者が「おもに学校で」と回答しています。それに対し、「おもに学校で」と回答した教員は 31.2%と、およそ 30 ポイントの差があります。回答する際、質問の「飼育・栽培・採集などの自然体験」の「飼育栽培」に注目するのか、「自然体験」に注目するのかによって回答傾向に多少の揺れが生じることはあると思いますが、30 ポイントは大きな差です。

約 6 割の保護者が「おもに学校で」と答えた理由はどこにあるのでしょうか。一つには、飼育栽培や自然体験を家庭で引き受けるには時間と費用がかかることが考えられます。また、飼育や栽培をする場所や設備の問題があります。集合住宅などに住んでいる場合など、栽培をする場所を確保することも大変です。自然に

ふれ合う機会を作ることも、保護者の経済的な負担と時間の負担が伴います。

時間や経済的な余裕がないと、自然体験を家庭で引き受けることが難しくなります。図 18 に「子育てや子どもの教育に疲れたと思うことがある」と「自然体験」についてのクロス集計結果を示しました。「子育てに疲れたと思うことがある」人が「おもに学校で」と答えた割合は、「疲れたと思うことがない」と答えた人より 10 ポイント以上高くなっています。教育費の負担感と「自然体験」のクロス集計結果にも同様の傾向が認められました。

図18：自然体験×子育ての疲れ（保護者）



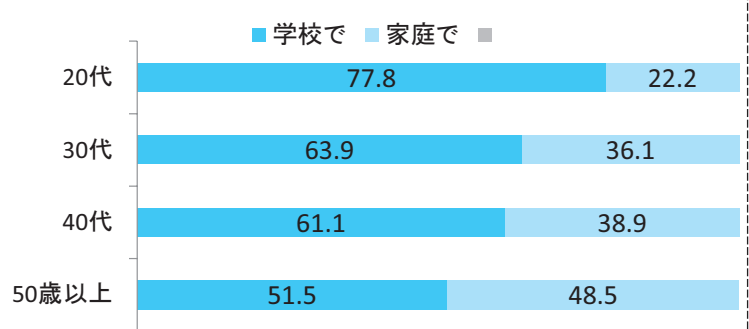
もに学校で」と答えた割合は、「疲れたと思うことがない」と答えた人より 10 ポイント以上高くなっています。教育費の負担感と「自然体験」のクロス集計結果にも同様の傾向が認められました。

若い年代に多い、「自然体験はおもに学校で」という回答

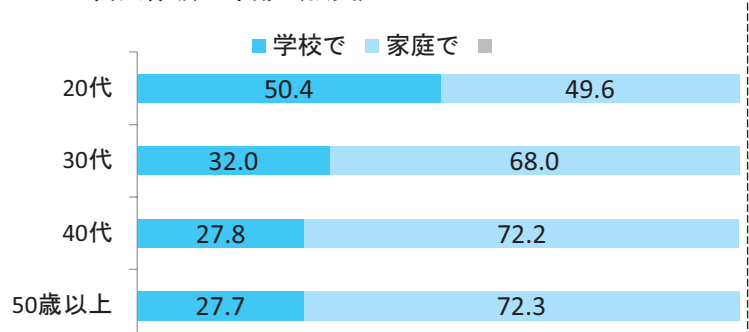
図 19 は「自然体験」に対する保護者と教員の年代別の回答傾向を示したものです。保護者・教員とも「おもに学校で」と答え割合は 20 代で最も高くなっています。保護者では 50 歳以上の 51.5%に対し、20 代では 77.8%と約 21 ポイント以上多くなっています。教員も、50 歳以上が 27.7%に対し、20 代では 50.4%と 23 ポイント以上の差があります。

若い年代に自然体験は「おもに学校で」と答えた人が多い理由として、生活科の実施が考えられます。30 代半ばより若い人たちは生活科の授業で、飼育栽培などの自然体験を経験しています。栽培や飼育や遊びなどの自然とのふれあいを生活科で体験したということが「自然体験はおもに学校で」という考えにつながっていると考えられます。

図19：自然体験×年齢（保護者）



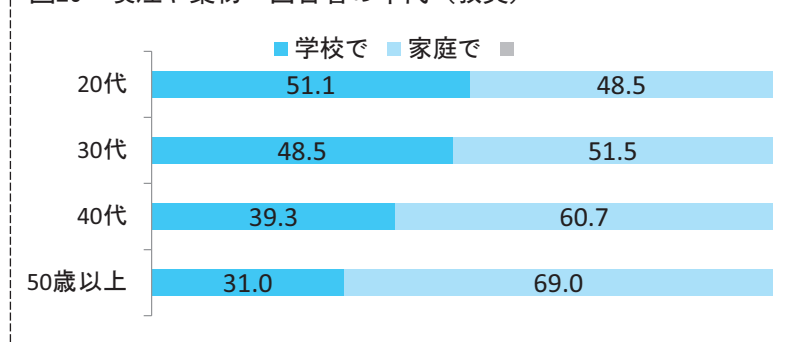
自然体験×年齢（教員）



「学校と家庭の役割分担」の調査結果をコミュニケーションにつなげるために
若い年代の教員に多い「おもに学校で」という回答

図 19 に「自然体験」についての年代別回答傾向を示しましたが、「自然体験」以外に「進学や進路」「喫煙や薬物に関すること（図 20）」「防災や安全」「人との接し方」「公共のマナー」についても同じような回答傾向が見られました。教員の年齢との相関関係を作り出している要因はどこにあるのでしょうか。

図20：喫煙や薬物×回答者の年代（教員）



「自然体験」のように生活科の授業を受けたことがあるといった世代的な体験や、「学校でやってほしい」「学校でやらない」といったニーズや雰囲気、「学校も対応している」といった説明責任などが考えられます。学校が課題を抱え込むこと

による多忙化の問題と併せて保護者とのコミュニケーションを深める必要があります。

役割分担をする際、考えておくこと

役割分担を考える場合、いくつか考えなくてはならないことがあります。

一つは、役割分担が可能かどうかということ、分担したことによって、そのことがきちんと機能するかどうか、役割分担をしてお互いが何をどう指導するかなどが、共通理解されているかということです。ある問題について、「このことは、家庭で指導を行うことですので、よろしくお願いします。」と保護者にお願いしても、保護者が納得し、きちんと受け止めたうえでないと、結果的には、問題をこじらせたり、悪化させたりし、保護者と学校や教員との信頼関係が崩れてしまうことがあります。

二つは、保護者に役割をお願いする際、保護者がどれだけの情報を持っているか、子どものことでどれだけ困り感を持っているか、問題解決に向け気持ちの上でゆとりがあるかどうかなど、保護者側の状況を押さえておかなければならないということです。進路のことで、「家庭でお子さんとよく話し合って結論を持ってきてください。」とお願いする際、保護者に十分な進路情報や生徒の希望や思いが伝わっていないと、親子の話し合いが前に進まないことがよくあります。特に、生徒の希望や思いは、教員が生徒本人の希望や思いを丁寧に保護者に伝えておかないと、保護者の考えや経済的な理由が優先され、生徒は進路への意欲と希望を無くしてしまうことがあります。

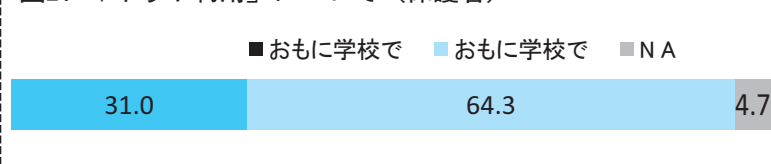
いずれにしても、役割分担をかつてのような考え方で進めていくことは、かえって問題を大きくし、信頼関係を損ねてしまうという結果を招きかねません。十分な事前の話し合いを通して、互いの共通理解を図るために、コミュニケーションをしっかりとることが大切だと思われます。

問題の把握や役割分担の微妙なズレの補正

図 21 は、「インターネットやメールの利用の仕方」についての保護者の回答結果です。64.3%の保護者が「おもに家庭で」と答えています。ふだん耳にする保護者の声から、「おもに家庭で」という答が少ないことを予想していたので、意外と多いという感想をもちました。

PTA の研修会では、「情報通信機器の機能や性能の進歩についていけない。」「我が子をネットの被害から守る方法を知りたい。」という声が聞かれます。保護者はこの問題を家庭の役割としてとらえ、前向きに考えていますが、LINE など SNS を使って起きる子どもたちの人間関係のトラブルの対応に追われている教員は、「おもに家庭で」という保護者の回答結果を根拠に、問題解決を（家庭に）任せてしまっているのかといった不安をもっていることも事実です。保護者とは、子どもたちの実態を踏まえ、コミュニケーションを図り、より良い解決策を見い出すことが大切ではないかと考えます。

図21：「ネット利用」について（保護者）



子育てや子どもの教育について、ふだんどのように感じていますか。あてはまる番号を○で囲んでください（1：そう思う 2：どちらかといえばそう思う 3：どちらかといえば思わない 4：そう思わない）

Ⅲ 子育てのストレス：家庭のしつけや教育が子どもの将来に大きく影響する

教職員については 2012 年度～ 2013 年度に『教職員のストレス要因に関する調査』（所報：No. 148）を行い、多忙や子ども・保護者との関わりなどによるストレスについて考察しました。今回、「学校（教員）と家庭（保護者）とのコミュニケーション」についての調査を実施するにあたり、「保護者も子育てや子どもの教育についてさまざまなストレスを感じているのではないか。」「そのストレスが子どもや学校・教職員との関わりに影響を与えているのではないか。」「保護者のストレスを理解することによりコミュニケーションの深まりが期待できるのではないか。」と考え、次の 5 項目について調査を行いました。

- ・子育てや家庭の教育に自信をもってとりくんでいる
 - ・家庭のしつけや教育は、子どもの将来（成長）に大きく影響する
 - ・学校から求められる宿題や本読みの点検などを負担に感じる
 - ・子育てや子どもの教育に疲れたと思うことがある
 - ・子どもの成長や将来について必要と思うことには、できるだけお金をかけてやりたいと思う
- * 調査結果は「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を足し合わせ「思う」、「どちらかといえば思わない」「そう思わない」を足し合わせ「思わない」として示しました。

1 家庭教育は、子どもの将来に影響する

「しつけや家庭教育は子どもの将来に影響する」という圧力

図22：家庭教育は子どもの将来に影響する（保護者）

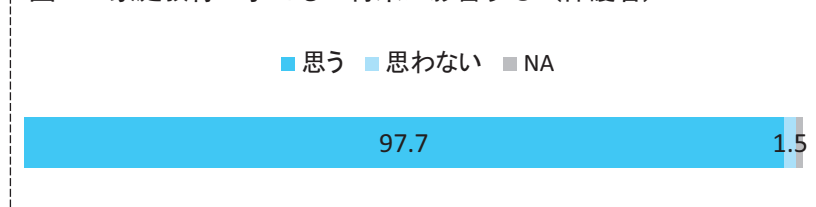


図 22 は、「家庭のしつけや教育は、子どもの将来（成長）に大きく影響する」についての調査結果です。予想されたことですが、ほとんど全員が「家庭教育は子どもの将来に影響する」と答えています。子育ての疲れ、生活のゆとり、教育

費の負担感などの条件に関わりなく「家庭教育は大事（子どもの将来に影響する）」という考えが広くいわれています。また、メディアや学校・地域からも「家庭教育は大事」ということが発信されています。

「家庭教育は大事」ということに異論はありませんが、「保護者は家庭教育は大事という圧力を常に受けている」ことも意識しておく必要があると思います。このような圧力がストレスに転化しやすいことは『教職員のストレス要因に関する調査』からも明らかです。

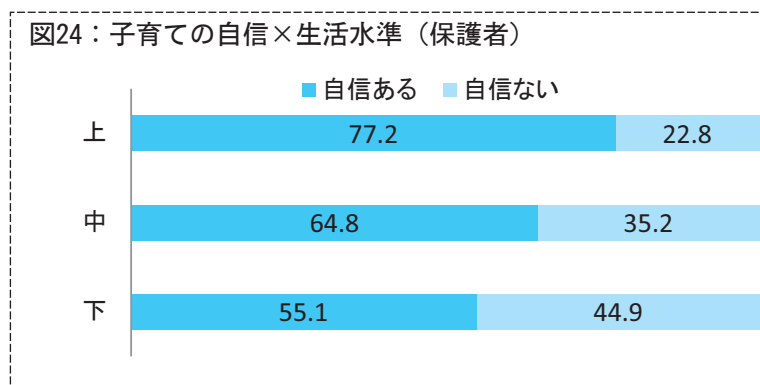
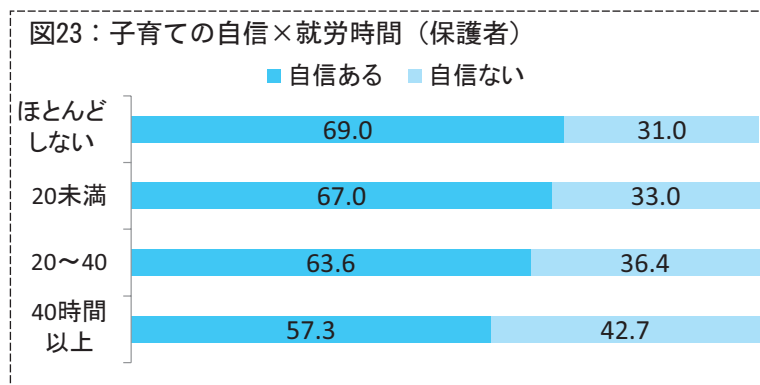
2 「子育てに自信がある」と答えた保護者のプロフィール

子育ての経験が、自信につながる

「子育てや家庭の教育に自信をもってとりくんでいる」という問いに「思う」と答えた保護者は 62.7%です。回答学年別に見ると、小 2 で 60.4%、小 5 で 63.7%、中 2 で 66.9%と回答学年が上になるほど「思う」と答えた割合が増えています。子どもの年齢が高くなると子育ても難しくなるのではないかと予想しましたが、回答結果は予想とは逆の結果を示しました。保護者の年代別の比較でも、20 代が 55.2%、30 代が 62.8%、40 代が 64.1%、50 歳以上が 65.3%と、年齢が高くなるにしたがって「思う」の回答割合が増えています。子育ての経験が「子育てや家庭教育の自信」につながっていることがうかがえます。

「子育ての自信」の背景にあるもの：就労時間、生活水準

「子育ての自信」は経験と関係していますが、「子育ての自信」は就労時間や生活水準との間にも強い相関関係が認められました。図 23 は、「子育ての自信」と就労時間、図 24 は、「子育ての自信」と生活のゆとり



（生活水準）のクロス集計結果を示したものです。就労していない保護者の 69.0%が「自信がある」と答えていますが、就労時間が長くなるにしたがい「自信がある」を選んだ割合が低くなり、40 時間以上の保護者では 57.3%となっています。

就労時間が長くなるにしたがって「自信がある」という答の割合が低くなっている理由として、働くことに時間をとられ、子どもと関わる時間が少ないということを気にしていることも考えられます。

また、生活水準が「上（上・中の上を合算）」と答えた人は 77.2%が「自信がある」と答えているのに対し「下（中の下・下を合算）」と答えた人では 55.1%と、生活のゆとりと子育ての自信との間に相関関係が認められます。

共働きや長時間の就労によって経済的なゆとりが生まれると考えられますが、回答者の多くが女性（母親）であったことを考えると、非正規雇用や時間あたりの賃金格差などにより共働きや長時間の就労が生活のゆとりに結びついていないことも考えられます。

3 子育ての疲れや負担感

20 代・30 代に多く見られる「子育ての疲れ」や「子育ての負担感」。生活水準との関連も

保護者の誰もが、「家庭のしつけや教育が子どもの将来に大きな影響を与える」と考えていることは、「保護者は、家庭の教育やしつけを大事にしないてはならない」といった圧力となり、「子育ての疲れ」や「子育ての負担感」につながります。

図 25 は、「子育ての疲れ」と「子育ての負担感」のクロス集計結果を示したものです。「子育ての疲れ」を感じている人の 47.0%が「子育ての負担感」を感じているのに対し、「疲れ」を感じていない人が「負担感」を感じるのは 21.1%と半数以下になっています。

「子育ての疲れ」についての年齢別回答傾向を示したものが図 26 です。20 代では「疲れたと思う」という回答が 50%を超えています、年齢が高くなるに従ってその割合が減り 40 代では 40%を下回っていま

図25：子育ての疲れ×負担感

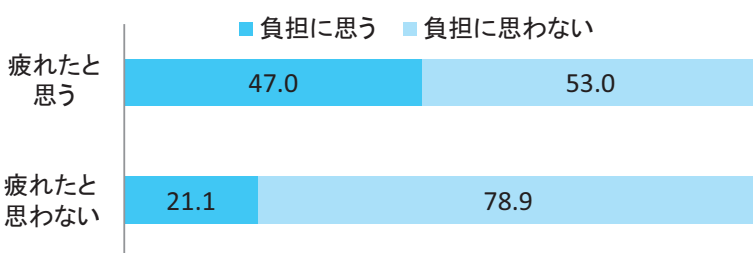
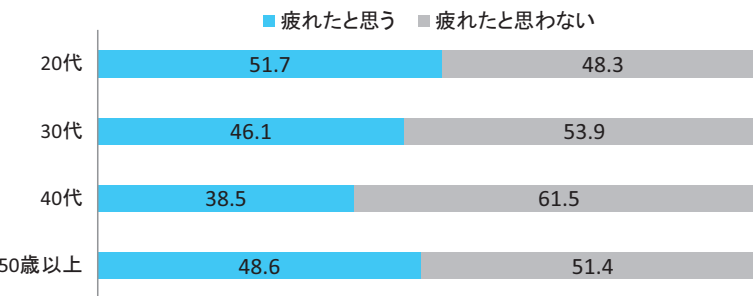


図26：子育ての疲れ×年齢（保護者）



す。年齢が高くなるに従って子育ての疲労感は減っていく傾向が見られますが、50 歳以上は 48.6%と増えています。50 歳以上の「疲れたと思う」という回答が増えている原因については「子どもの大学進学などの経済的負担が影響しているのではないか」などの見方もありますが、今回の調査からはその原因を特定するには至りませんでした。

「子育ての負担感」についても 20 代で高く、年齢が高くなるに従って負担感を感じている割合が減り、50 歳以上で高くなるという傾向が見られました。

「子育ての負担感」と「生活水準」とのクロス集計結果（図 27）を見ると、「子育ての負担感」を感じている人は、生活水準が「上」と答えている人の 24/5%に対し「下」と答えている人は 37.4%と多くなっています。若い世代では、経済的なゆとりが十分でないことが、子育ての疲れや負担感につながっていることも考えられます。

就労時間と「子育ての疲れ」や「子育ての負担感」とのクロス集計を行いました。それほど強い相関関係は認められません（図 28）。

「子育ての疲れ」や「子育ての負担感」の原因は、就労時間が長いため子どもと関わる時間が少なくなるといった物理的なものではなく、「家庭教育やしつけは大事にしないといけない」といったメンタルなものの影響が大きいと考えられます。

図27：子育ての負担感×生活水準（保護者）

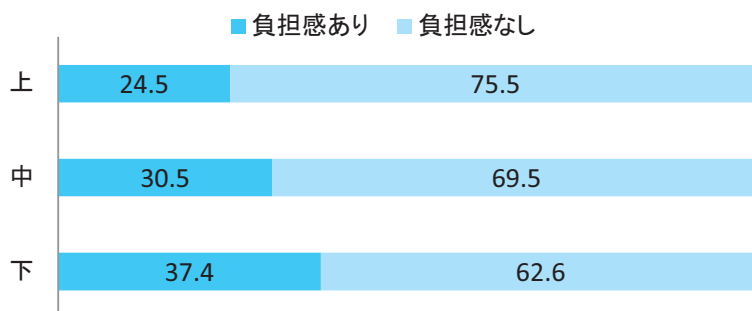
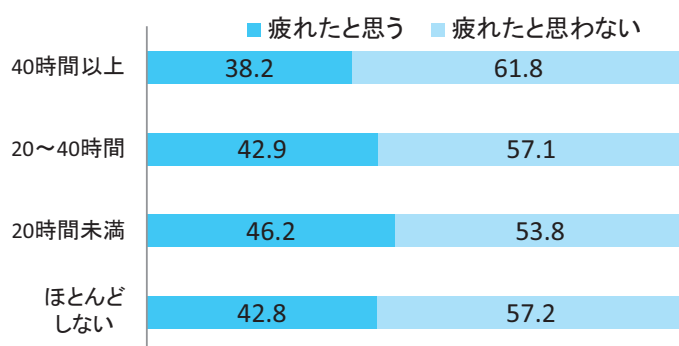


図28：子育ての疲れ×就労時間（保護者）



4 子どもへの投資：できるだけよい条件を保障してやりたい

子どもにはできるだけお金をかけてやりたい：公的支援の少なさは個人負担で…

図 29 は、「子どもの成長に必要と思うことには、できるだけお金をかけてやりたいと思う」の問いに対する回答結果です。80.4%の保護者が「思う」と答えています。子どもと一緒に遊園地に行ったり、旅行をしたり、食事に行ったり、スポーツクラブや塾に通わせたり、欲しがっているゲームを買ってやったり、「子どもにお金をかける」ことは様々です。その時々、できるだけよい条件を保障してやりたいと考えている保護者の姿がうかがえます。

図29：子どもにはできるだけお金をかけてやりたい（保護者）

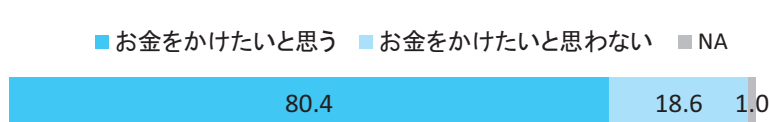
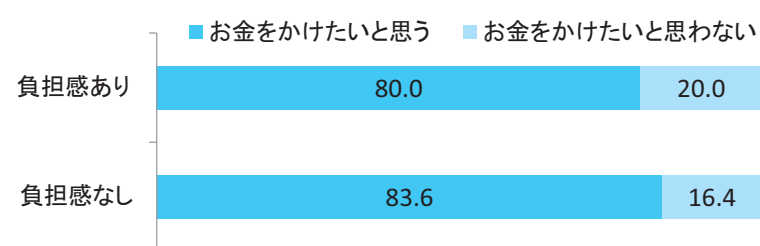


図 30 は、「子どもにお金をかける」と「家計にしめる教育費に負担を感じている」のクロス集計結果です。教育費に負担を感じていると答えている人の「子どもにお金をかけてやりたい」と回答した割合が、負担を感じていない人の回答を 3.6%下回っていますが、この差は統計的に有意な差と言うほどのものではありません。

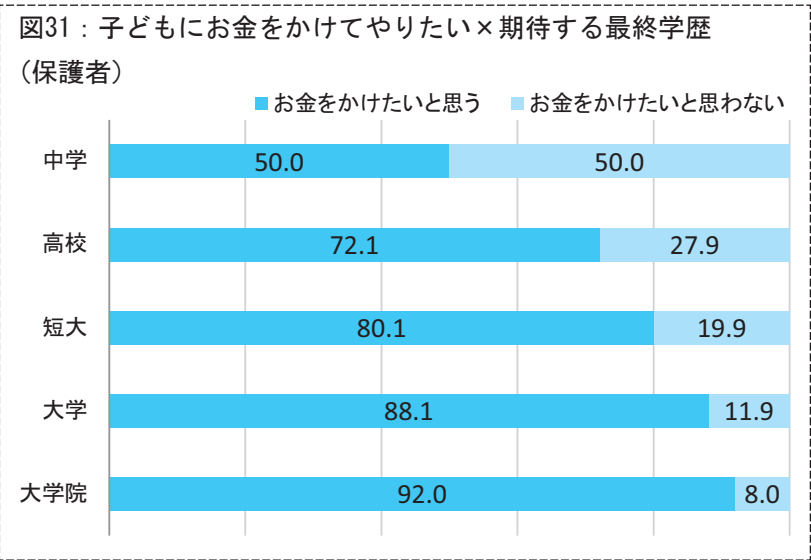
図30：子どもにお金をかける×教育費の負担感（保護者）



教育費の負担感の有無にかかわらず、「子どもにとって必要なことにはできるだけお金をかけてやりたい」という考えが、逆に「教育費の負担」を押し上げているということも考えられます。

お金がかかる、高校・大学への進学

お金をかけることだけが、子どもの成長を支えるものではないことはもちろんですが、子どものもっている力を引き出したり、伸ばしたりするには、相応の金銭的な負担が必要なことも事実です。先進諸国の中で、日本は義務教育以降の後期中等教育や高等教育に対する教育費の公的負担割合が低いことが指摘されています。



子どもを高校・大学に進学させたいと願う保護者の気持ちは「教育費の捻出」というシビアな問題を抱えることとなります。図31は「子どもにお金をかけたい」と「期待する最終学歴」のクロス集計結果です。

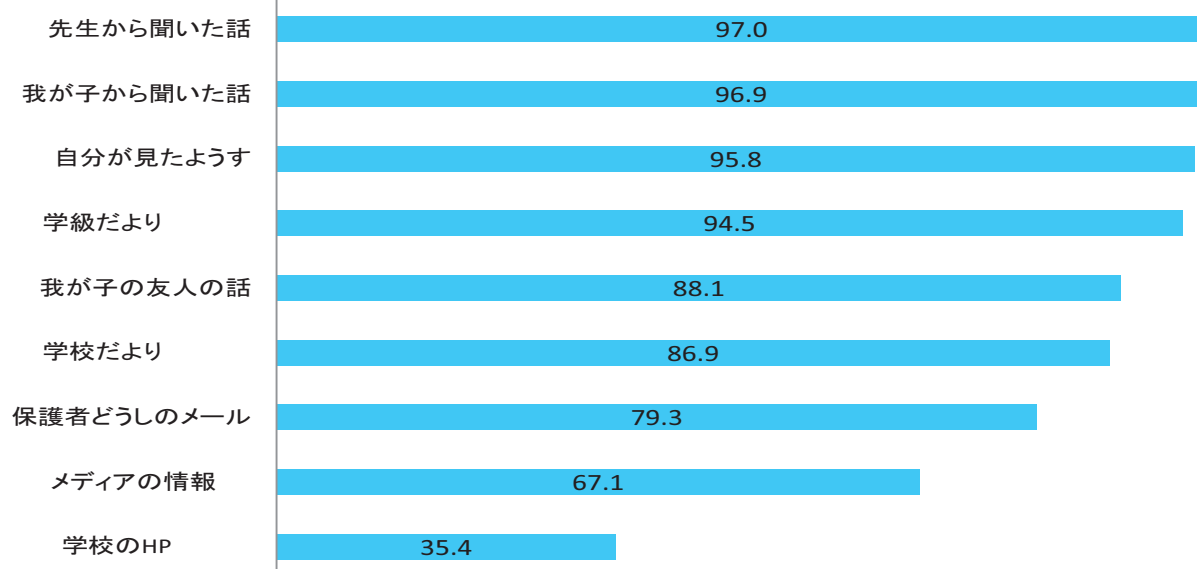
高等教育を受けさせるには多額の費用負担が見込まれます。高校・大学の就学に対する公的支援が少ないことが、教育費の負担を押し上げ、高校・大学の就学機会の均等に影響を与えていることがうかがえます。

学校の様子を知るうえで、次のことをどの程度参考にしますか。保護者が学校の様子を知る
とき、どのような情報を重視してほしいと思いますか。

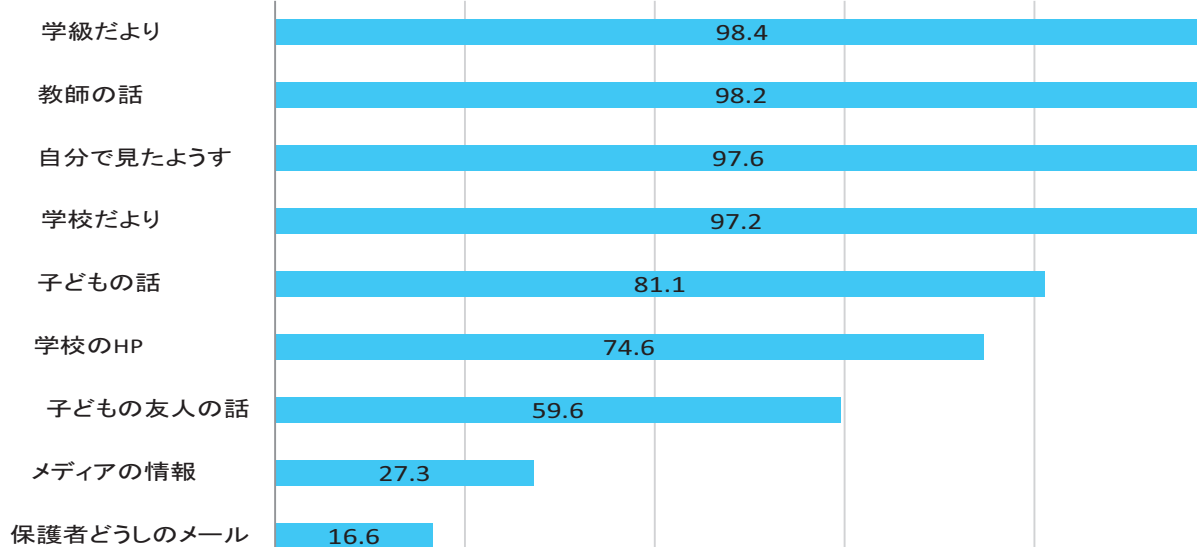
IV 学校の様子を知るうえで参考にすること、重視してほしいこと

図 32 は、「学校を知るうえで参考にすること、重視してほしいこと」についての調査結果です。

図32：「学校の様子を知るうえで参考にすること」（保護者）



「学校の様子を知るとき重視してほしいこと」（教員）



1 保護者・教員ともに、「参考にすること」「重視してほしい」と考えるのは、発信者の顔が見える情報

90%以上の保護者が「参考にすること」と答えているのは、「直接、先生から聞いた話」「参観会や学校行事などで直接見た学校の様子」「学級だより・学年だよりなどの配付物」「我が子から聞く学校やクラスの話」の4つです。また、90%以上の教員が「重視してほしい」と答えているのは「学級だより」・「直接、教師が伝

えた話」・「参観会などで直接見た学校の様子」・「学校だよりや学校の教育方針などの配付物」の4つです。保護者と教員の回答の傾向がよく似ています。

両者に共通するのは、発信者から直接見聞きしたことや、発信者の顔が見える情報です。

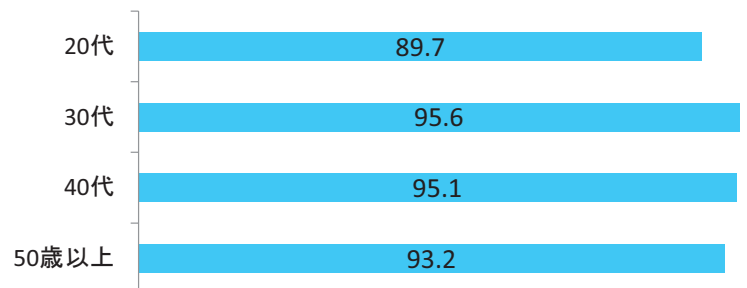
20代の保護者の回答傾向

図33は、「学級だより」を参考にするに答えた保護者の年代別回答結果です。年代による回答割合の差は数%とわずかですが、20代の保護者の「参考にする」という答がやや少なくなっています。20代の保護者の「参考にする」という回答が30代・40代に比べ低いという傾向は「自分が見た様子」についても見られます。

ある40代の保護者はこの結果について次のように語っていました。

「自分のことを振り返って思うことですが、20代の保護者は、学校とどのように関わっていいのかわからないのではないのでしょうか。学級だよりにしても、自分の子どものことが書かれていればよく読むと思いますが…。自分の子どもに対してのピンポイントな関心は高いけれども、自分の子どもに対する関心を学級や学校との関係に膨らませて考えることができないのだと思います。」

図33：学級だよりを参考にする×年齢（保護者）



ちょっと一息：ほごしゃのほんね ～その3～

教員は時間をかけて「学級だより」を作っています。受け手としてはどのように受け止めていますか？

「子どもが持ってきたら一通りは目を通しますが、どのようにと言われても、そんなに深く考えたことはないですね」

「学級だよりって、すごく上手に作る先生がいますよね。内容も興味が引かれるものと、当たり前のことしか書いてないなって思うものと…。最初の印象で読もうって思う」

「その年に子どもが初めて持ってきたよりは、今度の先生どんなふうを書くのかなって、読む」

「子どもの様子が書かれていると、興味がわく」

「子どもの様子だとか、こんな行事をやったとか、こんなに頑張ってるとか、こんなこと言ってましたとか、書いてあると読むよね」

「子どもの言ったことや先生の話したことが、具体的にいうか、そのまんま書いてあるとね」

「子どもの言った言葉がそのまま書いてあると、そのときの様子が伝わってくる感じがして読む」

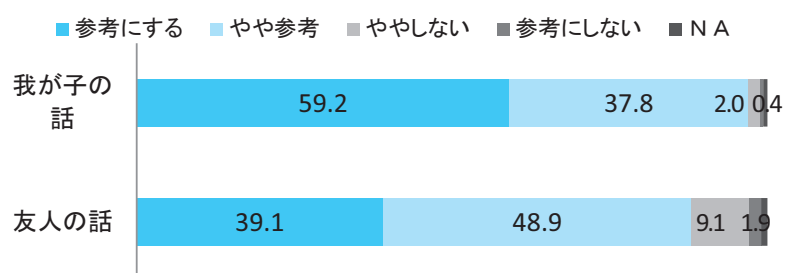
2 「我が子の話」から想像する学校生活の様子や先生のこと

学校生活が楽しいと、子どもが学校や先生のことをよく話す

図34は、「我が子の話」「子どもの友だちの話」について保護者の回答結果を示したものです。

「参考にする」「やや参考にする」を足し合わせた数字で比べると、我が子の話97.0%、「子どもの友だちの話」88.0%

図34：我が子の話・子どもの友だちから聞く話を参考にする（保護者）



と9ポイントの差ですが、「参考にする」については59.2%に対し、39.1%と20ポイント以上の差があります。我が子や子どもの友だちから聞く学校の話は、保護者にとって学校の様子を知る重要な情報ですが、当然のことながら「我が子の話」に20ポイントの優位性をもたせています。



ちょっと一息：ほごしゃのほんね ～その4～

先生や学校の様子を子どもから話してくる：学校生活が楽しいってことが伝わってくる

「娘が、学校の話をよくするようになりました。友だちのことも話すんですが、先生のこと。それを聞いていると『学校生活がすごく楽しいんだなって』ことが伝わってくるんですね」

「子どもが学校の話をしてくれると、親は学校でうまくいっているんだって安心する。学校のことをいっぱい喋るときは、先生から叱られたことも言います。楽しかったことも。こちらから聞かなくても『今日学校でね、こんなことがあって、そうして…って』その中に先生のことも入っています。楽しいな様子が伝わってきて、よかったなぁって思います」

「わたしの家でも同じ。聞かなくっても、子どもの方から学校であったことを話してくる中に、先生がこう言ったら、みんながこう言ったということが入っている。学校の様子がよくわかるというか、そんな話を子どもから聞くと安心するっていうのはよくわかる。うまく友だちや先生とやってるなって思うから」

「去年、そうだった」

「わたしんとこも。そういうこともある」

「先生によって変わるってことあるよね」

3 教員の不安：情報が正確に伝わっていないのではないか

「保護者どうしのメール」「子どもの友だちの話」に対する教員の気がかり

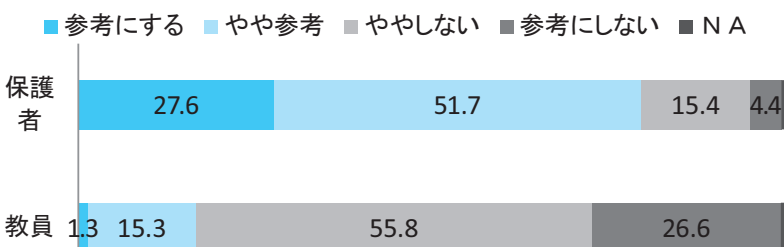
直接見聞きした情報や発信者の顔が見える情報に対して、多くの保護者と教員が「参考にする・重視してほしい」と考えている一方、「保護者どうしの話やメールなどでやりとりされる学校のこと」や「子どもの友だちから聞く話」については、保護者と教員の受け止め方に違いが見られます。

保護者と教員のコミュニケーションをすすめるうえで、お互いがどのような情報を参考にしているのか、いないのかを知っておくのは大事なことだと思います。情報の受け止め方の違いと、その違いが生まれる理由について考えます。

保護者と教員で受け止め方の違いが大きい「保護者どうしのメール」

図35は、「保護者どうしメール」について保護者と教員の回答傾向を比較したものです。保護者の79.3%が保護者どうしで交わされるメールを「参考にする」「どちらかといえば参考にする」と答えているのに対し、教員が「重視してほしい」「どちらかといえば重視してほしい」と答えているのは16.6%と60ポイント以上の差があります。保護者の多くが「参考にする」と答え、教員の多くが「重視する必要がある」と答えている背景には何があるのでしょうか。

図35：保護者どうしのメールを参考にする（保護者・教員）



「情報が正確に伝わっていないのではないか」という教員の不安

教員が「保護者どうしのメール」を「重視する必要はない」と考える理由として次のようなことが考えられます。メールで流れた噂や評判などにより痛い目にあったことがある。あるいは、そのような人を身近に見たことがあるということが考えられます。噂や評判はいわゆる尾ひれがついて広がることがしばしばあります。しかもメールなど個人的なルートを通して流れる情報に対して、噂や評判の対象となっている者から弁明や訂正を加えることは難しく、じっと噂や評判が沈静化するのを待つことになります。また、(自分のことが)メールでどのように言われているのか見えないということに対する不安があります。メールで流れている噂や評判が正確な情報や根拠をもとにしたものかどうか、確かめることができないということも教員が、「保護者どうしのメール」を参考にしない理由としてあげられます。

保護者どうしのメールを参考にしている保護者

一方、保護者の79.3%がメールを「参考にする」「どちらかといえば参考にする」と答えている理由はどこにあるのでしょうか。一つには、メールで交わされる情報です。今回実施した聞き取り調査でも、メールの内容は先生の「悪口や噂」より、ちょっとした(子どもの)持ち物の確認だったり、時間の確認だったりすることが多いと聞きました。わざわざ先生に電話をしてたずねることをせず、メールで知り合いの保護者に聞くということでしょう。

教員が同じ職場の同僚などに悩みごとを打ち明けたり、相談したりすることによってストレスを軽減させていることは『教職員のストレス要因に関する調査；所報No.148』で明らかにしました。保護者には悩みを打ち明けたり、気軽に相談したりする相手との間には、それぞれの家庭(家)といった空間としての隔たりがあります。教員のように職場の同僚と会話ができる「近さ」がありません。その「距離」を埋めるものとしてメールが使われていると考えられます。ちょっとした疑問や子どもから聞いたこと(教員や学校の噂や評判だけでなく予定や持ち物のことなど)の確認などにメールが使われていることだと思います。

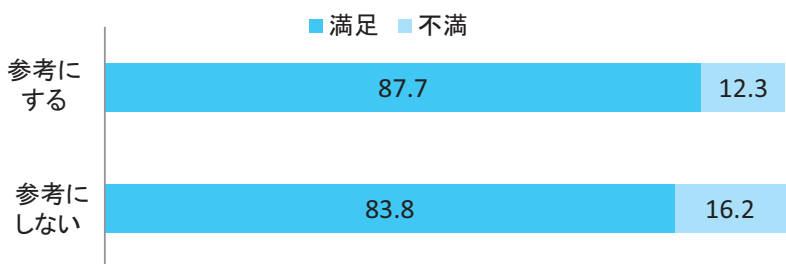
保護者どうしのメールでやりとりされる情報・内容

図35で示した「保護者どうしのメール」の内容は、「教員や学校に対する噂や評判」などが主なものなのでしょう。回答結果を見ると、「保護者どうしのメールでやり取りされている情報の多くは、学校や教員の批判ではない」ことが推測されます。今回の調査では、保護者どうしのメールの内容については直接的な質問は設けていません。「保護者どうしのメール」と「学校への満足度」や「学校に対する不満の有無」などのクロス集計から、「保護者どうしのメール」の内容について考えます。メールの内容が「教員や学校に対する不満」といったものだとしたら、「保護者どうしのメール」と「学校への不満」との間には有意な相関関係が認められるはずです。

図36は、「保護者どうしのメール」と「学校への満足度」とのクロス集計結果です。

学校を知るうえで保護者が「参考にする」と答えた「保護者どうしのメール」の内容が学校や教員に対する批判であったり、「保護者どうしのメール」が学校や教員に対する不満を語ることに使われているなら、「参考にする」と答えた人に「不満がある」という割合が高くなるのが考えられます。クロス集計の結果は「学校に対する満足や不満の有無」と

図36：保護者どうしのメールを参考にする×学校への満足度(保護者)

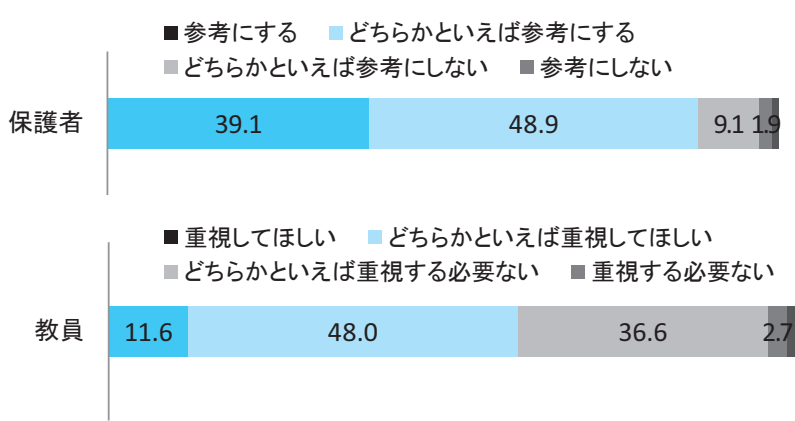


「メールを参考にする」との間に有意な相関があることを示していません。「保護者どうしのメール」と「学校に対して不信を感じたことがある」との相関関係についても同様の結果を得ました。

子どもの友だちの話

保護者と教員の回答傾向に差が見られたものに「子どもの友だちの話」があります（図37）。保護者の88.0%が「参考にする」「どちらかといえば参考にする」と答えているのに対し、教員の「重視してほしい」「どちらかといえば重視してほしい」という答は59.6%と28.4ポイントの差があります。この差の理由としては、教員は学校の様子が、子どもの友だちによってどのように伝えられているかを意識して答えているのに対し、保護者の場合は、子どもの友だちの話から学校の様子を知ることのほかに、我が子の話から学校の様子も知ることできると考えています。保護者にとって、我が子の友だちの話は、学校の様子と同時に我が子の様子を知る手がかりでもあるわけです。

図37：子どもの友だちの話を参考にする（保護者・教員）



4 「学校のホームページ」：情報への距離が遠いと「参考にしない」？

「学校のホームページ」について、教員の74.6%が「重視してほしい」「どちらかといえば重視してほしい」と答えていますが、保護者が「参考にする」「どちらかといえば参考にする」と答えた割合は25.3%と40ポイント近く低くなっています。学校や教員は発信の当事者ですから「重視してほしい」という願いをもつのは当然のことですが、保護者の受け止めはかなり低いと言えます。

保護者の受け止めが低かった理由として、LINEやメールなどでは送り手から情報が端末に送られてきますが、ホームページは自分の方から見に行かなければなりません。その煩わしさがネックになっていると考えられます。また、保護者の求めている情報がホームページに載っているか、ということも問題です。保護者は、自分の子どもの学校生活に関わる情報を求めますが、学校のホームページという性格上、個々の子どもに関わる情報がホームページに載ることは限られています。

保護者が学校からのメッセージを拒否していないことは「学校だより」についての回答からも分かります。自分の子どもに直接関わる情報ではないことが「参考にしない」という答を選ばせたと思います。



ちょっと一息：ほごしゃのほんね ～その5～

友だちのお母さんと学校からの連絡の確認をメールでする

「子どもの言っていることが、学校からのたよりなんかのお知らせで聞いていたこととちょっと違うってことがありますよね。そんなとき『どうなってる』ってメールで確かめることある」

「アレッ、って思うことがある。メールの返事がきて、たいした問題じゃなければ『予定が変わったんだ』ってなっちゃう」

「いちいち先生に電話して確かめたりしないけど。どう？」

「先生に、いちいち確かめたりしないよね」

「友だちのお母さんに聞いちゃうことが多い。電話したり、メールだったり」

「学校に電話するってことないな…。こんなことで電話してもいいのかなって考えちゃう」

「そうだよね。友だちのお母さんにメールすると、わかんないことはほかのお母さんにも回って、『こうなんじゃない』って返ってくる。それでだいたい解決しちゃう」

学校や先生の噂や悪口なんてメールしたことある？

「う～ん。そういうの言ってる人の話っていうか、噂っていうのか聞いたことはあるけど。そういうメールが回ってきたことはない」

「私も、したことないし、そういったメールが回ってきたことはない」

「私もない。先生の悪口をメールで送ったという話しは聞いたことはあるけれど…」

「メールで先生の悪口を送ったとすると、“あの人は悪口をメールで送る人だ”と思われてしまうこともあるよね」

「悪口を書いてストレスは発散するかもしれないけれど、モンスター（モンスターペアレント）だって思われちゃうかもしれないしね」

「先生の悪口をメールで送ったり、噂を流したりするほど暇じゃないしね」

「そう、そんなことしてる暇ないよね」(笑)

「わたしのところにくるメールはほとんど、学校の予定の確認だとか、持ち物の確認。たとえば、遠足があるとき、どんな服にするとか、お弁当は何にするとか」

「予定についてやりとりすることもある。今度の週末の試合どこでやるとか、誰がついて行くとか」

「悪口なんかメールで送っちゃうと、悪口言う人みたいに思われちゃうよね。そう思われるのは困るから」

学校や教員に「不満や不信」「共感や信頼」を感じたときに、どのような行動でそれを表しますか。
保護者に「不満や不信」「共感や信頼」を感じたときに、どのような行動でそれを表しますか。

V 「不満や不信」「共感や信頼」を感じたときの行動

学校や教員に対して、「不満や不信」「共感や信頼」、保護者に対して「不満や不信」「共感や信頼」を感じたときにどのような行動でそれを表現するかについて調査しました。学校や先生に対して「不満や不信」を感じたことが「ある」と答えた保護者は41.5%、保護者に対して「不満や不信」を感じたことが「ある」と答えた教員は84.6%でした。学校や教員に対して共感したことが「ある」と答えた保護者は79.1%、保護者に対して共感したことが「ある」と答えた教員は97.4%でした。

ともに教員の割合が保護者を上回っていますが、このような差の理由として保護者と教員では対象となる人の数に大きな違いがあることが挙げられます。教員は学級の保護者全員を対象としますが、保護者の場合は対象となる教員は担任や部活の指導者などかなり限定されていると考えます。また、今回の調査では対象とする期間について限定してありません。教員を長く勤めているとそれだけ対象者の数は増えます。「…感じたことがありますか」といった経験を問う質問による回答の揺れだと解釈します。このことを踏まえながら調査結果について考えます。

1 似ている「不満や不信」「共感や信頼」を感じたときの行動

図38・39は、「不満や不信」や「共感や信頼」を感じたとき、どのような行動をとったかについての回答結果です。
(複数回答。「不満」や「共感」を感じている人を100%とした有効パーセントで表示)

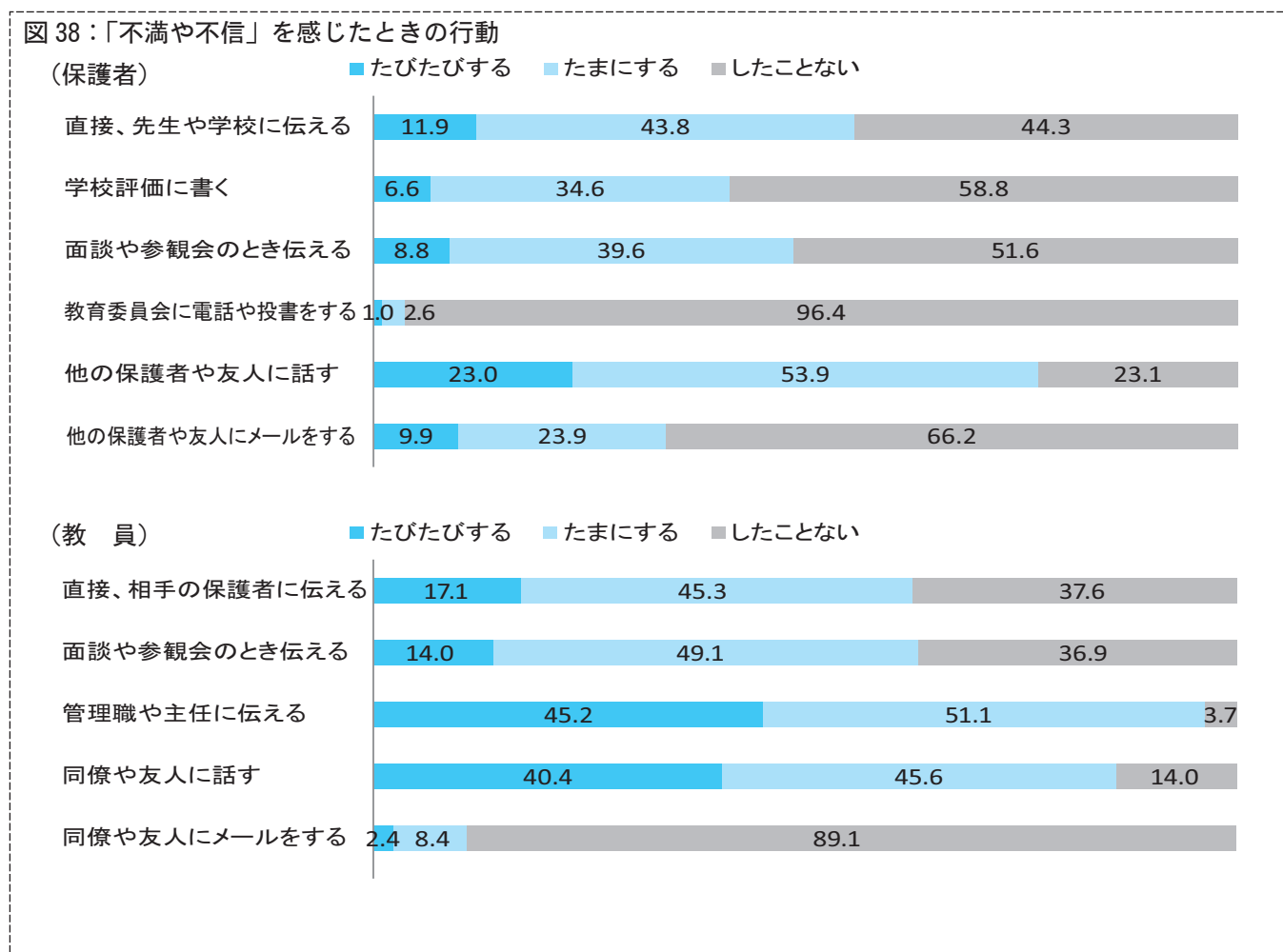
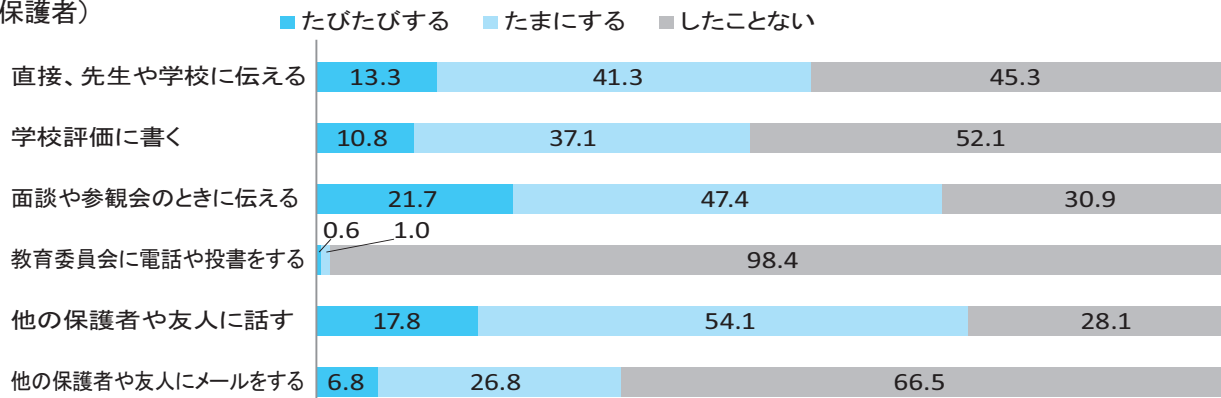
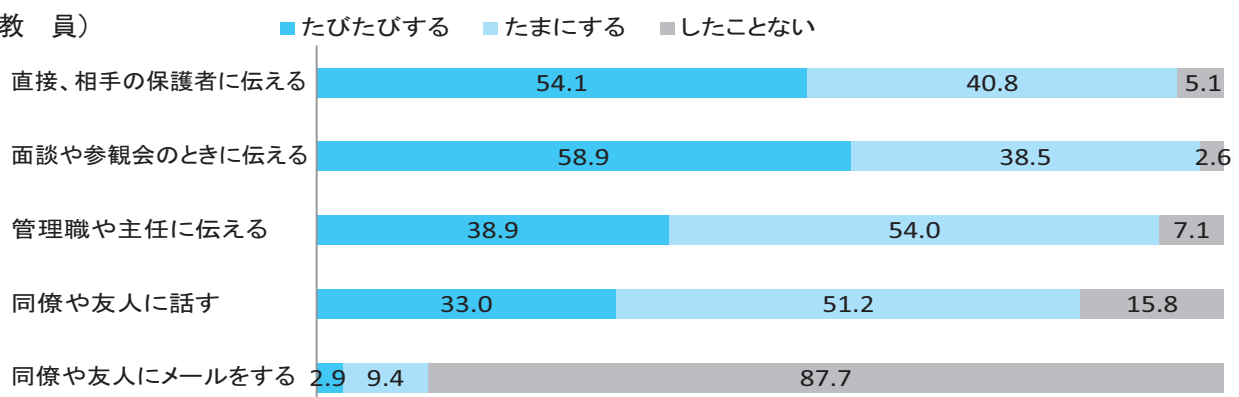


図 39：「共感や信頼」を感じたときの行動

(保護者)



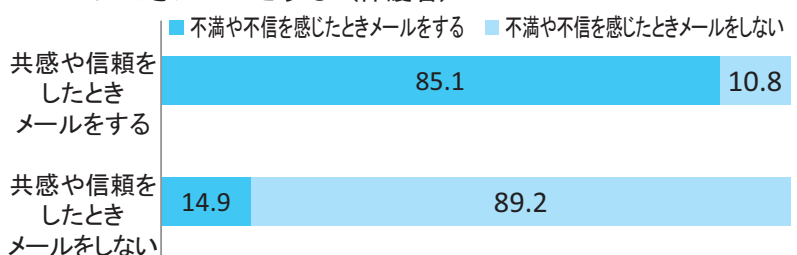
(教 員)



「共感や信頼」に比べ「不満や不信」の方が行動化されるのではないかと予想していましたが、結果は逆でした。「共感や信頼」を感じたことの方が行動化されるという結果が得られました。特に、教員において「共感や信頼」を感じたときの方がより行動化されるという傾向が強く見られます。また、保護者も教員も不満を感じたときの行動と共感ときの行動の仕方がよく似ています。

図 40 は、保護者が学校や教員に対し「不満や不信を感じたときに他の保護者にメールする」と「共感や信頼したときに他の保護者にメールする」のクロス集計結果を示したものです。

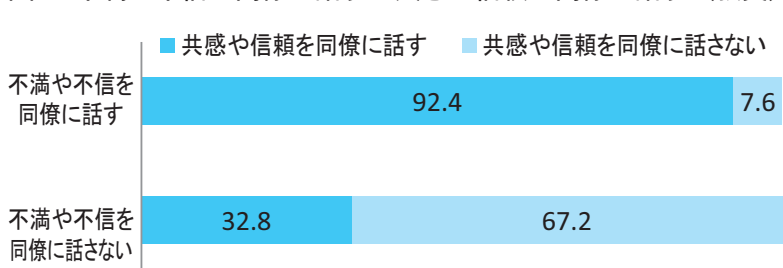
図40：不満や不信を感じたときのメールをする×共感や信頼をしたときメールをする（保護者）



「不満や不信を感じたときにメールを

する」と答えた人の 85.1%が、「共感や信頼をしたときにメールをする」と答えています。「不満や不信を感じたからメールする」あるいは「共感や信頼をしたからメールする」といったかたよりは認められません。「メールをする」人は不満や不信を感じたときも、共感や信頼をしたときも「メールをする」傾向にあることを示しています。「すぐに学校や先生に伝える」、「他の保護者や友人に話す」についても同様の結果が得

図41：不満や不信を同僚に話す×共感や信頼を同僚に話す（教員）

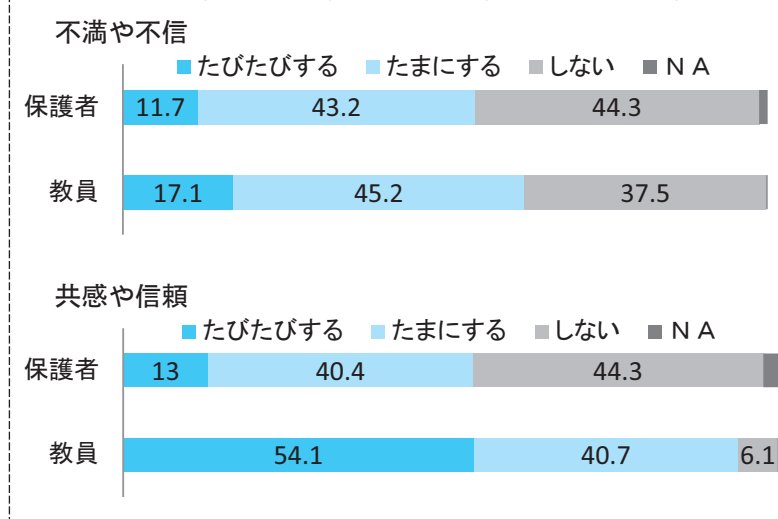


られました。図 41 は、教員が保護者に対し「不満や不信を感じたときに同僚に話す」と「共感や信頼をしたときに同僚に話す」のクロス集計を示したものです。「不満や不信を感じたときに友人に話す」と回答した教員の 92.4%が「共感や信頼をしたときにも友人に話す」と答えています。

2 「不満や不信」「共感や信頼」を直接相手に伝える：「直接相手に話す」「面談や懇談会で伝える」

不満や不信、共感や信頼を感じたときの行動

図42:不満や不信、共感や信頼を相手に直接話す（保護者・教員）



「不満や不信」を感じたとき、教員の62.3%・保護者の54.9%が「直接相手に話す」という行動を「したことがある」（たびたびしたことがある・たまにしたことがある）と答えています（図42）。

保護者も、教員も、不満や不信を感じたときより共感や信頼をしたときの方が「相手に直接話す」割合が高くなっているのは、話題として話しやすいからだと考えられます。また、「不満や不信」を感じたとき、保護者の11.7%、教員の17.1%が「直接相手に話す」と答えています。直接相手に「不満や不信」を伝えるのは、その後の人間関係を考えると難しく気をつかうことです。

一方、「共感や信頼」をしたとき、教員の約95%が、そのことを直接保護者に話すという結果が出ています。さらに細かく見ますと、54.1%、つまり教員の二人に一人は、共感や信頼を感じた時には、直接保護者にその内容を話し伝えていることがわかります。教員が、子どものよさやがんばりを見つけ、それを保護者に積極的に伝えているということです。こういう日常的なプラス思考のコミュニケーションが、保護者との信頼関係づくりには欠かせません。

子どものよさやがんばりを見つけ、保護者に伝え、子どものよさやがんばりを共有し、それを子どものさらなる意欲や向上につなげる上でも、大事なことだと言えます。教員が、子どものよさやがんばりを保護者に積極的かつ丁寧に伝えることによって、保護者が信頼や共感を感じたときに教員に直接話すという数値は上がってくるのではないかと思います。子どものよさやがんばりを共通の話題に話ができることは、子どもの成長にも役立つことだと考えます。



ちょっと一息：ほごしゃのほんね ～その6～

先生に対して不満など感じたとき

「中学校に入って部活を決めるとき、本人ははじめ部活じゃなくて水泳のクラブに入らって言っていました。部活の見学をしたら「やっぱり部活の方がいい」って、バスケット部に入部することにしました。部活を決めるまで日があったので、「バスケット部の先生に『入りたい』と言って、部活を見学しておいで」と家を出したんです。その日泣いて帰ってきました。部活の先生に言ったら、「今更なんだ」って感じで言われたと言いました。そのときはさすがに、学校に電話をして「今から部活には入れませんか」って聞きました。ちょうど部活の先生がいなくて、学年主任の先生と話をしたら『いいえ、そんなことはないです。伝えときますね』と言われました。そのまま学校からの連絡もなくバスケット部に入って部活を続けていますが、ちょっとその言い方がどうだったのかなということがありました」

「学校への苦情っていうより質問ですよね。わたしも、手続きの仕方が分からないときなど電話で聞いたことがある」

「ちょっと気になったのは…、その後学校から連絡がなかったの」

「なかったけど、部活に入れたから…。そのまんまにしてる。本人も部活を楽しそうにやってるから」

「学校に電話するって、文句言うんじゃないでも緊張するよね」

「言い方がちょっとあれかなって。小学校と違うし、入ったばかりだし。本人も不安だったこともあったので、ちょっと心配で電話したんです」

3 「不満や不信」を感じたときの行動：「友人や同僚に話す」「メールする」

図43は、「不満や不信」を感じたとき保護者と教員の行動について「友人や同僚に話す」と回答した結果です。保護者の22.6%、教員の40.4%が「たびたび話す」と答えています。教員が保護者を17.8ポイント上回っています。これまでたびたび触れましたが、教員の場合は職場という空間に同僚がいますから、いつでも話しかけ聞いてもらうことができます。保護者の場合には、いつでも話しかけられ話を聞いてもらえる同僚がすぐそばにいないといった、「学校に相当する空間」がありません。すぐ近くに友人や同僚がいないという条件の差が17.8ポイントの差を生んでいると考えられます。

図43：不満や不信を友人や同僚に話す（保護者・教員）

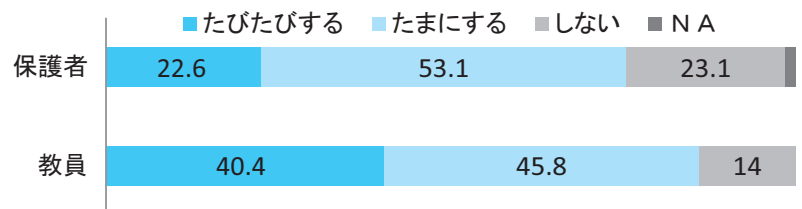
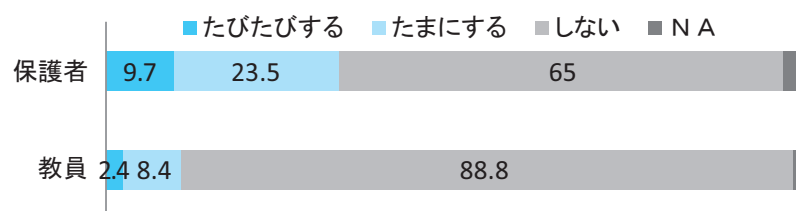


図44は、「不満や不信」を感じたとき保護者と教員が「メールする」と回答した結果を示したものです。職場という同じ空間に同僚がいる教員はわざわざメールという手段を使わなくても、直接話すことで自分の気持ちを伝えることができます。

図44：不満や不信を感じたとき、メールする



誰かに自分の気持ちを伝えることで、気持ちが落ち着く

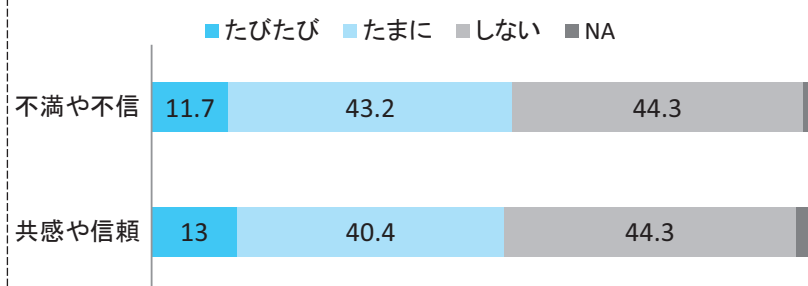
直接話したり、メールしたり、誰かに自分の気持ちを伝える（聞いてもらう）ことによって気持ちが落ち着くということがあります。たかぶった気持ちをメールしたとき、「そうだよね。」「その気持ちはわかる。」「わたしもそんなことあった。」などの言葉が返ってくると、「自分だけじゃなかった。」「そんなにイライラすることもない。」と冷静になることができます。場合によってはそこで「不満や不信」が解消することもあります。自分の気持ちを伝え、それを受け止めてもらえる人がいることは大事なことだと思います。

4 保護者からの「共感や信頼」のメッセージを受け取る

保護者からの「共感や信頼」のメッセージを受けたという実感があまりない

保護者が不満や不信を感じたり、共感や信頼したりしたときの行動はよく似ていること、保護者どうしのメールの内容は教員（学校）に対する不満や不信に偏ったものではないことを調査結果から見てきました。半数以上の保護者が、「共感や信頼」を感じたとき、「学校や先生に伝える」と回答し、しかも「共感や信頼」

図45：「不満や不信」「共感や信頼」を学校や先生に伝える（保護者）



を感じた場合と「不満や不信」を感じた場合の行動パターンは非常によく似ています（図45）。

しかし、教員からは、「（不満や不信のメッセージに比べ）保護者からの共感や信頼のメッセージを受け取ったという印象はあまりない」という声を聞きます。「共感や信頼」に対し、「不満や不信」は

何らかの手立てが求められ、改善されるまで「不満や不信」は継続します。また、「不満や不信」の多くは具体的に指摘されますが、「共感や信頼」のメッセージは「よかった。」といったような漠然とした表現で伝えられることも共感や信頼のメッセージの印象を薄くしている原因になっていると思います。



ちょっと一息：ほごしゃのほんね ～その7～

共感したことを先生に伝える

「共感したことをメールで送ったことはないけれど、運動会の演技がよかったときなどお母さんどうして『よかったね～』と話すことはありますね」

「そういったことはある。参観会で、子どもらが一生懸命やっているのを見たりすると『先生よくやってくれているな』って思う。あまり口に出して先生には言わないけれど、お母さんどうしでは話しをすることはけっこうあるよね」

「子どもの様子がよくなったことはわかるから、先生がやってくれていることもわかる」

「改めて（感謝の）気持ちを言葉で言わなくても、チャンスがあれば伝えたいと思っている人はけっこういるんじゃない」

「読書ノートに『ありがとうございます』って書くこともあるしね」

「わざわざメールを送ったり電話したりしないけど、連絡帳に『ありがとうございます』って書くことはあるよね」

「そういうことならしたことはある」

多くの学校で年度末に「学校評価」のアンケートを取っています。今回の調査では「学校評価に書く」という人も多くいましたが…

「学校評価の質問には答えます」

「答えて学校に提出するけど、『学校に不満はありませんか』『問題があったとき対応は適切だった』という質問が多くないですか。保護者の不満を聞いてくれるのはありがたいけれど…」

「共感したことを書かせるというか、『よくなったところはどこですか』『こんなところがよくなった』ということを質問するとそっちの方にも目が向くようになるんじゃないかな」

「不満なことは、それがなくなるまでずっと気になるけど、よかったことって『よかったな』で終わってそれが当たり前になるから、よかったことを書くこともいいかもしれない」

「そうすれば、親も（学校の）いいことの方にも目が向くようになると思う。先生たちの（学校評価の）聞き方が悪い」（笑い）

「学校評価の質問の仕方を考えた方がいいんじゃないですか」

『教育についてどのように考えているか』を把握しておくことは、保護者と教員のコミュニケーションの基本的な条件になります。「学校教育で大切にしたいこと」や「公教育として考えること」について意識調査を行いました。

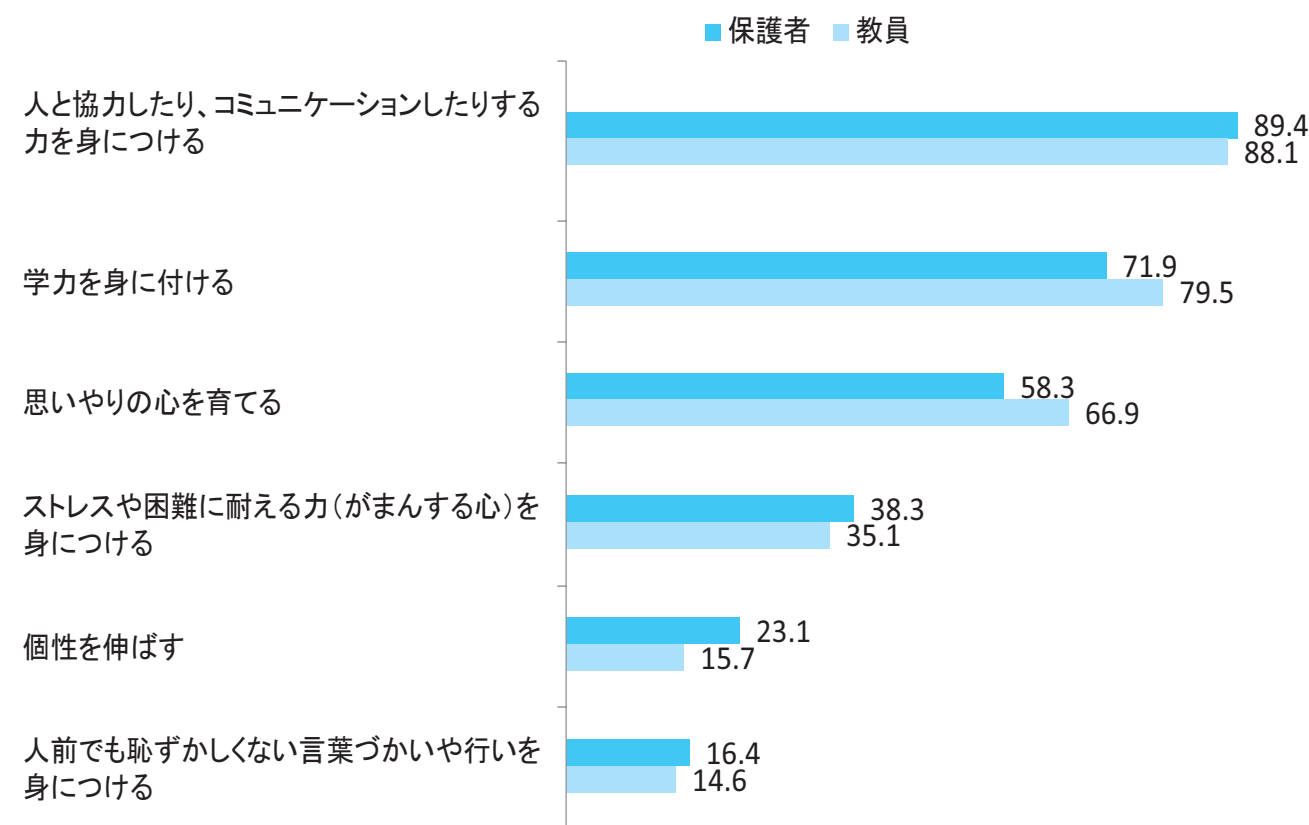
あなたが学校教育で大切にしたいと思っていることについてお聞きします。次の中から大切にしたいと強く思うものを3つ選んでください

Ⅵ 学校教育で大切にしたいこと

「人と協力したり、コミュニケーションしたりする力」「学力を身に付ける」「思いやりの心を育てる」

「学校教育で大切にしたいこと」について保護者と教員に聞きました。調査は、学校教育で大切にしたいことについて、「個性を伸ばす」「学力を身に付ける」「人と協力したりコミュニケーションしたりする力を身に付ける」「ストレスや困難に耐える力（がまんする心）を身に付ける」「思いやりの心を育てる」「人前でも恥ずかしくない言葉づかいや行いを身に付ける」の6つの選択肢から3つを選ぶという方法で行いました。図46は、その調査結果を比較したものです。保護者と教員の選んだ順位、選んだ割合ともによく似ています。

図46：学校で大切にしたいこと（保護者・教員）



学校で大切にしたいこと：もっとも多かったのは「人とつながる力」

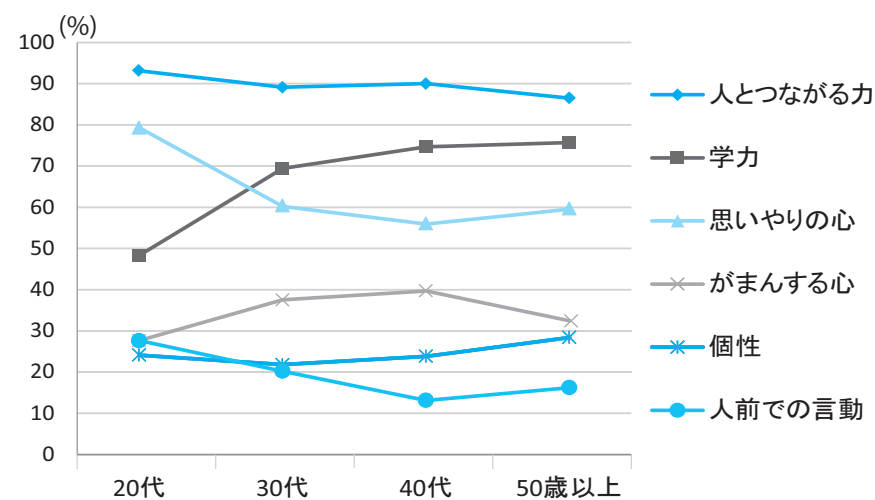
今回の調査を実施した時期（2013年10月）は、全国学力・学習状況調査の結果が公表され、「静岡県の学力」がメディアなどでも盛んに取り上げられた時期でした。学校教育で大切にしたいこととして「学力を身に付ける」を挙げる人が多いのではないかと予想していましたが、保護者・教員とも最も多くの人が、大切なこととして挙げたのは「人と協力したりコミュニケーションしたりする力を身に付ける」でした。保護

者も教員も90%近い人が「大切にしたいこと」として選んでいます。

「学力を身に付ける」を選んだ保護者の71.9%、教員の79.5%という数値は決して少ない数字ではありませんが、約20%の人が「学力を身に付ける」ことを選ばなかったとことも意外でした。

若い年代に多く選ばれた「思いやり」：年代別の回答傾向を見る

図47：学校で大切にしたいこと：年代別の回答（保護者・教員）



学校で大切にしたいこと：年代別の回答傾向（教員）

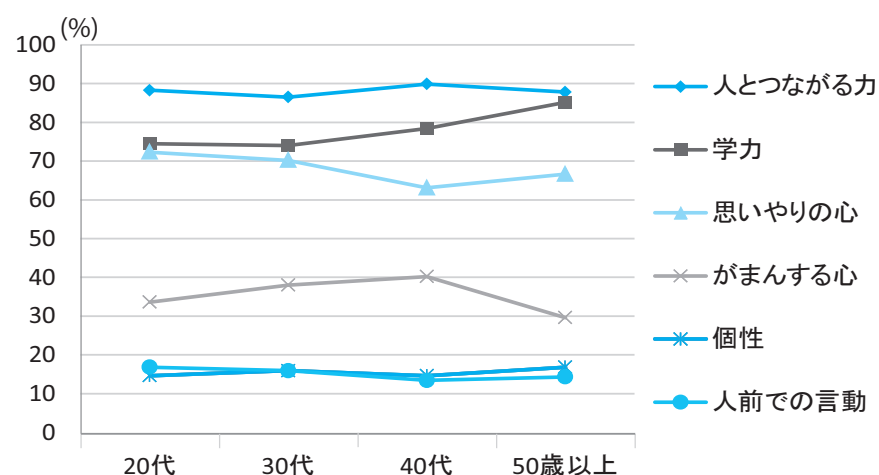


図47は、各項目が選択された割合を回答者の年代ごとに示したものです（保護者の20代未満は調査人数が1人だったので除きました）。「コミュニケーションする力」「学力を身に付ける」「思いやりの心を育てる」は、各年代とも上位を占めていますが、年代による回答割合を見ると同じではありません。「コミュニケーションする力」は各年代とも最も多く選ばれていますが、保護者の場合、年代が高くなるにしたがって少しずつ選んだ人の割合が減る傾向が見られます。

「学力を身に付ける」を選んだ割合は、保護者、教員ともに20代で最も低く、年齢が高くなるにしたがって多くなっています。それに対し、「思いやりの心は」は年代が高くなるにしたがって選んだ割合が低くなっています。

「人とのコミュニケーション」や「思いやりの心」など、人とのつながりが大切だという回答の背景にあるもの

「いじめ」「不登校」「引きこもり」など子どもたちの「人とのつながり」に関わる問題や事件がメディアなどで大きく取り上げられます。学校や教室でも、子どもたちの「人とのつながり方」に危うさを感じることがあります。教員は、日々の学級づくりや生徒指導の中心的な課題として子どもたちの「人とのつながり」「人眼関係づくり」に気を配っています。保護者も「学校教育の大切なこと」としてとりくまないと、子どもたちが人間関係のトラブルに巻き込まれてしまうのではないかと、という危機感をもっていることが考えられます。

学校教育で大切にしたいこととして「思いやりの心」が、保護者、教員ともに上位グループに入っています。「思いやりの心」が相手に対する「親切や優しさ」だけでなく、相手を思いやり相手の立場を考慮することにより「人とのつながりを深める」、といった積極的な意味で捉えられているように思います。

「学校で大切にしたいこと：学力」と「全国学力・学習状況調査の結果公表」との関係

「学校で大切にしたい」こととして挙げられた「学力を身に付ける」「人とのコミュニケーション」「思いやりの心」は、教育についての考えや、学校と家庭の役割分担、保護者と教員の信頼などどのように関わっているか回答ごとにクロス集計を行いました。注目したのは学校教育で大切にしたいこととして「学力を身に付ける」の回答と「全国学力・学習状況調査結果を公表する」ことの間の関係でした。図 48 は、保護者と教員のクロス集計結果です。

学校で大切にしたいこととして「学力を身に付ける」ことを選んだ人は、「学力調査結果の公表」について積極的な考えをもっているのではないかと予想しましたが、両者の間に統計的に有意な相関関係は認められませんでした。「学力を身に付けることが大切」と考える人が「全国学力・学習状況調査結果の公表」に積極的な考えをもっているということではないことが示されました。

今回の調査からは、全国学力・学習状況調査で測る「学力」と学校で大切にしたい「学力」の中身が同じものなのか、あるいは別のものなのかは判断できません。保護者や教員が大切にしたいと考える「学力」とはどのようなものを指しているのか、全国学力・学習状況調査で測定しようとしている「学力」とはどのようなものであるのか、学力・学習状況調査結果を公表することにどのような意味があるのか、今後の議論を待ちたいと思います。

図48：学校で大切にしたいこと：学力×全国学力調査結果の公表
(保護者)

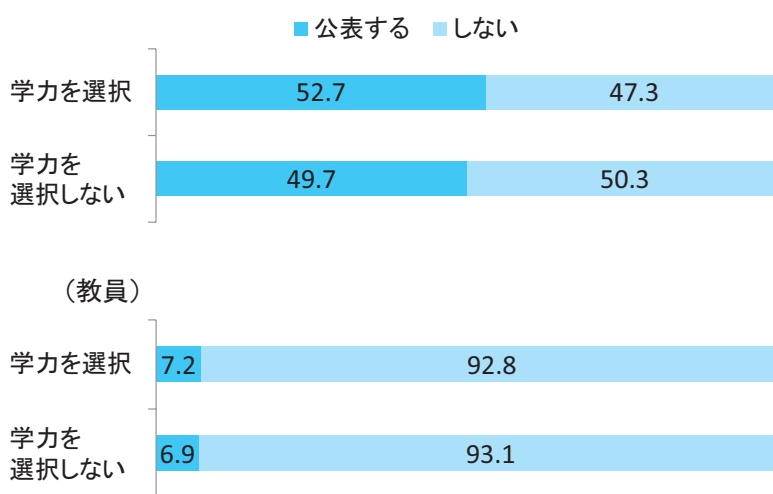
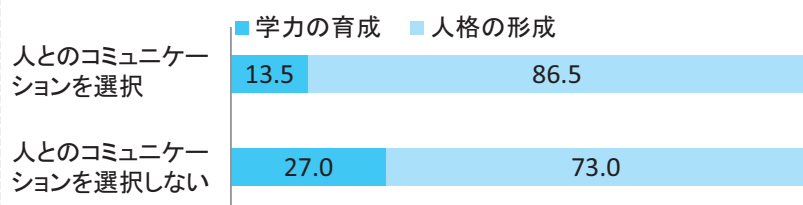


図49：学校で大切にしたいこと：人とのコミュニケーション×人格の形成（保護者）



そのほかのクロス集計の結果からは、「個性を伸ばす」を選んだ保護者が「学校選択制の拡大を望む」傾向にあること、「コミュニケーションする力」を選んだ保護者は「学校は人格形成や集団活動に力を入れるべきだ」と考えている割合が多い（図 49）ことなどが分かりました。

次の各組のA・B 2つの意見についてお聞きします。あなたの考えに近い番号を○で囲んでください。

Ⅶ 公教育として考えること

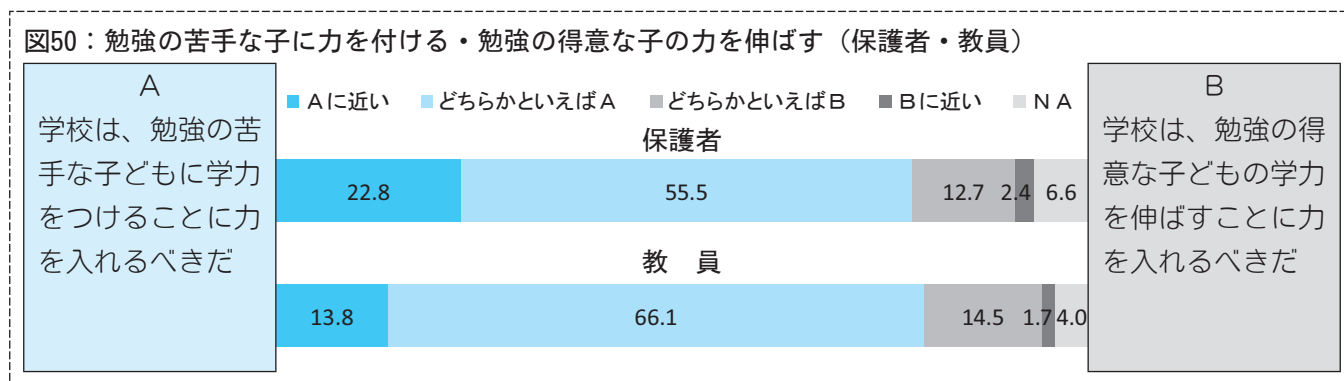
学校教育の今日的なトピックについてどのように考えるか、AとBに具体的な条件を示しどちらに近いか答えてもらいました。AとBに示した条件は必ずしも対立するものではありません。

クロス集計にあたっては、「Aに近い」「どちらかといえばAに近い」の回答を足し合わせて「Aにちかい」「Bに近い」「どちらかといえばBに近い」の回答を足し合わせて「Bにちかい」としました。

1 どの子どもにも同じような教育を

勉強が得意な子どもを伸ばすより、苦手な子どもに学力をつける

図50は、「A：学校は、勉強の苦手な子どもに学力を付けることに力を入れるべきだ、B：学校は勉強の得意な子どもの学力を伸ばすことに力を入れるべきだ」についての保護者と教員の回答結果です。



保護者と教員の回答傾向が似ています。保護者の78.3%、教員の79.9%が「Aに近い」「どちらかといえばAに近い」と答えています。保護者も教員も、公教育の役割として「勉強の苦手な子どもへの対応」を基本的な考えとしていることがわかります。「Bにちかい」と答えた人が「勉強の苦手な子どもに学力をつける」ことを否定していることではなく、「Aにちかい」と答えた人が「勉強の得意な子の学力を伸ばすこと」を否定していることでもありません。

回答者の性別や年齢などによる回答傾向の違いは、「期待する最終学歴」を除いてほとんど差がありません。

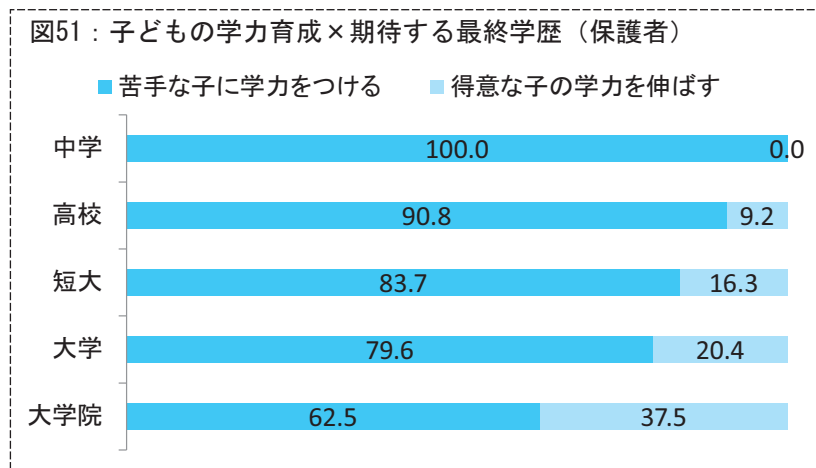


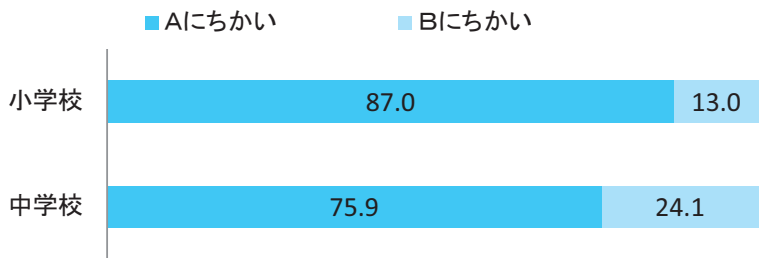
図51は保護者の「期待する最終学歴」とのクロス集計結果を示したものです。期待する学歴が高いほど「Bにちかい」を選んだ割合が高いという傾向が見られますが、最終学歴として「大学院」を考えている保護者のおよそ60%、「大学」を考えている保護者のおよそ80%が、「勉強の苦手な子どもに学力をつける」（A）を選択しています。このことも、公教育の役割として「勉強の苦手な子どもへの対応」を重視していることを示し

ています。

教員の回答を校種別に見ると、小学校に比べ、中学校の教員の「Bにちかい」という回答が10ポイントほど高くなっています(図52)。中学校の教員の「Bにちかい」という回答が多いのは、高校進学や高校受験が影響していると考えられます。なお、この調査項目に対する回答は、他の調査項目に比べNAの割合が多く見られました。

「Aも大事だがBも大事だ」と考えている人が多かったことを示しています。

図52：子どもの学力育成×校種（教員）

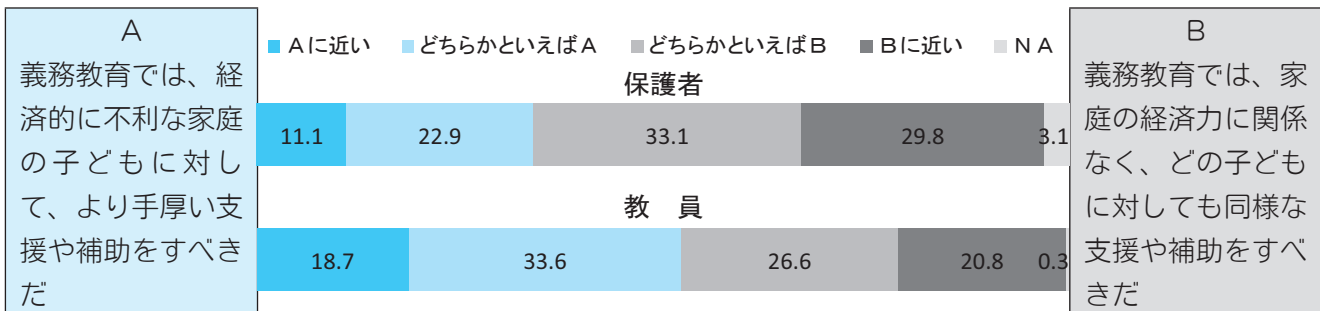


子どもへの支援や補助：「どの子どもに対しても同じような支援や補助を」

格差の拡大や「子どもの貧困」が問題になっています。これまでの調査結果の分析でも、家庭の経済や生活のゆとりが子どもとの関係に影響を与えていることが見られました。学校においても進路の選択や校納金の集金などの際、家庭の経済的な状況の影響を見ることがあります。公的支援の不十分さを「自己責任」で補填せざるを得ない状況が増えています。

図53は、子どもへの支援や補助について「A：経済的に不利な家庭の子どもに対して、より手厚い支援や補助をする、B：家庭の経済力に関係なくどの子どもに対しても同じような支援や補助をする」についての回答結果です。

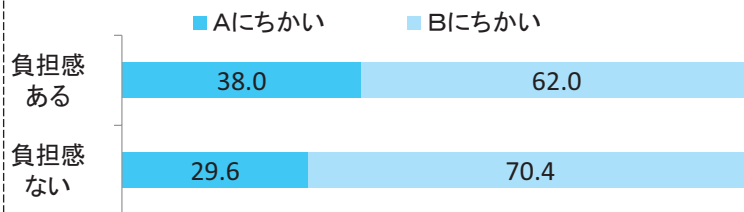
図53：経済的に不利な家庭の子どもに手厚い支援・どの子どもにも同じような支援（保護者・教員）



教員のほぼ半数は「Aにちかい」と答えていますが、保護者で「Aにちかい」を選んだ人は1/3にとどまっています。教員に「支援や補助」について「具体的に何をイメージしたか」たずねると「経済的な支援」と答えています。一方、保護者からは「優しくする」「親切にする」「声かけをして丁寧な指導をする」などの答が返ってきました。保護者はクラスの誰が経済的に不利な状況にあるのか見えないので、支援や補助の内容が「経済的な支援」に結びつかなかったと考えられます。

図54に「教育費の支援」と「教育費の負担感」のクロス集計結果を示しました。負担感を感じている保護者の方が、10ポイントほど多く、「不利な子どもに厚く」を選んでいます。教育費の公的支援の拡大を求めるより、不足分は自己責任で対応しようとする意識が強いことがうかがえます。

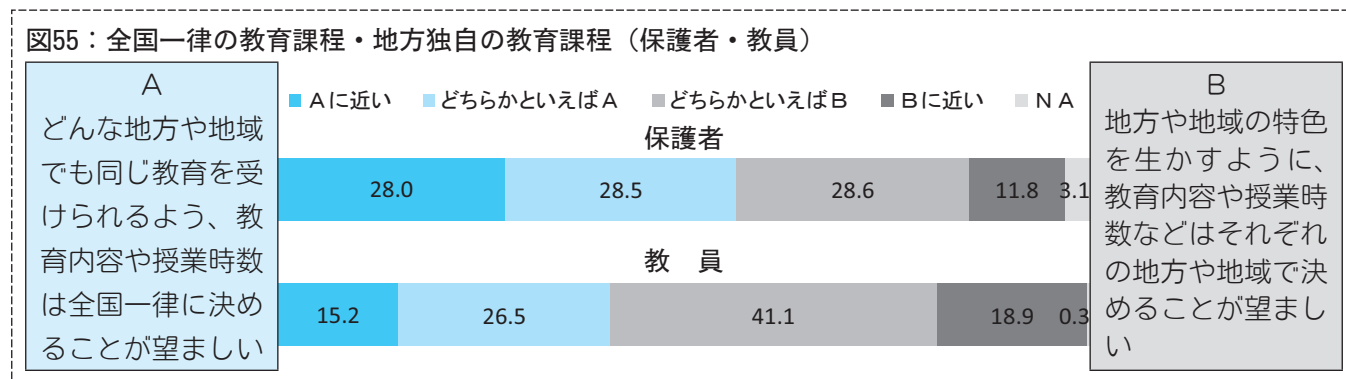
図54：教育費の支援×教育費の負担感（保護者）



保護者の間でも子どもの貧困が話題になることがあると聞きます。調査用紙の「支援や補助」の表現を「経済的な支援」としていれば、「Aにちかい」を選択した保護者が多くなったかもしれません。

「全国一律の教育課程」への支持

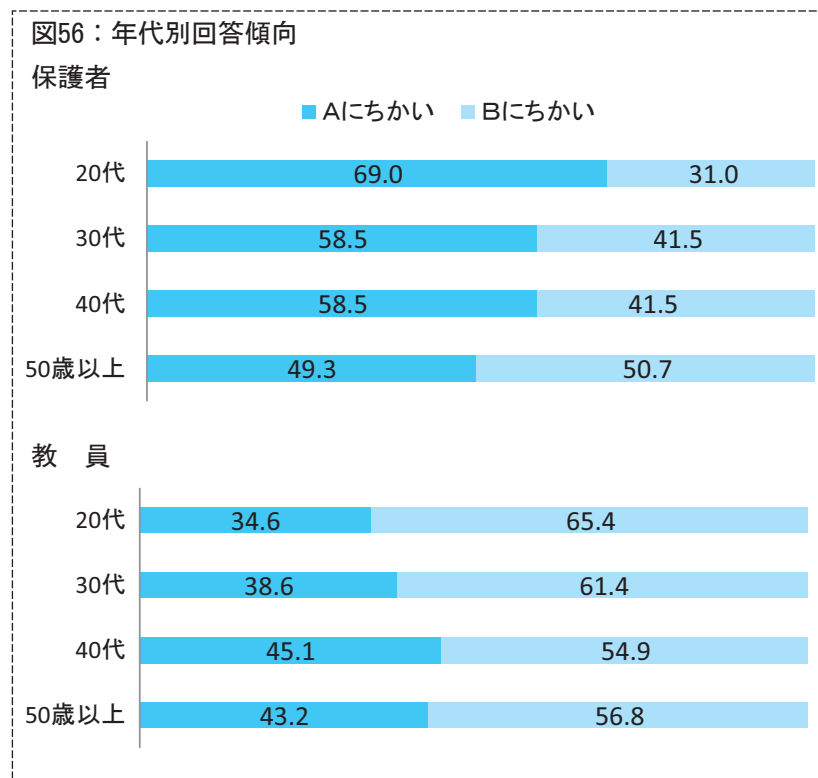
図 55 は、教育内容や授業時間数について、「A：どんな地域でも同じ教育が受けられるよう、教育内容や授業時数を全国一律にする、B：地方の特色を生かすよう教育内容や授業時数をそれぞれの地方で決める」についての保護者と教員の回答結果です。



保護者の56.5%が「Aにちかい」と答えているのに対し、教員が「Aにちかい」と答えたのは31.7%と15ポイントほど低くなっています。「規制緩和」「自由裁量の拡大」が喧伝されているなかで、保護者の過半数が「全国一律の教育内容や授業時数」を望んでいることが注目されます。

人や社会資本の一極集中が進み、中央と地方の格差が拡大し、地域・地方の未来が描きにくくなっています。それだけに、「せめて義務教育は教育の内容や授業時数などを全国同じもので」と考えているのかもしれない。

学校ごとに、それぞれ地域や地元の特色を生かし、地域と連携を図りつつ、教育活動を行っている先生方からすると、全国一律は、現状に合わないという先生方の思いではないでしょうか。民主的な教育創造的で、

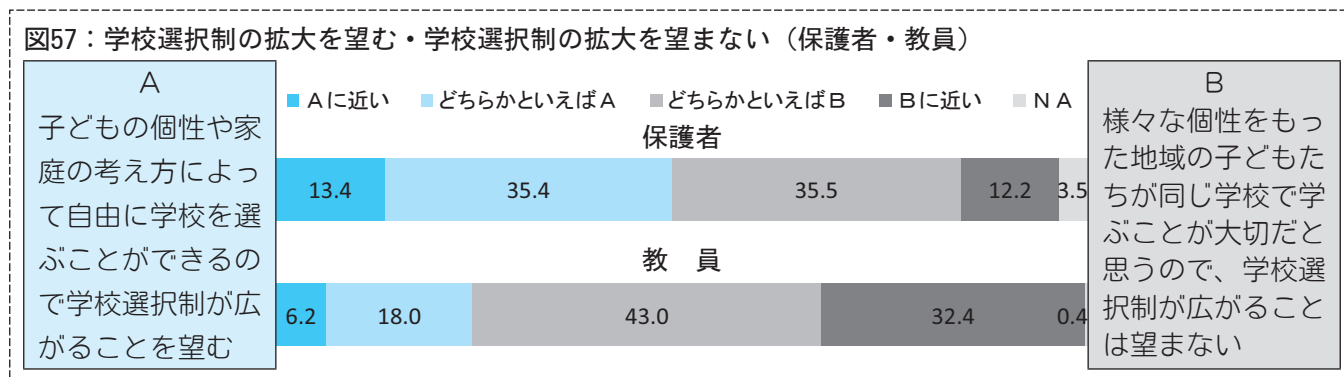


自主的な教育課程は、大切にする必要があります。

年代別の回答傾向を見ると、図 56 に示したように、保護者では若い年代に「全国一律の教育内容や授業時数（教育課程）」を選んだ割合が高い傾向が見られます。教員は各年代で、「Aにちかい」に比べ「Bにちかい」が高い数値を示しています（図 56）。

保護者の「学校選択制の拡大を希望する」という回答は半数

図 57 は、「A：子どもの個性や家庭の考え方によって自由に学校を選ぶことができるので、学校選択制が広がることを望む」「B：様々な個性をもった地域の子どもたちが同じ学校で学ぶことが大切だと思うので、学校選択制が広がることは望まない」について、保護者と教員の回答結果です。



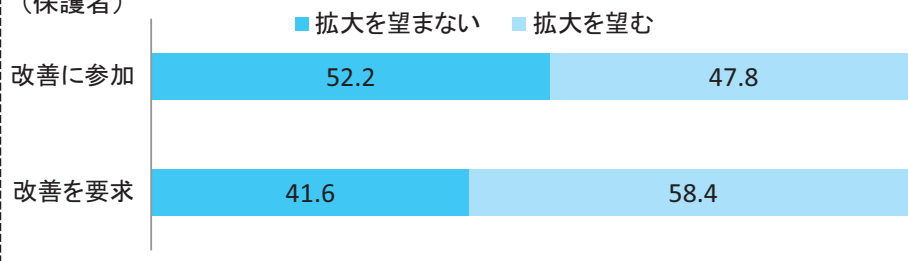
静岡県の場合、私立の小中学校が少なく公立学校で比較的等質な教育が行われているという特色があります。公立の学校が等質化するのはいかなる教育課程によるところもありますが、定期的な人事異動が行われることによって、長期にわたり学校の特色を維持することが難しいという面があります。

「学校選択制」について、保護者の答は「Aにちかい」と「Bにちかい」が、ほぼ半数ずつです。「Aにちかい」を選んだ保護者の中には、生徒数の減少により部活動の選択肢が限られているので「(好きな部活動を選ばせたいので)学校選択制の拡大を希望する」と考えた人もいます。

「Bにちかい」という選択には、現行の制度において、学校を選ぶということ自体考えにくいということや地域の教育や地域に根ざした学校を大事にしたい、といった意識がうかがえます。

図 58 は、「学校選択制」と「保護者の学校の改善参加」のクロス集計結果です。学校に問題があるとき、「改善に参加する」と考える人は、「学校選択制の

図58：学校選択制の拡大を望む×学校改善に参加する（保護者）



拡大を望まない」と答える人の割合が多い傾向にあることが示されました。



ちょっと一息：ほごしゃのほんね ～その8～

学校選択制について、どのように考えますか。

「学校選択制って、あまり考えたことないよね」

「小学校は地元の学校に入るって考えている。それ以外考えたこともない」

「小学校は地元の学校に入学するのが当たり前のことだと思っているから…、学校選択制って考えたことはないよね」

「地元の小学校も合併っていうか、統合っていうか、少なくなっているし」

「学校選択制どころじゃない」

「中学校のことだけれど、学校が荒れていたってときがあったけれど、そのときは荒れていない学校に入れたと思ったことがあったけれど…」

「生徒の数が少なくなって、部活の数も減ってくると入りたい部活がなかったりすることがあるんですね。」

隣の学校には入りたいって部活があると、どうしようかなって考えたこともありました」
「うちも、(中学校に入りたい) 部活がないってことがあった。けど、友だちも行くからって地元の中学に行きました」
「部活をやりたいってことが子どもの個性を伸ばすことかどうかわからないけど、家庭の考えで学校を選ぼうってことは考えたことはなかった」
「教育方針がどうこうってことで学校を選ぼうってことはあまり考えない。中高一貫校に行かせたいっていうことを聞いたことはあるけれど」

2 学校が力を入れるべきこと：「学力の育成」より「人格形成」を

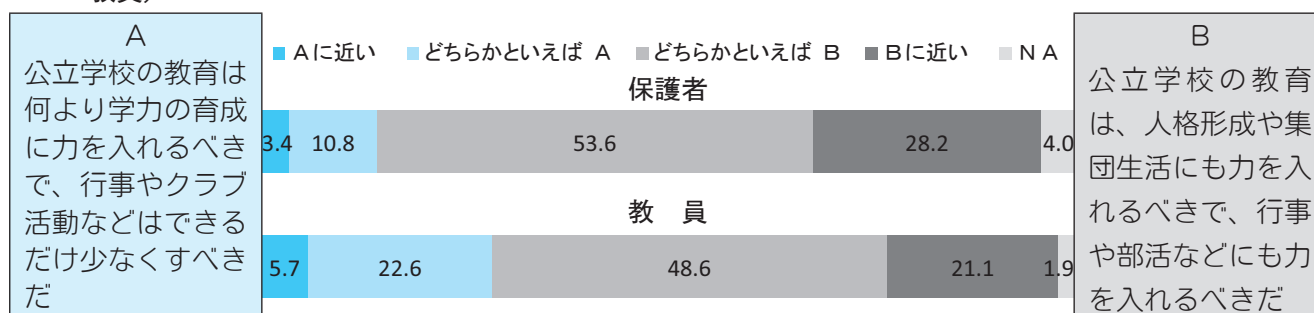
学力の国際比較や全国学力・学習状況調査の実施などにより、「学力向上」の圧力が強まっています。今回の調査を計画しているときにも全国学力・学習状況調査の結果がメディアで大きく取り上げられました。

公立学校が力を入れるべきものとして、「人格の形成」「学力の育成」を取り上げ、保護者と教員の考えを聞きました。「人格の形成」も「学力の育成」も学校教育として重要な柱であることは改めて言うまでもないことです。どちらか一つを選択するというものでもありませんが、学校教育のベースとして「人格の形成」「学力の育成」についてどのように考えているのか、あえて選択肢を設け答えていただきました。

「学力の育成」より「人格の形成」を教育のベースに

図 59 は、「公立学校で力を入れるべきもの」についての回答結果です。保護者の 80%以上、教員の 70%が、学校教育のベースとして「人格の形成」を考え、行事や部活動に力を入れるべきと考えています。

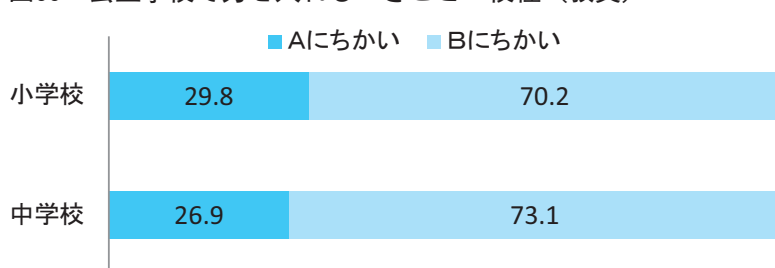
図59：公立学校は何より学力の育成に力を入れる・公立学校では人格形成や集団生活にも力を入れる（保護者・教員）



保護者は、人格の形成を大事に考えていることがわかります。

図 60 は、教員の校種別回答傾向を示したものです。受検や進学などの圧力を受けている中学校の教員に「何より学力の育成に力を入れるべき」という回答が多いのではないかと予想していましたが、結果は、中学校の教員と小学校の教員では回答傾向に差がないことを示しています。むしろ、わずかですが中学校の教員に「Bにちかい」という回答が多く見られました。

図60：公立学校で力を入れるべきこと×校種（教員）



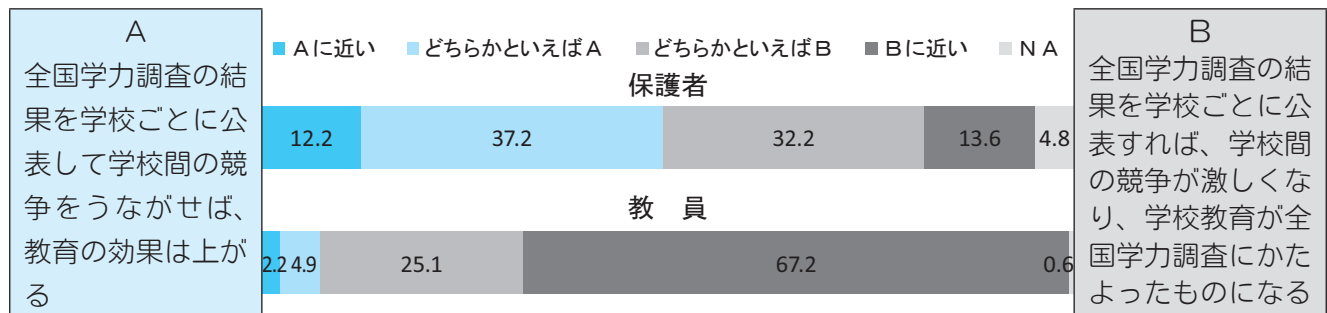
より学力の育成に力を入れるべき」という回答が多いのではないかと予想していましたが、結果は、中学校の教員と小学校の教員では回答傾向に差がないことを示しています。むしろ、わずかですが中学校の教員に「Bにちかい」という回答が多く見られました。

中学校の教員が日頃から「部活動や学校行事、特別活動などは子どもの成長に欠かせない役割を果たしている」ということを感じていることを示しています。

3 全国学力・学習状況調査結果の公表は慎重に

図 61 は、全国学力・学習状況調査の結果公表について保護者と教員の回答結果を示したものです。90%を超える教員が、結果が公表されることにより学校教育がテスト対策をはじめ、教育内容が学力調査にかたよったものになることを危惧しています。

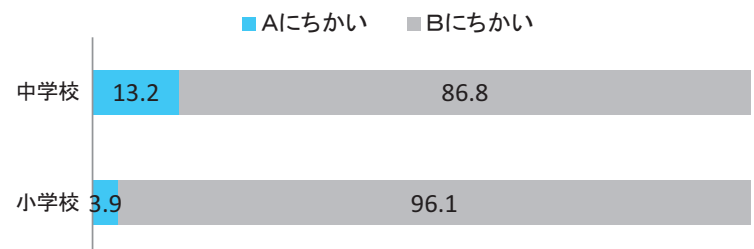
図61：全国学力調査の結果公表は教育の効果につながる・結果公表は学校教育を全国学力調査にかたよったものにする（保護者・教員）



調査時期が「静岡の学力問題」としてメディアで大きく取り上げられた時期と重なったため、保護者の回答は「Aにちかい」ものが大半を占めるのではないかと予想しましたが、結果は結果を公表することに積極的な回答と、公表による弊害を考える回答とが半数に分かれました。保護者がメディアの情報を冷静に受け止めている様子がうかがえます。

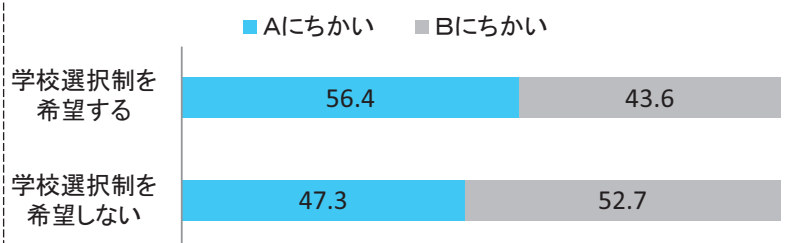
「全国学力・学習状況調査結果の公表」について調査したところ、教員の校種との間に、中学校の教員は小学校の教員に比べ「Aにちかい」と回答した割合が多いというクロス集計結果が得られました（図 62）。小学校の教員に比べ、中学校の教員の回答に「Aにちかい」と回答した人が多いのは、高校受検などで受検結果（相対的な評定結果）の公表と向き合わざるを得ないこととも関係しているように思います。

図62：全国学力調査結果の公表×校種（教員）



保護者については、図 63 に示すように、学校選択制に対する考えとの間で、学校選択制の拡大を希望する人に「Aにちかい」と答えた人が多く見られました（図 63）。

図63：全国学力調査結果の公表×学校選択制（保護者）



全国学力・学習状況調査結果の公表については、その弊害を危惧する教員が非常に多いこと、保護者の意見もおよそ半数に分かれていることなどを踏まえ、慎重に判断することが必要だと考えます。

「学校教育で大切にしたいこと」について「学力を身に付ける」と回答したものと、「全国学力・学習状況調査結果の公表」との間には統計的に有意な相関関係は認められなかったことについては先にふれました。子どもに身に付けさせたい学力とはどのようなものなのか、またそれが身に付いているかどうかを測る手立てはどのようなものが適切か、測った結果の扱いについてはどうすべきかなどについて十分な議論と合意が必要だと考えます。

4 保護者の学校へのかかわり：「改善を求める」より「改善に参加を」

図 64 の 1・2 は、保護者の学校へのかかわりについて、保護者、教員がそれぞれどのように考えているかを示したものです。

図64 の 1：学校に問題があれば改善を要求する・学校に問題があれば改善に参加する（保護者）

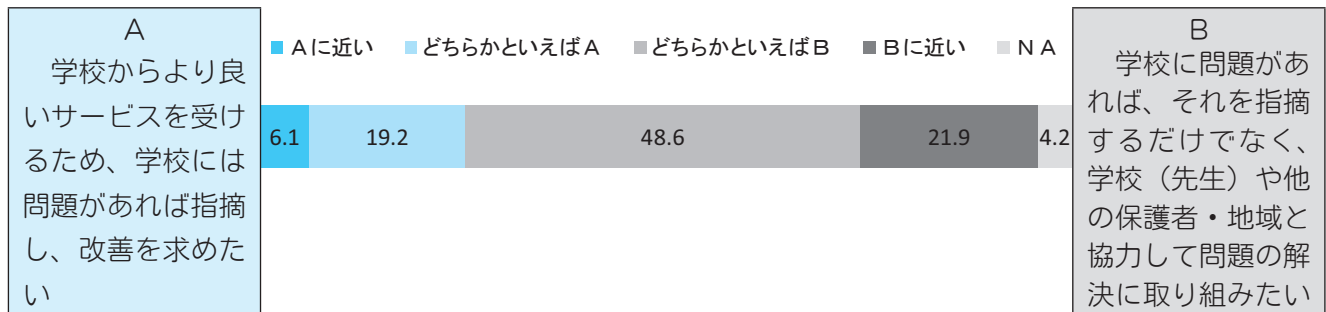


図64 の 2：学校の問題は学校で改善する・学校に協力して改善に参加してほしい（教員）

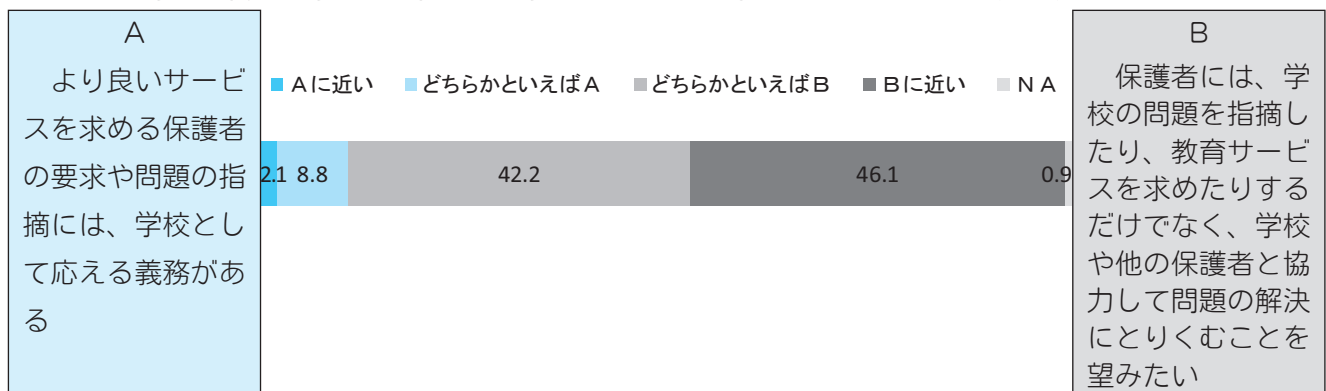


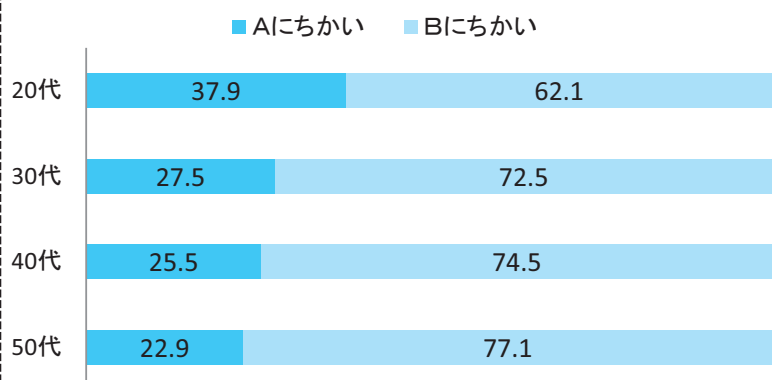
図 64 の 1 からわかるように、保護者の 70% 近くが、学校の問題には、学校や先生方と協力して問題解決に当たりたいと考えています。図 64 の 2 では、教員の 90% 近くが、保護者が学校に協力して改善に参加することを望んでいます。これは、学校の問題を改善することに対し保護者が協力・参加することに、保護者も教員も積極的な考えをもっているということです。学校の問題等に対し、学校が保護者と連携を図りながら改善をするためには、保護者と教員（学校）のコミュニケーションを深めることが求められます。

ただし学校の現状を考えると、保護者の参加希望があってもそれをコーディネートする人が不足しています。参加を希望してくださる保護者の特技や時間的な条件などをくみ取りながら、学校のニーズを考え、どこにどのように改善への協力・参加を求めるか、具体的な人の配置をどのようにお願いするかなどを継続的に調整する人あるいは組織が必要です。

今すぐ保護者の協力したい・参加したいという気持ちを全面的に受け入れることには無理があるかもしれませんが、保護者の参加意識が高いことに心強いものを感じます。

保護者の年代別の意識について図 65 に示しました。年齢が高くなるにしたがって

図65：改善に参加する・改善を要求する×年齢（保護者）

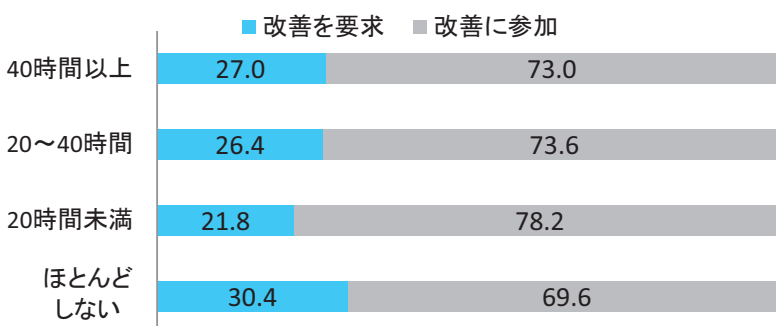


「改善を要求する」ことが減り「改善に参加する」という回答が増えています。

年代によって「改善に参加する」と答える人の割合に差が生じた理由については、学校と関係する時間が増えることによって「改善に参加する」という人が増える（年齢効果）のか、年齢の高い人世代に「改善に参加する」と考える人が多く、若い人ほど「改善に参加する」と考える人が減っていく（世代効果）のか、今回の調査からでは判断することができません。若い世代の人の考えをよく聞く必要があると感じます。

図 66 は、「就労時間」と「学校参加」のクロス集計結果です。「就労時間の長短」と「学校参加」の間には有意な相関は認められません。少なくとも現状では「学校の抱える問題解決に参加しよう」という意識が「就労時間が長い（仕事が忙しい）」ことに影響されていないことが分かります。

図66：「保護者の学校教育参加」×就労時間（保護者）



まとめにかえて

いくつかの提言：保護者・家庭と、教員・学校のコミュニケーションを広げるために

調査が終了し、およそ1年をかけて調査結果を読み解く作業を重ねました。その結果についてはこれまで述べたとおりです。調査部会で調査結果を読み解く作業をしながら、「保護者と教員のコミュニケーションを広げるためにはどのようなことに留意したらいいのか」についても議論が広がりました。以下にその議論をまとめたものを紹介し、調査報告書のまとめに代えます。

大きな違いが見られなかった保護者と教員の意識

調査を行うときには、いままで自分たちが「当然」と考えてきたことについて、それを覆すような調査結果が得られることへの期待があります。これまで「当然」としてきた「常識」が覆され、新しい知見を得るというのは調査活動の楽しみでもあります。

今回の調査結果を見ると、保護者と教員の回答傾向がよく似ていました。回答傾向がよく似ていたということは、これまでの保護者と教員とのコミュニケーションのあり方に大きな問題がなく、双方同じような意識をもっていたことが示されたと考えます。このことを踏まえながら、保護者と教員のコミュニケーションをさらに広げる方策について考えます。

ネガティブな情報の共有からポジティブな情報の共有を

保護者から教員、教員から保護者に対する「不満や不信・共感や信頼のメッセージ」についての調査結果の分析をしているとき、保護者の回答結果を見ると、教員への共感や信頼のメッセージも発信されていることが示されていますが、（保護者から）共感や信頼のメッセージを受け取ったという実感が少なく、不満や不信のメッセージを意識することが多い、という声がありました。

調査結果の分析のところでも触れましたが、期末や年度末に行っている学校評価では、学校や教員に対する要望・学校に対する不満や要望などが質問項目として設定されることがよくあります。不満や不信の原因を取り除くことは、保護者（家庭）と教員（学校）の信頼関係をより強くする上で必要なことです。しかし、信頼関係を強くするために、子どもたちのどこがよかったのか、教員の指導のどこがよかったのかなど、よかったこと（ポジティブ）の情報を共有することも大切だと思います。改善点についての評価が気になるところですが、子どもや学校に対するポジティブな情報を共有することで教職員が自信をもったり、期待されていると感じたりするようになります。

学校を子どもにとってよいものにしていくために、改善点を明らかにすると同時に、よくなったことを共有できるような学校評価を考えることが大事だと考えます。学校評価の質問内容を見直し、工夫することで保護者の視線もポジティブな面に向いていくことが期待されます。

メールを意識しすぎない

今回の調査では、保護者と教員の回答結果がよく似ていましたが、保護者と教員の回答に差が見られたものに、「学校の様子を知る上で何を参考にするか・何を重視してほしいか」という質問の中の「保護者どうしのメール」についての回答がありました。

学校の様子を知るうえで「保護者どうしのメールを参考にする」と答えた保護者が80%近くいるのに対し、80%を超える教員が「保護者どうしのメールを重視する必要がない」と答えています。80%を超える教員が「保護者どうしのメールを参考にする必要がない」と答えた理由はどこにあるのでしょうか。調査部会では、このような大きな差が生まれた原因として、教員は「保護者どうしのメール」に対して、情報が正確に伝わっていないのではないかと感じていることが議論されました。メールなどの伝聞の情報には誤解や尾ひれが付いてしまうことがあります。また、保護者どうしで交わされるメールにより傷ついた教員もいます。一旦広がった情報は、その広がりを止めたり、訂正をしたり、情報の内容について弁明をしたりすることは非常に

難しくなります。

今回の調査結果からは、保護者の間で交わされるメールが学校や教員の噂や悪口などの媒体として積極的に利用されているわけではないことが分かりました。調査結果は、メールでやりとりされる内容のほとんどが、学校からのお知らせについての確認や、子どもの持ち物の確認などでした。

「保護者どうしのメール」の内容に、必要以上に神経質にならず、発信者の顔が見える情報を大事にすることが大切だと考えます。

顔を合わせたコミュニケーションの時間の捻出

発信者の顔が見える情報・顔を合わせたコミュニケーションについて、保護者も教員も高い信頼を寄せています。問題は、その時間をどのように捻出するかということです。保護者に直接行った聞き取り調査でも、「1年間に先生と話し合える時間は15分程度しかない」「話をしようと思っても時間がとれず、先生と話し合うことを諦める」と言った声が聞かれました。コミュニケーションの基本である顔を合わせて話し合うことがいかに大切かがわかります。Face to Face、顔をつき合わせ話し合う場を工夫してつくりたいものです。

相手の立場を考えた情報の発信、言葉や言い方の選択を慎重に

教員と同様に保護者も子育てや教育に対して様々なストレスを感じています。そのストレスを理解することもコミュニケーションを広げるうえで大事なことだと考えます。今回の調査では保護者のストレスについては多くの質問項目を設けるに至らず、子育てに関わる限られた項目について聞くにとどまりました。その少ない調査結果からも、保護者に家庭のしつけや家庭教育が子どもの将来に大きく影響することや、教育費の負担感などのストレスが加わっていることが明らかになっています。保護者の抱える「困り感」を理解することが学校からのメッセージをうまく保護者に伝えることにつながると考えます。

些細なことのように思えますが、保護者からの聞き取り調査のなかで「特に学校からはありません、という先生の発言に困った」という声がありました。「特に学校からはありません。」ということは、「お子さんは問題を抱えていません。」という積極的なメッセージとして口にしたわけですが、保護者の言葉を引き出す言葉として適切かどうかは疑問です。短い時間の中でコミュニケーションをするには、相手に誤解を与えるような言い方は避けることが望ましいと思います。

また、「具体的な子どもの行動について話してほしい。」という声も受け止めたいことです。個人情報への配慮などで具体的な子どもの名前を挙げてたよりを書くことには配慮が必要です。すでにどの学校や教室でも行われていることですが、個人を特定しないような表現を工夫しながら、具体的な子どもの様子やその日の出来事などを発信することが必要だと感じました。

最後になりましたが、お忙しいなか、調査に協力いただいた保護者、静教組組合員、県PTA連絡協議会の方々に感謝するとともに、お礼申し上げます。今回の調査結果をもとに、保護者と教員のコミュニケーションが更に広がることを願っています。

2015.3.11 静教組立教育研究所「調査部」

「保護者と教員に対する意識調査」用紙（保護者用）

保護者・家庭と教員・学校のコミュニケーション ～共通理解に向けての意識調査～

調査協力をお願い

日頃は静岡県教職員組合立教育研究所および静岡県PTA連絡協議会の活動にご理解とご協力をいただき、ありがとうございます。

子どもたちや家庭・学校をとりまく環境が大きく変化し、子どもたちの抱える問題も多様化しています。子どものすこやかな成長を支えるには、保護者と教員がそれぞれの立場を尊重しながら、共通する課題やお互いの立場からくる違いなどを理解し、協力し合うことがこれまで以上に求められています。

保護者(家庭)と教員(学校)が、より強固な協力連携の関係を結び、子どものすこやかな成長を支え合うために、子どもの教育についての意識や、保護者と教員のコミュニケーションについての調査を実施することとしました。

調査結果で明らかになった共通部分をたいせつにし、また立場の違いによる意識の「違い」を認め合うことにより、お互いの信頼関係はさらに深まるものと考えます。

おいそがしいところ恐縮ですが、調査にご協力いただきますようお願いいたします。

なお、本調査の結果は、個人が特定されないように、すべて統計的に処理しますので、回答いただいた方にご迷惑をおかけすることはありません。

2013年10月

静岡県教職員組合立教育研究所
静岡県PTA連絡協議会

<記入上の注意>

- ・質問項目によって、「あてはまる番号を○で囲む」「3つ選び口に番号を書く」など回答方法がちがいます。それぞれの質問項目の指示によってお答えください。

この調査に回答している人(おもに回答している人)についてお聞きます。あてはまる番号を1つ選び○で囲んでください

F 1 : あなたのお子さんは何人ですか

1 : 1 人 2 : 2 人 3 : 3 人 4 : 4 人以上

F 2 : 一番上のお子さんは何年生ですか

1 : 小 2 2 : 小 3 3 : 小 4 4 : 小 5 5 : 小 6 6 : 中 1 7 : 中 2
8 : 中 3 9 : 高校生以上

F 3 : 回答対象のお子さんの学年をお答えください

1 : 小 2 2 : 小 5 3 : 中 2

F 4 : 回答対象のお子さんの性別をお答えください

1 : 男 2 : 女

F 5 : お子さんとあなたの関係(続柄)をお答えください

1 : 母親 2 : 父親 3 : 祖母・祖父 4 : その他

F 6 : あなたは、家事や育児以外の仕事を一週間にどのくらいしていますか

1 : 週40時間以上 2 : 週20時間以上40時間未満 3 : 週20時間未満 4 : ほとんどしない

F 7 : あなたは、P T Aの役員(学級役員をふくむ)を経験したことがありますか

1 : ある 2 : ない

F 8 : あなたの年齢をお答えください

1 : 20歳未満 2 : 20歳代 3 : 30歳代 4 : 40歳代 5 : 50歳以上

1 先生と話したいことについてお聞きます。つぎのことについてどのように思っていますか。あてはまる番号を○で囲んでください

1 : 話し合いができています 2 : もっと話し合いたい 3 : 話し合う必要を感じない

Q 1 : 学校での子どものよいところ

1 — 2 — 3

Q 2 : 学校での子どもの悪いところ

1 — 2 — 3

Q 3 : 授業中の子どものようす

1 — 2 — 3

Q 4 : 授業の仕方やすすみ方

1 — 2 — 3

Q 5 : 学校のきまりやその指導

1 — 2 — 3

Q 6 : 家での勉強のさせ方や宿題

1 — 2 — 3

Q 7 : しつけの仕方

1 — 2 — 3

Q 8 : 親子の関わり方

1 — 2 — 3

Q 9 : 家庭のこと

1 — 2 — 3

- Q10：健康や体調のこと 1 — 2 — 3
- Q11：友だち関係のこと 1 — 2 — 3
- Q12：進学や進路のこと 1 — 2 — 3

2 つぎのことについて、学校と家庭の役割はどうあったらいいと思いますか。あてはまる番号を○で囲んでください

1：おもに学校がかかわる 2：おもに家庭がかかわる

- Q1：進学や就職など将来の進路 1 — 2
- Q2：飼育・栽培・採集などの自然体験 1 — 2
- Q3：インターネットやメールの利用の仕方 1 — 2
- Q4：基本的な生活習慣に関すること 1 — 2
- Q5：喫煙・飲酒・性・薬物等に関すること 1 — 2
- Q6：防災・交通安全・不審者への対応など安全に関すること 1 — 2
- Q7：人との接し方や友だち付き合いの仕方 1 — 2
- Q8：公共のマナー 1 — 2

3 子育てや子どもの教育について、ふだんどのように感じていますか。あてはまる番号を○で囲んでください

1：そう思う 2：どちらかといえば思う 3：どちらかといえば思わない 4：そう思わない

- Q1：子育てや家庭の教育に自信をもっとりくんでいる 1 — 2 — 3 — 4
- Q2：家庭のしつけや教育は、子どもの将来(成長)に大きく影響する 1 — 2 — 3 — 4
- Q3：学校から求められる宿題や本読みの点検などを負担に感じる 1 — 2 — 3 — 4
- Q4：子育てや子どもの教育に疲れたと思うことがある 1 — 2 — 3 — 4
- Q5：子どもの成長や将来について必要と思うことには、できるだけお金をかけてやりたいと思う 1 — 2 — 3 — 4

4 あなたが学校教育で大切にしたいと思うことについてお聞きます。つぎの中から大切にしたいと強く思うものを3つ選び、番号を口に書いてください

1 : 個性を伸ばす

2 : 学力を身に付ける

3 : 人と協力したりコミュニケーションしたりする力を身に付ける

4 : ストレスや困難に耐える力(がまんする心)を身に付ける

5 : 思いやりの心を育てる

6 : 人前でも恥ずかしくない言葉づかいや行いを身に付ける

--	--	--

5 学校のようなすを知るうえで、つぎのことをどの程度参考にしますか。あてはまる番号を○で囲んでください

1 : 参考にする	2 : どちらかといえば参考にする	3 : どちらかといえば参考にしない
4 : 参考にしない		

Q 1 : 「学校だより」や「学校の教育方針」などの配付物

1 — 2 — 3 — 4

Q 2 : 学校のホームページ

1 — 2 — 3 — 4

Q 3 : 「学級だより」「学年だより」などの配付物

1 — 2 — 3 — 4

Q 4 : 参観会や学校行事などで直接見た学校のようなす

1 — 2 — 3 — 4

Q 5 : 我が子から聞く学校やクラスの話

1 — 2 — 3 — 4

Q 6 : 同級生や子どもの友だちから聞く学校やクラスの話

1 — 2 — 3 — 4

Q 7 : 直接、先生から聞いた話

1 — 2 — 3 — 4

Q 8 : 保護者どうしの話やメールなどでやりとりされる学校のこと

1 — 2 — 3 — 4

Q 9 : テレビや新聞で報道されるいろいろな学校の出来事

1 — 2 — 3 — 4

6 お子さんの通う学校や先生に不満や不信を感じたことがありますか。あてはまる番号を○で囲んでください

1 : ある 2 : ない

「1 : ある」を選んだ人にお聞きます。学校や教員に不満や不信を感じたとき、どのような行動でそれを表しましたか。あてはまる番号を○で囲んでください

(「2 : ない」を選んだ人は 7 にすすんでください)

1 : たびたびしたことがある	2 : たまにしたことがある	3 : したことはない
-----------------	----------------	-------------

- Q 1 : すぐに学校や先生に伝える(電話で話す、手紙を書くこともふくむ) 1 — 2 — 3
- Q 2 : 学期末や年度末の学校評価(アンケートなど)に書く 1 — 2 — 3
- Q 3 : 保護者面談や参観会、懇談会のときに伝える 1 — 2 — 3
- Q 4 : 教育委員会などに電話したり、投書したりする 1 — 2 — 3
- Q 5 : 他の保護者や友人に話す(会って話す、電話で話すなど) 1 — 2 — 3
- Q 6 : 他の保護者や友人にメールなどで伝える 1 — 2 — 3

7 お子さんの通う学校や先生に共感や信頼を感じたことがありますか。あてはまる番号を○で囲んでください

1 : ある 2 : ない

「1 : ある」を選んだ人にお聞きします。学校や先生に共感や信頼を感じたとき、どのような行動でそれを表しましたか。あてはまる番号を○で囲んでください
(「2 : ない」を選んだ人は 8 にすすんでください)

1 : たびたびしたことがある 2 : たまにしたことがある 3 : したことはない

- Q 1 : すぐに学校や先生に伝える(電話で話す、手紙を書くこともふくむ) 1 — 2 — 3
- Q 2 : 学期末や年度末の学校評価(アンケート)に書く 1 — 2 — 3
- Q 3 : 保護者面談や参観会、懇談会のときに伝える 1 — 2 — 3
- Q 4 : 教育委員会などに電話したり、投書したりする 1 — 2 — 3
- Q 5 : 他の保護者や友人に話す(会って話す、電話で話すなど) 1 — 2 — 3
- Q 6 : 他の保護者や友人にメールなどで伝える 1 — 2 — 3

8 つぎの各組のA・B 2つの意見についてお聞きします。あなたの考えに近い番号を○で囲んでください

1 : Aに近い 2 : どちらかといえばAに近い 3 : どちらかといえばBに近い 4 : Bに近い

- Q 1 : A : 義務教育では、経済的に不利な家庭の子どもに対して、より手厚い支援や補助をすべきだ
B : 義務教育では、家庭の経済力に関係なく、どの子どもに対しても同様な支援や補助をすべきだ 1 — 2 — 3 — 4
- Q 2 : A : どんな地方や地域でも同じ教育を受けられるよう、教育内容や授業時間数などは全国一律に決めることが望ましい
B : 地方や地域の特色を生かすように、教育内容や授業時間数などはそれぞれの地方や地域で決めることが望ましい 1 — 2 — 3 — 4

- Q 3 : A : 全国学力調査の結果を学校ごとに公表して学校間の競争をうながせば、教育の効果は上がる
 B : 全国学力調査の結果を学校ごとに公表すれば、学校間の競争がはげしくなり、学校教育が全国学力調査にかたよったものになる 1 — 2 — 3 — 4
- Q 4 : A : 子どもの個性や家庭の考え方によって自由に学校を選ぶことができるので、学校選択制が広がることを望む
 B : 様々な個性をもった地域子どもたちが同じ学校で学ぶことがたいせつだと思うので、学校選択制が広がることは望まない 1 — 2 — 3 — 4
- Q 5 : A : 学校は、勉強の苦手な子どもに学力をつけることに力を入れるべきだ
 B : 学校は、勉強の得意な子どもの学力を伸ばすことに力を入れるべきだ 1 — 2 — 3 — 4
- Q 6 : A : 公立学校の教育は、何より学力（教科の知識や課題解決能力などもふくむ）の育成に力を入れるべきで、行事やクラブ活動などはできるだけ少なくすべきだ
 B : 公立学校の教育は、人格形成や集団生活にも力を入れるべきで、行事や部活などにも力を入れるべきだ 1 — 2 — 3 — 4
- Q 7 : A : 学校からよりよい教育サービスを受けるため、学校に問題があれば指摘し改善を求めたい
 B : 学校に問題があれば、それを指摘するだけでなく、学校（先生）や他の保護者・地域と協力して問題の解決にとりくみたい 1 — 2 — 3 — 4

9 あなたは、お子さんの通う学校に対してどの程度満足していますか。あてはまる番号を○で囲んでください

- 1 : 満足している 2 : やや満足している 3 : やや不満である 4 : 不満である

10 お子さんにはどのような最終学歴を期待していますか。あてはまる番号を○で囲んでください

- 1 : 中学校卒業まで 2 : 高等学校卒業まで 3 : 専門学校卒業まで
 4 : 高専・短大卒業まで 5 : 4年生大学卒業まで 6 : 大学院卒業まで

11 あなたの家庭の生活程度は世間一般から見て、つぎのように分けるとどれに入りますか。あてはまる番号を○で囲んでください

- 1 : 上 2 : 中の上 3 : 中の中 4 : 中の下 5 : 下

12 家計にしめる「子どもの教育費」(学用品・給食・諸会費・塾や習い事・部活やスポーツクラブなどの費用)についてどのように感じていますか。あてはまる番号を○で囲んでください

- 1 : 負担を感じる 2 : やや負担を感じる 3 : あまり負担に感じない 4 : 負担に感じない

※ご協力ありがとうございました。調査用紙を同封の封筒に入れ封をして担任の先生に提出してください。

「保護者と教員に対する意識調査」用紙（教員用）

保護者・家庭と教員・学校のコミュニケーション ～共通理解に向けての意識調査～

調査協力をお願い

日頃は静岡県教職員組合立教育研究所および静岡県PTA連絡協議会の活動にご理解とご協力をいただき、ありがとうございます。

子どもたちや家庭・学校をとりまく環境が大きく変化し、子どもたちの抱える問題も多様化しています。子どものすこやかな成長を支えるには、保護者と教員がそれぞれの立場を尊重しながら、共通する課題やお互いの立場からくる違いなどを理解し、協力し合うことがこれまで以上に求められています。

保護者(家庭)と教員(学校)が、より強固な協力連携の関係を結び、子どものすこやかな成長を支え合うために、子どもの教育についての意識や、保護者と教員のコミュニケーションについての調査を実施することとしました。

調査結果で明らかになった共通部分をたいせつにし、また立場の違いによる意識の「違い」を認め合うことにより、お互いの信頼関係はさらに深まるものと考えます。

おいそがしいところ恐縮ですが、調査にご協力いただきますようお願いいたします。

なお、本調査の結果は、個人が特定されないように、すべて統計的に処理しますので、回答いただいた方にご迷惑をおかけすることはありません。

2013年10月

静岡県教職員組合立教育研究所
静岡県PTA連絡協議会

<記入上の注意>

- ・質問項目によって、「あてはまる番号を○で囲む」「3つ選び口に番号を書く」など回答方法が異なります。それぞれの質問項目の指示によってお答えください。

あなたのことについてお聞きます。あてはまる番号を○で囲んでください

F 1 : 性別についてお答えください 1 : 男性 2 : 女性

F 2 : 年齢についてお答えください

1 : 20歳代 2 : 30歳代 3 : 40歳代 4 : 50歳以上

F 3 : 勤務年数についてお答えください(講師経験をふくむ)

1 : 5年未満 2 : 5年～10年未満 3 : 10年～20年未満 4 : 20年～30年未満

5 : 30年以上

F 4 : 勤務する学校の校種についてお答えください

1 : 小学校 2 : 中学校 3 : 小中併設・小中一貫校

F 5 : 勤務する学校の学級数についてお答えください(特別支援学級をふくむ)

1 : 6学級以下 2 : 7～12学級 3 : 13～18学級 4 : 19～24学級 5 : 25学級以上

F 6 : 現在担当している分掌についてあてはまるものすべてに○をつけてください (複数回答可)

1 : 学級担任 2 : 学年主任 3 : 教務主任 4 : 生徒指導主任・主事 5 : 研修主任

6 : 特別支援コーディネーター 7 : 部活動顧問 8 : 主幹教諭 9 : 該当無し

1 あなたが保護者と話したいと思っていることについてお聞きます。つぎのことについてどのように思っていますか。あてはまる番号を○で囲んでください

1 : 話し合いができています	2 : もっと話し合いたい	3 : 話し合う必要を感じない
-----------------	---------------	-----------------

Q 1 : 学校での子どものよいところ 1 — 2 — 3

(Q 1 q 1)

Q 2 : 学校での子どもの悪いところ 1 — 2 — 3

Q 3 : 授業中の子どものようす 1 — 2 — 3

Q 4 : 授業の仕方やすすみ方 1 — 2 — 3

Q 5 : 学校のきまりやその指導 1 — 2 — 3

Q 6 : 家での勉強のさせ方や宿題 1 — 2 — 3

Q 7 : しつけの仕方 1 — 2 — 3

Q 8 : 親子の関わり方 1 — 2 — 3

- Q 9 : 家庭のこと 1 — 2 — 3
- Q 10 : 健康や体調のこと 1 — 2 — 3
- Q 11 : 友だち関係のこと 1 — 2 — 3
- Q 12 : 進学や進路のこと 1 — 2 — 3

2 つぎのことについて、学校と家庭の役割はどうあったらいいと思いますか。あてはまる番号を○で囲んでください

1 : おもに学校がかかわる 2 : おもに家庭がかかわる

- Q 1 : 進学や就職など将来の進路 1 — 2
- Q 2 : 飼育・栽培・採集などの自然体験 1 — 2
- Q 3 : インターネットやメールの利用の仕方 1 — 2
- Q 4 : 基本的な生活習慣に関すること 1 — 2
- Q 5 : 喫煙・飲酒・性・薬物等に関すること 1 — 2
- Q 6 : 防災・交通安全・不審者への対応など安全に関すること 1 — 2
- Q 7 : 人との接し方や友だち付き合いの仕方 1 — 2
- Q 8 : 公共のマナー 1 — 2

3 あなたが学校教育で大切にしたいと思っていることについてお聞きします。つぎの中から大切にしたいと強く思うものを3つ選び、番号を口に書いてください

- 1 : 個性を伸ばす
- 2 : 学力を身に付ける
- 3 : 人と協力したりコミュニケーションしたりする力を身に付ける
- 4 : ストレスや困難に耐える力(がまんする心)を身に付ける
- 5 : 思いやりの心を育てる
- 6 : 人前でも恥ずかしくない言葉づかいや行いを身に付ける

--	--	--

4 あなたは、保護者が学校の様子を知るとき、どのような情報を重視してほしいと思いますか。あてはまる番号を○で囲んでください

1 : 重視してほしい 2 : どちらかといえば重視してほしい
3 : どちらかといえば重視する必要はない 4 : 重視する必要はない

- Q 1 : 「学校だより」や「学校の教育方針」などの配付物 1 — 2 — 3 — 4
- Q 2 : 学校のホームページ 1 — 2 — 3 — 4
- Q 3 : 「学級だより」「学年だより」などの配付物 1 — 2 — 3 — 4
- Q 4 : 参観会や学校行事などで直接見た学校の様子 1 — 2 — 3 — 4
- Q 5 : 我が子から聞く学校やクラスの話 1 — 2 — 3 — 4
- Q 6 : 同級生や子どもの友だちから聞く学校やクラスの話 1 — 2 — 3 — 4
- Q 7 : 直接、教師が伝えた話 1 — 2 — 3 — 4
- Q 8 : 保護者どうしの話やメールなどでやりとりされる学校のこと 1 — 2 — 3 — 4
- Q 9 : テレビや新聞で報道されるいろいろな学校の出来事 1 — 2 — 3 — 4

5 保護者に対して不満や不信を感じたことがありますか。あてはまる番号を○で囲んでください

1 : ある 2 : ない

「1 : ある」を選んだ人にお聞きします。保護者に不満や不信を感じたとき、どのような行動でそれ
を表しましたか。あてはまる番号を○で囲んでください
(「2 : ない」を選んだ人は 6 にすすんでください)

1 : たびたびしたことがある 2 : たまにしたことがある 3 : したことはない

- Q 1 : 直接、相手の保護者に伝える(電話で話す、手紙を書くこともふくむ) 1 — 2 — 3
- Q 2 : 保護者面談や参観会、懇談会のときに伝える 1 — 2 — 3
- Q 3 : 管理職や主任に伝える 1 — 2 — 3
- Q 4 : 同僚や友人に話す(会って話す、電話で話すなど) 1 — 2 — 3
- Q 5 : 同僚や友人にメールなどで伝える 1 — 2 — 3

6 保護者に対して共感や信頼を感じたことがありますか。あてはまる番号を○で囲んでください

1 : ある 2 : ない

「1 : ある」を選んだ人にお聞きします。保護者に対して共感や信頼を感じたとき、どのような行動でそれを表しましたか。あてはまる番号を○で囲んでください
(「2 : ない」を選んだ人は 7 にすすんでください)

1 : たびたびしたことがある 2 : たまにしたことがある 3 : したことはない

Q 1 : 直接、相手の保護者に伝える(電話で話す、手紙を書くこともふくむ) 1 — 2 — 3

Q 2 : 保護者面談や参観会、懇談会のときに伝える 1 — 2 — 3

Q 3 : 管理職や主任に伝える 1 — 2 — 3

Q 4 : 同僚や友人に話す(会って話す、電話で話すなど) 1 — 2 — 3

Q 5 : 同僚や友人にメールなどで伝える 1 — 2 — 3

7 つぎの各組のA・B 2つの意見についてお聞きします。あなたの考えに近い番号を○で囲んでください

1 : Aに近い 2 : どちらかといえばAに近い 3 : どちらかといえばBに近い 4 : Bに近い

Q 1 : A : 義務教育では、経済的に不利な家庭の子どもに対して、より手厚い支援や補助をすべきだ
B : 義務教育では、家庭の経済力に関係なく、どの子どもに対しても同様な支援や補助をすべきだ 1 — 2 — 3 — 4

Q 2 : A : どんな地方や地域でも同じ教育を受けられるよう、教育内容や授業時間数などは全国一律に決めることが望ましい
B : 地方や地域の特色を生かすように、教育内容や授業時間数などはそれぞれの地方や地域で決めることが望ましい 1 — 2 — 3 — 4

Q 3 : A : 全国学力調査の結果を学校ごとに公表して学校間の競争をうながせば、教育の効果は上がる
B : 全国学力調査の結果を学校ごとに公表すれば、学校間の競争がはげしくなり、学校教育が全国学力調査にかたよったものになる 1 — 2 — 3 — 4

Q 4 : A : 子どもの個性や家庭の考え方によって自由に学校を選ぶことができるので、学校選択制が広がることを望む
B : 様々な個性をもった地域子どもたちが同じ学校で学ぶことがたいせつだと思うので、学校選択制が広がることは望まない 1 — 2 — 3 — 4

- Q 5 : A : 学校は、勉強の苦手な子どもに学力をつけることに力を入れるべきだ
 B : 学校は、勉強の得意な子どもの学力を伸ばすことに力を入れるべきだ
 1 — 2 — 3 — 4
- Q 6 : A : 公立学校の教育は、何より学力（教科の知識や課題解決能力などもふくむ）の育成に力を注ぐべきで、行事やクラブ活動などではできるだけ少なくすべきだ
 B : 公立学校の教育は、人格形成や集団生活にも力を入れるべきで、行事や部活などにも力を入れるべきだ
 1 — 2 — 3 — 4
- Q 7 : A : よりよい教育サービスを求める保護者の要求や問題の指摘には、学校として応える義務がある
 B : 保護者には、学校の問題を指摘したり、教育サービスを求めたりするだけでなく、学校や他の保護者と協力して問題の解決にとりくむことを望みたい
 1 — 2 — 3 — 4

8 : 勤務や保護者との関係などについてお聞きます。あてはまる番号を○で囲んでください

1 : そう思う	2 : どちらかといえば思う	3 : どちらかといえば思わない	4 : 思わない
----------	----------------	------------------	----------

- Q 1 : 自分の授業に満足している
 1 — 2 — 3 — 4
- Q 2 : 子どもたちとの関係は良好だ
 1 — 2 — 3 — 4
- Q 3 : 生徒指導への対応に難しさを感じている
 1 — 2 — 3 — 4
- Q 4 : 子どもの指導に対して保護者の協力が得られず苦慮することがある
 1 — 2 — 3 — 4
- Q 5 : 職場には協力し合える人間関係がある
 1 — 2 — 3 — 4

※ご協力ありがとうございました。本調査用紙を同封の封筒に入れ投函してください。

「保護者と教員に対する意識調査」単純集計結果…1(保護者：回答数1835)

・無答や指定外の回答はNAの欄に集計し、小数第2位を四捨五入した百分率で示した。

この調査に回答している人(おもに回答している人)についてお聞きします。あてはまる番号を1つ選び○で囲んでください

F 1 : あなたのお子さんは何人ですか

	1人	2人	3人	4人以上	NA	合計
%	12.3	51.8	29.6	6.0	0.3	100.0

F 2 : 一番上のお子さんは何年生ですか

	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高校以上	NA	合計
%	16.5	1.4	4.6	23.4	4.1	5.7	18.4	4.9	20.6	0.6	100.0

F 3 : 回答対象のお子さんの学年をお答えください

	小2	小5	中2	NA	合計
%	34.1	37.7	27.4	0.8	100.0

F 4 : 回答対象のお子さんの性別をお答えください

	男	女	NA	合計
%	47.4	51.1	1.6	100.0

F 5 : お子さんとあなたの関係(続柄)をお答えください

	母親	父親	祖母	その他	NA	合計
%	92.6	6.4	0.4	0.2	0.4	100.0

F 6 : あなたは、家事や育児以外の仕事を一週間にどのくらいしていますか

	40時間以上	20以上40時間未満	20時間未満	ほとんどしない	NA	合計
%	27.4	35.6	18.6	17.4	0.9	100.0

F 7 : あなたは、PTAの役員(学級役員を含む)を経験したことがありますか

	ある	ない	NA	合計
%	67.8	31.7	0.5	100.0

F 8 : あなたの年齢をお答えください

	20歳未満	20歳代	30歳代	40歳代	50歳以上	NA	合計
%	0.1	1.6	42.6	51.3	4.0	0.5	100.0

1 先生と話したいことについてお聞きします。つぎのことについてどのように思っていますか。あてはまる番号を○で囲んでください

1 : 話し合いができています 2 : もっと話し合いたい 3 : 話し合う必要を感じない

Q 1 : 学校での子どものよいところ

	1	2	3	NA	合計
%	54.4	39.8	4.9	0.9	100.0

Q 2 : 学校での子どもの悪いところ

	1	2	3	NA	合計
%	41.4	52.4	5.2	1.0	100.0

Q 3 : 授業中の子どものようす

	1	2	3	NA	合計
%	42.6	50.4	5.8	1.2	100.0

Q 4 : 授業の仕方やすすみ方

	1	2	3	NA	合計
%	26.7	52.7	19.1	1.5	100.0

Q 5 : 学校のきまりやその指導

	1	2	3	NA	合計
%	39.7	38.8	20.1	1.5	100.0

Q 6 : 家での勉強のさせ方や宿題

	1	2	3	NA	合計
%	29.5	49.8	19.5	1.2	100.0

Q 7 : しつけの仕方

	1	2	3	NA	合計
%	26.6	31.9	40.1	1.4	100.0

Q 8 : 親子の関わり方

	1	2	3	NA	合計
%	29.6	26.9	42.2	1.2	100.0

Q 9 : 家庭のこと

	1	2	3	NA	合計
%	32.2	18.4	48.0	1.4	100.0

Q 10 : 健康や体調のこと

	1	2	3	NA	合計
%	46.2	19.3	32.4	2.1	100.0

Q 11 : 友だち関係のこと

	1	2	3	NA	合計
%	35.6	53.1	9.3	2.0	100.0

Q 12 : 進学や進路のこと

	1	2	3	NA	合計
%	21.3	47.0	29.4	2.3	100.0

2 つぎのことについて、学校と家庭の役割はどうあったらいいと思いますか。あてはまる番号を○で囲んでください

1 : おもに学校がかかわる 2 : おもに家庭がかかわる

Q 1 : 進学や就職など将来の進路

	1	2	NA	合計
%	41.1	51.8	7.1	100.0

Q 2 : 飼育・栽培・採集などの自然体験

	1	2	NA	合計
%	59.0	35.9	5.0	100.0

Q 3 : インターネットやメールの利用の仕方

	1	2	NA	合計
%	31.0	64.3	4.7	100.0

Q 4 : 基本的な生活習慣に関すること

	1	2	NA	合計
%	6.5	89.7	3.8	100.0

Q 5 : 喫煙・飲酒・性・薬物等に関すること

	1	2	NA	合計
%	41.7	49.4	9.0	100.0

Q 6 : 防災・交通安全・不審者への対応など安全に関すること

	1	2	NA	合計
%	57.6	33.0	9.4	100.0

Q 7 : 人との接し方や友だち付き合いの仕方

	1	2	NA	合計
%	31.5	59.6	8.9	100.0

Q 8 : 公共のマナー

	1	2	NA	合計
%	18.8	73.7	7.5	100.0

3 子育てや子どもの教育について、ふだんどのように感じていますか。つぎのことについてあてはまる番号を○で囲んでください

1 : そう思う 2 : どちらかといえば思う 3 : どちらかといえば思わない 4 : そう思わない

Q 1 : 子育てや家庭の教育に自信をもってとりくんでいる

	1	2	3	4	NA	合計
%	8.3	54.4	30.1	6.0	1.2	100.0

Q 2 : 家庭のしつけや教育は、子どもの将来(成長)に大きく影響する

	1	2	3	4	NA	合計
%	77.2	20.5	1.3	0.3	0.8	100.0

Q 3 : 学校から求められる宿題や本読みの点検などを負担に感じる

	1	2	3	4	NA	合計
%	5.2	26.5	35.3	31.8	1.2	100.0

Q 4 : 子育てや子どもの教育に疲れたと思うことがある

	1	2	3	4	NA	合計
%	10.5	31.3	32.8	24.2	1.2	100.0

Q5：子どもの成長や将来について必要と思うことには、できるだけお金をかけてやりたいと思う

	1	2	3	4	NA	合計
%	27.6	52.8	14.5	4.1	1.0	100.0

4 あなたが学校教育で大切にしたいと思うことについてお聞きします。つぎの中から大切にしたいと強く思うものを3つ選び、番号を□に書いてください

- 1：個性を伸ばす 2：学力を身につける 3：人と協力したりコミュニケーションしたりする力を身につける
4：ストレスや困難に耐える力(がまんする心)を身につける 5：思いやりの心を育てる
6：人前でも恥ずかしくない言葉づかいや行いを身につける

	1	2	3	4	5	6
%	23.1	71.9	89.4	38.3	58.3	16.4

5 学校のように知るうえで、つぎのことをどの程度参考にしますか。あてはまる番号を○で囲んでください

- 1：参考にする 2：どちらかといえば参考にする 3：どちらかといえば参考にしない 4：参考にしない

Q1：「学校だより」や「学校の教育方針」などの配付物

	1	2	3	4	NA	合計
%	46.3	40.6	10.4	2.1	0.6	100.0

Q2：学校のホームページ

	1	2	3	4	NA	合計
%	10.5	25.1	33.7	29.2	1.5	100.0

Q3：「学級だより」「学年だより」などの配付物

	1	2	3	4	NA	合計
%	64.5	30.0	3.7	1.2	0.6	100.0

Q4：参観会や学校行事などで直接見た学校の様子

	1	2	3	4	NA	合計
%	69.8	26.0	3.1	0.6	0.6	100.0

Q5：我が子から聞く学校やクラスの話

	1	2	3	4	NA	合計
%	59.2	37.8	2.0	0.4	0.7	100.0

Q6：同級生や子どもの友だちから聞く学校やクラスの様子

	1	2	3	4	NA	合計
%	39.1	48.9	9.1	1.9	1.0	100.0

Q7：直接、先生から聞いた話

	1	2	3	4	NA	合計
%	75.1	21.9	1.7	0.5	0.8	100.0

Q8：保護者どうしの話やメールなどでやりとりされる学校のこと

	1	2	3	4	NA	合計
%	27.6	51.7	15.4	4.4	0.9	100.0

Q9：テレビや新聞で報道されるいろいろな学校の出来事

	1	2	3	4	NA	合計
%	16.5	50.6	26.4	5.6	0.9	100.0

6 お子さんの通う学校や先生に不満や不信を感じたことがありますか。あてはまる番号を○で囲んでください

- 1：ある
2：ない

	1	2	NA	合計
%	43.1	55.7	1.2	100.0

「1：ある」を選んだ人にお聞きします。学校や先生に不満や不信を感じたとき、どのような行動でそれを表しましたか。つぎのことについてあてはまる番号を○で囲んでください

- 1：たびたびしたことがある 2：たまにしたことがある 3：したことはない
※「1：ある」と答えたものを100.0とした有効パーセントで表示

Q1：すぐに学校や先生に伝える(電で話す、手紙を書くをふくむ)

	1	2	3	合計
%	11.9	43.8	44.3	100.0

Q2：学期末や年度末の学校評価(アンケートなど)を書く

	1	2	3	合計
%	6.6	34.6	58.8	100.0

Q3：保護者面談や参観会、懇談会のときに伝える

	1	2	3	合計
%	8.8	39.6	51.6	100.0

Q4：教育委員会に電話したり、投書したりする

	1	2	3	合計
%	1.0	2.6	94.4	100.0

Q5：他の保護者や友人に話す(会って話す、電話で話すなど)

	1	2	3	合計
%	23.0	53.9	23.1	100.0

Q6：他の保護者や友人にメールなどで伝える

	1	2	3	合計
%	9.9	23.9	66.2	100.0

7 お子さんの通う学校や先生に共感や信頼を感じたことがありますか。あてはまる番号を○で囲んでください

- 1：ある
2：ない

	1	2	NA	合計
%	79.1	18.9	2.0	100.0

「1：ある」を選んだ人にお聞きします。学校や教員に共感や信頼を感じたとき、どのような行動でそれを表しましたか。つぎのことについてあてはまる番号を○で囲んでください

- 1：たびたびしたことがある 2：たまにしたことがある 3：したことはない
※「1：ある」と答えたもの(実数：1452)を100.0とした有効パーセントで表示

Q1：すぐに学校や先生に伝える(電で話す、手紙を書くをふくむ)

	1	2	3	合計
%	13.3	41.3	45.3	100.0

Q2：学期末や年度末の学校評価(アンケートなど)を書く

	1	2	3	合計
%	10.8	37.1	52.1	100.0

Q3：保護者面談や参観会、懇談会のときに伝える

	1	2	3	合計
%	21.7	47.4	30.9	100.0

Q 4 : 教育委員会に電話したり、投書
したりする

	1	2	3	合計
%	0.6	1.0	98.4	100.0

Q 5 : 他の保護者や友人に話す(会っ
て話す、電話で話すなど)

	1	2	3	合計
%	17.8	54.1	28.1	100.0

Q 6 : 他の保護者や友人にメールなど
で伝える

	1	2	3	合計
%	6.8	26.8	66.5	100.0

8 つぎの各組のA・B 2つの意見についてお聞きます。あなたの考えに近い番号を○で囲んでください
1 : Aに近い 2 : どちらかといえばAに近い 3 : どちらかといえばBに近い 4 : Bに近い

Q 1 : A : 義務教育では、経済的に不利な家庭の子どもに対して、より手厚い支援や補助をすべきだ
B : 義務教育では、家庭の経済力に関係なく、どの子どもに対しても同様な支援や補助をすべきだ

	1	2	3	4	NA	合計
%	11.1	22.9	33.1	29.8	3.1	100.0

Q 2 : A : どんな地方や地域でも同じ教育を受けられるよう、教育内容や授業時間数などは全国一律に決めることが望ましい

B : 地方や地域の特色を生かすように、教育内容や授業時間数などはそれぞれの地方や地域で決めることが望ましい

	1	2	3	4	NA	合計
%	28.0	28.5	28.6	11.8	3.1	100.0

Q 3 : A : 全国学力調査の結果を学校ごとに公表して学校間の競争をうながせば、教育の効果は上がる
B : 全国学力調査の結果を学校ごとに公表すれば、学校間の競争がはげしくなり、学校教育が全国学力調査にかたよったものになる

	1	2	3	4	NA	合計
%	12.2	37.2	32.2	13.6	4.8	100.0

Q 4 : A : 子どもの個性や家庭の考え方によって自由に学校を選ぶことができるので、学校選択制が広がることを望む
B : さまざまな個性をもった地域の子どもたちが同じ学校で学ぶことがたいせつだと思うので、学校選択制が広がることは望まない

	1	2	3	4	NA	合計
%	13.4	35.4	35.5	12.2	3.5	100.0

Q 5 : A : 学校は、勉強の苦手な子どもに学力をつけることに力を入れるべきだ
B : 学校は、勉強の得意な子どもの学力を伸ばすことに力を入れるべきだ

	1	2	3	4	NA	合計
%	22.8	55.5	12.7	2.4	6.6	100.0

Q 6 : A : 公立学校の教育は、何より学力(教科の知識や課題解決能力なども含む)の育成に力を入れるべきで、行事やクラブ活動などはできるだけ少なくすべきだ

B : 公立学校の教育は、人格形成や集団生活にも力を入れるべきで、行事や部活などにも力を入れるべきだ

	1	2	3	4	NA	合計
%	3.4	10.8	53.6	28.2	4.0	100.0

Q 7 : A : 学校からよりよい教育サービスを受けるため、学校に問題があれば指摘し改善を求めたい
B : 学校に問題があれば、それを指摘するだけでなく、学校(先生)や他の保護者・地域と協力して問題の解決にとりくみたい

	1	2	3	4	NA	合計
%	6.1	19.2	48.6	21.9	4.2	100.0

9 あなたは、お子さんの通う学校に対してどの程度満足していますか。あてはまる番号を○で囲んでください
1 : 満足している 2 : やや満足している 3 : やや不満である 4 : 不満である

	1	2	3	4	NA	合計
%	30.4	55.0	11.1	1.7	1.8	100.0

10 お子さんにはどのような最終学歴を期待していますか。あてはまる番号を○で囲んでください

1 : 中学校卒業まで 2 : 高等学校卒業まで 3 : 専門学校卒業まで 4 : 高専・短大卒業まで
5 : 4年生大学卒業まで 6 : 大学院卒業まで

	1	2	3	4	5	6	NA	合計
%	0.2	22.9	14.3	10.7	47.9	2.7	1.2	100.0

11 あなたの家庭の生活程度は世間一般から見て、つぎのように分けるとどれに入りますか。あてはまる番号を○で囲んでください

1 : 上 2 : 中の上 3 : 中の中 4 : 中の下 5 : 下

	1	2	3	4	5	NA	合計
%	1.1	12.6	57.5	22.8	5.0	1.0	100.0

12 家計にしめる「子どもの教育費」(学用品・給食・諸会費・塾や習い事・部活やスポーツクラブなどの費用)についてどのように感じていますか。あてはまる番号を○で囲んでください

1 : 負担に感じる 2 : やや負担に感じる 3 : あまり負担に感じない 4 : 負担に感じない

	1	2	3	4	NA	合計
%	17.4	48.0	27.6	6.3	0.8	100.0

「保護者と教員に対する意識調査」単純集計結果…2(教員：回答数1067)

・各質問項目ごとの回答割合を百分率で示した。集計にあたり、無答や指定外の回答をしたものについてはNAの欄に集計した。小数第2位を四捨五入したため、合計が100.0にならないところもある。

あなたのことについてお聞きします。あてはまる番号を○で囲んでください

F 1 : 性別についてお答えください

1 : 男性 2 : 女性

	1	2	NA	合計
%	48.6	51.1	0.3	100.0

F 2 : 年齢についてお答えください

1 : 20歳代 2 : 30歳代 3 : 40歳代 4 : 50歳以上

	1	2	3	4	NA	合計
%	12.8	19.5	30.7	36.7	0.2	100.0

F 3 : 勤務年数についてお答えください(講師経験を含む)

1 : 5年未満 2 : 5年～10年未満 3 : 10年～20年未満
4 : 20年～30年未満 5 : 30年以上

	1	2	3	4	5	NA	合計
%	10.4	14.1	15.7	36.3	23.4	0.1	100.0

F 4 : 勤務する学校の校種についてお答えください

1 : 小学校 2 : 中学校
3 : 小中併設・小中一貫校

	1	2	3	NA	合計
%	65.2	34.4	0.3	0.1	100.0

F 5 : 勤務する学校の学級数についてお答えください(特別支援学級を含む)

1 : 6学級以下 2 : 7～12学級 3 : 13～18学級 4 : 19～24学級 5 : 25学級以上

	1	2	3	4	5	NA	合計
%	9.6	18.7	27.5	28.1	16.0	0.2	100.0

F 6 : 現在担当している分掌についてあてはまるものすべてに○をつけてください (複数回答可)

1 : 学級担任 2 : 学年主任 3 : 教務主任 4 : 生徒指導主任・主事 5 : 研修主任
6 : 特別支援コーディネーター 7 : 部活動顧問 8 : 主幹教諭 9 : 該当無し

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	NA
%	71.8	26.5	5.3	6.1	6.0	5.6	28.0	1.2	4.9	0.0

1 あなたが保護者と話したいと思っていることについてお聞きします。つぎのことについてどのように思っていますか。あてはまる番号を○で囲んでください

1 : 話し合いができています 2 : もっと話したい 3 : 話し合う必要を感じない

Q 1 : 学校での子どものよいところ

	1	2	3	NA	合計
%	46.4	52.0	1.2	0.4	100.0

Q 2 : 学校での子どもの悪いところ

	1	2	3	NA	合計
%	27.1	68.8	3.7	0.5	100.0

Q 3 : 授業中の子どものようす

	1	2	3	NA	合計
%	30.7	66.3	2.7	0.3	100.0

Q 4 : 授業の仕方やすみ方

	1	2	3	NA	合計
%	22.3	49.3	27.8	0.6	100.0

Q 5 : 学校のきまりやその指導

	1	2	3	NA	合計
%	32.8	61.4	5.4	0.4	100.0

Q 6 : 家での勉強のさせ方や宿題

	1	2	3	NA	合計
%	17.0	77.3	5.2	0.5	100.0

Q 7 : しつけの仕方

	1	2	3	NA	合計
%	10.3	74.5	14.8	0.4	100.0

Q 8 : 親子の関わり方

	1	2	3	NA	合計
%	11.5	74.7	13.2	0.6	100.0

Q 9 : 家庭のこと

	1	2	3	NA	合計
%	14.9	54.5	29.9	0.7	100.0

Q 10 : 健康や体調のこと

	1	2	3	NA	合計
%	42.3	41.5	15.7	0.6	100.0

Q 11 : 友だち関係のこと

	1	2	3	NA	合計
%	29.6	65.1	4.7	0.6	100.0

Q 12 : 進学や進路のこと

	1	2	3	NA	合計
%	26.6	49.4	23.3	0.7	100.0

2 つぎのことについて、学校と家庭の役割はどうあったらいいと思いますか。あてはまる番号を○で囲んでください

1 : おもに学校がかかわる 2 : おもに家庭がかかわる

Q 1 : 進学や就職など将来の進路

	1	2	NA	合計
%	37.9	60.0	2.2	100.0

Q 2 : 飼育・栽培・採集などの自然体験

	1	2	NA	合計
%	31.2	67.9	0.9	100.0

Q 3 : インターネットやメールの利用の仕方

	1	2	NA	合計
%	24.2	74.5	1.3	100.0

Q 4 : 基本的な生活習慣に関すること

	1	2	NA	合計
%	4.6	94.1	1.3	100.0

Q 5 : 喫煙・飲酒・性・薬物等に関すること

	1	2	NA	合計
%	38.6	59.1	2.3	100.0

Q 6 : 防災・交通安全・不審者への対応など安全に関すること

	1	2	NA	合計
%	62.6	34.8	2.6	100.0

Q 7 : 人との接し方や友だち付き合いの仕方

	1	2	NA	合計
%	46.6	50.5	2.9	100.0

Q 8 : 公共のマナー

	1	2	NA	合計
%	23.7	73.9	2.4	100.0

3 あなたが学校教育で大切にしたいと思っていることについてお聞きします。つぎの中から大切にしたいと強く思うものを3つ選び、番号を口を書いてください

1 : 個性を伸ばす 2 : 学力を身につける 3 : 人と協力したりコミュニケーションしたりする力を身につける
4 : ストレスや困難に耐える力(がまんする心)を身につける 5 : 思いやりの心を育てる
6 : 人前でも恥ずかしくない言葉づかいや行いを身につける

	1	2	3	4	5	6
%	15.7	79.5	88.1	35.1	66.9	14.6

4 あなたは、保護者が学校のようなようすを知るとき、どのような情報を重視してほしいと思いますか。あてはまる番号を○で囲んでください

1：重視してほしい 2：どちらかといえば重視してほしい 3：どちらかといえば重視する必要はない
4：重視する必要はない

Q 1：「学校だより」や「学校の教育方針」などの配付物

	1	2	3	4	NA	合計
%	61.3	35.9	1.7	0.4	0.7	100.0

Q 2：学校のホームページ

	1	2	3	4	NA	合計
%	16.8	57.8	19.8	4.3	1.3	100.0

Q 3：「学級だより」「学年だより」などの配付物

	1	2	3	4	NA	合計
%	80.0	18.4	0.6	0.3	0.7	100.0

Q 4：参観会や学校行事などで直接見た学校のようなようす

	1	2	3	4	NA	合計
%	71.9	24.8	2.2	0.3	0.8	100.0

Q 5：我が子から聞く学校やクラスの話

	1	2	3	4	NA	合計
%	21.5	59.6	17.0	0.9	1.0	100.0

Q 6：同級生や子どもの友だちから聞く学校やクラスのようなようす

	1	2	3	4	NA	合計
%	11.6	48.0	36.6	2.7	1.1	100.0

Q 7：直接、教師が伝えた話

	1	2	3	4	NA	合計
%	82.8	15.5	0.7	0.3	0.8	100.0

Q 8：保護者どうしの話やメールなどでやりとりされる学校のこと

	1	2	3	4	NA	合計
%	1.3	15.3	55.8	26.6	1.0	100.0

Q 9：テレビや新聞で報道されるいろいろな学校の出来事

	1	2	3	4	NA	合計
%	2.4	24.8	54.8	16.9	1.0	100.0

5 保護者に対して不満や不信を感じたことがありますか。あてはまる番号を○で囲んでください

1：ある
2：ない

	1	2	NA	合計
%	84.6	13.8	1.6	100.0

「1：ある」を選んだ人にお聞きします。保護者に不満や不信を感じたとき、どのような行動でそれを表しましたか。あてはまる番号を○で囲んでください

1：たびたびしたことがある 2：たまにしたことがある 3：したことはない
※「1：ある」と答えたもの(実数：903)を100.0とした有効パーセントで表示

Q 1：直接、相手の保護者に伝える(電話で話す、手紙を書く)

	1	2	3	合計
%	17.1	45.3	37.6	100.0

Q 2：保護者面談や参観会、懇談会のときに伝える

	1	2	3	合計
%	14.0	49.1	36.9	100.0

Q 3：管理職や主任に伝える

	1	2	3	合計
%	45.2	51.1	3.7	100.0

Q 4：同僚や友人に話す(会って話す、電話で話すなど)

	1	2	3	合計
%	40.4	45.6	14.0	100.0

Q 5：同僚や友人にメールなどで伝える

	1	2	3	合計
%	2.4	8.4	89.1	100.0

6 保護者に対して共感や信頼を感じたことがありますか。あてはまる番号を○で囲んでください

1：ある
2：ない

	1	2	NA	合計
%	97.4	1.5	1.1	100.0

「1：ある」を選んだ人にお聞きします。学校や教員に共感や信頼を感じたとき、どのような行動でそれを表しましたか。つぎのことについてあてはまる番号を○で囲んでください

1：たびたびしたことがある 2：たまにしたことがある 3：したことはない
※「1：ある」と答えたもの(実数：1452)を100.0とした有効パーセントで表示

Q 1：直接、相手の保護者に伝える(電話で話す、手紙を書く)

	1	2	3	合計
%	54.1	40.8	5.1	100.0

Q 2：保護者面談や参観会、懇談会のときに伝える

	1	2	3	合計
%	58.9	38.5	2.6	100.0

Q 3：管理職や主任に伝える

	1	2	3	合計
%	38.9	54.0	7.1	100.0

Q 4：同僚や友人に話す(会って話す、電話で話すなど)

	1	2	3	合計
%	33.0	51.2	15.8	100.0

Q 5：同僚や友人にメールなどで伝える

	1	2	3	合計
%	2.9	9.4	87.7	100.0

7 つぎの各組のA・B2つの意見についてお聞きします。あなたの考えに近い番号を○で囲んでください

1 : Aに近い 2 : どちらかといえばAに近い 3 : どちらかといえばBに近い 4 : Bに近い

- Q 1 : A : 義務教育では、経済的に不利な家庭の子どもに対して、より手厚い支援や補助をすべきだ
B : 義務教育では、家庭の経済力に関係なく、どの子どもに対しても同様な支援や補助をすべきだ

	1	2	3	4	NA	合計
%	18.7	33.6	26.6	20.8	0.3	100.0

- Q 2 : A : どんな地方や地域でも同じ教育を受けられるよう、教育内容や授業時間数などは全国一律に決めることが望ましい

B : 地方や地域の特色を生かすように、教育内容や授業時間数などはそれぞれの地方や地域で決めることが望ましい

	1	2	3	4	NA	合計
%	15.2	26.5	41.1	16.9	0.3	100.0

- Q 3 : A : 全国学力調査の結果を学校ごとに公表して学校間の競争をうながせば、教育の効果は上がる
B : 全国学力調査の結果を学校ごとに公表すれば、学校間の競争がはげしくなり、学校教育が全国学力調査にかたよったものになる

	1	2	3	4	NA	合計
%	2.2	4.9	25.1	67.2	0.6	100.0

- Q 4 : A : 子どもの個性や家庭の考え方によって自由に学校を選ぶことができるので、学校選択制が広がることを望む
B : さまざまな個性をもった地域の子どもたちが同じ学校で学ぶことがたいせつだと思うので、学校選択制が広がることは望まない

	1	2	3	4	NA	合計
%	6.2	18.0	43.0	32.4	0.4	100.0

- Q 5 : A : 学校は、勉強の苦手な子どもに学力をつけることに力を入れるべきだ
B : 学校は、勉強の得意な子どもの学力を伸ばすことに力を入れるべきだ

	1	2	3	4	NA	合計
%	13.8	66.1	14.5	1.7	4.0	100.0

- Q 6 : A : 公立学校の教育は、何より学力（教科の知識や課題解決能力なども含む）の育成に力を入れるべきで、行事やクラブ活動などはできるだけ少なくすべきだ

B : 公立学校の教育は、人格形成や集団生活にも力を入れるべきで、行事や部活などにも力を入れるべきだ

	1	2	3	4	NA	合計
%	5.7	22.6	48.6	21.1	1.9	100.0

- Q 7 : A : 学校からよりよい教育サービスを受けるため、学校に問題があれば指摘し改善を求めたい
B : 学校に問題があれば、それを指摘するだけでなく、学校（先生）や他の保護者・地域と協力して問題の解決にとりくみたい

	1	2	3	4	NA	合計
%	2.1	8.8	42.2	46.1	0.9	100.0

8 : 勤務や保護者との関係などについてお聞きします。あてはまる番号を○で囲んでください

1 : そう思う 2 : どちらかといえば思う 3 : どちらかといえば思わない 4 : 思わない

- Q 1 : 自分の授業に満足している

	1	2	3	4	NA	合計
%	2.9	49.7	37.5	9.4	0.6	100.0

- Q 2 : 子どもたちとの関係は良好だ

	1	2	3	4	NA	合計
%	18.8	73.9	5.5	1.1	0.7	100.0

- Q 3 : 生徒指導の対応に難しさを感じている

	1	2	3	4	NA	合計
%	36.1	44.0	16.7	2.8	0.5	100.0

- Q 4 : 子どもの指導に対して保護者の協力が得られず苦慮することがある

	1	2	3	4	NA	合計
%	23.5	42.9	27.8	5.1	0.7	100.0

- Q 5 : 職場には協力し合える人間関係がある

	1	2	3	4	NA	合計
%	52.3	40.5	5.2	1.4	0.6	100.0

調 査 部

共同研究者

荻野 達史（静岡大学人文社会科学部教授）2013～2014 年度

所 員

2013 年度	2014 年度
紅林 進矢（田方支部）	紅林 進矢（田方支部）
加藤 宗重（駿東支部）	加藤 宗重（駿東支部）
日置 孝史（清庵支部）	山村 直弘（静岡支部）
川村 浩史（小笠支部）	小倉 圭司（榛原支部）
鈴木 智博（磐周支部）	鈴木 智博（磐周支部）
小山 貴広（浜松支部）	小山 貴広（浜松支部）

事 務 局

細川 幹太（所 長） 2013～2014 年度

鈴木 千晴（事務局長） 2013 年度

平柳有紀子（事務局長） 2014 年度

野中 律宏（事務局次長）2013～2014 年度

～保護者と教員に対する意識調査～ 保護者（家庭）と教員（学校）の共通理解に向けて

編集・発行：静岡県教職員組合立教育研究所調査部

〒420-0856

静岡市葵区駿府町1番12号 静岡県教育会館

発 行 者：静教組合立教育研究所運営委員長 鈴木 伸昭

発 行 日：2015 年 3 月



8つの事業団体に協力し、静岡県教育事業団体として、次のような活動をしています。

教育講演会

問い合わせ先 静岡県教育会館事務局 TEL 054-252-1011

専門家、著名人を招いて、県下24地域で実施予定（平成27年度）

教職員芸術祭

問い合わせ先 静岡県教職員組合芸術祭係 TEL 054-255-0156

教職員作成の作品を展示

〈第46回静岡県教職員芸術祭〉
展示期間 平成28年1月27日(水)～1月31日(日)
展示会場 静岡市清水文化会館 マリナート

小中学生国際交流体験団

問い合わせ先 国際交流体験団事務局
TEL 054-254-2486

オーストラリアとカナダでの国際交流体験の企画と実施

〈第42回〉平成27年8月 オーストラリア【8日間】 実施予定

〈第43回〉平成28年3月 カナダ【8日間】 実施予定



平成26年8月 第40回国際交流体験団
(オーストラリア・シドニーにて)

一般財団法人 静岡県教職員互助組合

生活に安心・元気・うるおいを！

冬季講座

望みがいい支援
公益・相談事業

経済支援
給付・貸付事業

健康支援
健康診断

ライフプランの応援団

スクールコンサート

静岡市葵区駿府町1-12 静岡県教育会館2F TEL 054-254-3626
互助組合ホームページは、[ここ](#)で検索

静岡県教職員生活協同組合



チラシ・カタログによる自主供給＆組織供給を主体とし、巡回供給、ガソリン供給、マンション、指定店など教職員のみなさまの生活をサポートしています。



静岡市駿河区登呂6-14-27 TEL 054-282-2140
HP <http://www.kyousyokuin-seikyoo.com/>

静岡県学校生活協同組合連合会



学生協は子どもの未来を考えます。

静岡県内の各地区学生協と連携して学用品を企画開発し、供給しています。



静岡市駿河区登呂6-14-27 TEL 054-282-2166
HP <http://www.kyousyokuin-seikyoo.com/>

一般社団法人 静岡県出版文化会



教育活動を支援する教育文化事業や子どもたちの学習活動を支える図書教材研究事業を行っています。県内各地から、毎年多くの先生がたが両事業に参加しています。



夏休み子ども
学習電話相談室

静岡市葵区駿府町1-12 静岡県教育会館3F TEL 054-255-4451
HP <http://www.syutubun.com/>

静岡県教育事業団体連絡会

教育と生活をサポート

私たち
教育事業団体は
みなさまの
サポーターです

公益財団法人 日本教育公務員弘済会静岡支部



教育振興（奨学・教育研究助成・教育文化）、福祉、共済（提携保険）の各事業で子どもたち、先生がた、保護者のみなさまの教育・研究活動を支援するとともに先生がたの生涯の安心をお届けしています。



静岡市葵区駿府町1-12 静岡県教育会館4F TEL 054-205-5130

株式会社 静岡教育出版社

環境・体にやさしい教材づくり

『ファミリス』
購読者拡大
キャンペーン
実施中!!

※年度途中からの購読も承ります。



静岡市駿河区曲金5-5-38 TEL 054-281-8870
HP <http://www.shizedpu.co.jp/>

国際観光株式会社



KOKUSAI 学ぶ心を広げる価値ある
修学旅行の推進

弊社では修学旅行の安全対策と学習指導要領の理解に重点をおいた社員教育を行い、魅力ある教育旅行を提供しています。



本社：静岡市葵区伝馬町6-18 109ビル5F TEL 054-254-2486
HP <http://www.kokusai-kanko.co.jp/>

静岡県住宅建設工業株式会社



住む人の心を癒し、住む人に適し、そして環境への優しさが満たされる健康な家を提案し、教職員の方々の希望に応えられるように最大限努力しています。



静岡市駿河区登呂6-14-14 TEL 054-281-2277
HP <http://www.jukenko.com/>

<http://www.stu.jp>

最後までお読みいただきありがとうございました。この所報をお読みになったご意見・ご感想をお寄せください。皆さんからいただいたご意見・ご感想は、今後の研究活動や成果発信に生かします。

STU Institute of Educational Research
静岡県教職員組合立教育研究所

FAX: 054-255-5110

Mail: sier@stu.or.jp (ご意見専用研究所メールアドレス)

